

拓殖大学大学院 言語教育研究科  
言語教育学 博士論文

# イメージ図式による授受動詞の指導法

—与え動詞「あげる・くれる」を中心に—

The method to teach “give” and “receive” verb  
through image diagram

Methods of Teaching *Juju* Verbs with the Aid of Cognitive Maps:  
Paying Special Attention to *Ageru* and *Kureru*

2013年3月

指導教授：石川 守 教授

鄭 光峰

# 目次

序章	はじめに	4
0. 1	研究目的	4
0. 2	研究方法	5
0. 3	本論文の構成	5
第1章	日本語の授受表現	9
1. 1	物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」	11
1. 1. 1	「主語の立て方+授受の方向性」による分類	11
1. 1. 2	「話し手の視点+主語の立て方」による分類	13
1. 1. 3	「話し手の視点+授受の方向性」による分類	14
1. 1. 4	「ウチ・ソトの概念」による分類	14
1. 1. 5	「恩恵性」による物の授受	17
1. 2	行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」	19
1. 2. 1	「恩恵」による行為の授受	19
1. 2. 2	「非恩恵」による行為の授受	22
1. 3	敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」	24
1. 3. 1	「上下関係」による分類	24
1. 3. 2	「内外関係」による分類	25
1. 4	まとめ	26
第2章	日中両語の授受表現	28
2. 1	日中両語の授受本動詞	28
2. 1. 1	日中両語の与え本動詞	28
2. 1. 2	日中両語の受け本動詞	30
2. 1. 3	日本語授受本動詞の恩恵性及び、それに対応する中国語	32
2. 2	日中両語の授受補助動詞	35
2. 2. 1	日中両語の与え補助動詞	35
2. 2. 2	日中両語の受け補助動詞	36

2. 2. 3	日本語授受補助動詞の非恩恵性及び、それに対応する中国語	38
2. 3	まとめ	40
第3章	諸言語における授受表現	43
3. 1	日本国内の授受動詞	43
3. 1. 1	現代日本標準語	43
3. 1. 2	日本語方言	44
3. 2	外国語の授受動詞	50
3. 2. 1	中国語	51
3. 2. 2	朝鮮語・韓国語	52
3. 2. 3	インドネシア語・マレー語	53
3. 2. 4	英語	54
3. 2. 5	ベトナム語	55
3. 2. 6	フィリピン語	56
3. 2. 7	スペイン語	58
3. 2. 8	ミャンマー語	59
3. 2. 9	トルコ語	61
3. 3	まとめ	63
第4章	日本語の授受表現の従来 of 指導法	67
4. 1	授受動詞の提出順序	67
4. 1. 1	日本語教材における授受動詞の提出順序	67
4. 1. 2	日本語教師用指導・参考書及び論文などにおける授受動詞の提出順序	72
4. 2	授受動詞の従来 of 指導法	76
4. 2. 1	人称制限による授受動詞の指導	76
4. 2. 2	実際の授受行為による授受動詞の指導	78
4. 3	日本語の授受動詞における習得研究	85
4. 3. 1	口頭データによる習得状況	85
4. 3. 2	作文データによる習得状況	86
4. 3. 3	空欄補充形式テストによる習得状況	86
4. 3. 4	絵を使用した文産出テストによる習得状況	87
4. 4	まとめ	90

第5章 日本語の授受表現の新たな指導法 .....	92
5.1 新たな指導法における提出順序 .....	92
5.2 新たな指導法における導入.....	93
5.2.1 「あげる」と「もらう」の関係・その基本図式.....	94
5.2.2 「もらう」と「くれる」の関係・その基本図式.....	95
5.3 「あげる」と「くれる」との使い分け・その図式.....	97
5.3.1 認知学習理論による「あげる」と「くれる」との関係.....	97
5.3.2 人と人とのやり取り・その図式 .....	101
5.3.3 会社と会社とのやり取り・その図式 .....	105
5.3.4 国と国とのやり取り・その図式 .....	106
5.4 まとめ .....	107
第6章 調査・考察.....	109
6.1 調査目的.....	109
6.2 調査協力者 .....	109
6.3 調査実施の方法 .....	109
6.4 調査結果の考察と分析 .....	110
6.5 まとめ.....	114
終章 おわりに.....	116
7.1 まとめ.....	116
7.2 今後の課題 .....	119
参考文献 .....	120
調査資料1 .....	126
調査資料2 .....	137
謝辞.....	142

## 序章 はじめに

### 0. 1 研究目的

日本語学習者にとって、習得の難しい学習項目の一つにいわゆる「日本語の授受表現」があげられる。その理由として考えられるのは、日本語の授受動詞は、一般的に与え動詞と受け動詞の2項体系しか持っていない多くの外国語と違って、与え動詞には「あげる」系・「くれる」系、受け動詞には、「もらう」系があり、3項体系という特異性を持っていることである。

そのため、日本語では、例文(1)のように、同じく物を与えるという意味を持つ動詞であっても異なった語彙を用いなければならない。

(1) 私は友達にXをあげた。

    友達は私にXをくれた。

このように、話し手が他者に物を与える時には「あげる」、他者が話し手に物を与える時には「くれる」が使われるのが基本であるが、後者の場合、例文(2)のように、受け手の対象が話し手ではないものに対してであっても、「あげる」ではなく、「くれる」が使われることがある。これが非母語学習者には難しく、混乱を招く原因となっている(堀口 1983、大塚 1995、坂本・岡田 1996)。

(2) 友達は妹にXをくれた。

    A社は我が社にXをくれた。

    アメリカは我が国にXをくれた。

なぜなら、「あげる・くれる」の用法には、話し手から見た「ウチ・ソト」の区別が大きく関与しており(牧野 1996)、その根底には、日本人の「ウチ(自己集団意識)」「ソト(他者集団意識)」が絶対的なものではなく、相対的であり(廣瀬 2001: 65)、「ウチ」と「ソト」の境界が話し手との関係から拡大、縮小するという自己意識と他者意識に関する日本語、日本文化特有の現象があるからである。

このように、日本語の授受動詞を文法的側面からも社会言語学的側面からも解明することは、日本語教育にとって有益なことではあるが、その分析・記述がどのように教育に応用されるのかということは、そう簡単な課題ではない（蒲谷 2001：52）。

そこで、本論文では、そうした難しさ、複雑さを持つ授受表現の「核」の部分、つまり、「ウチ・ソト」の概念をどのように捉え、「あげる」と「くれる」を区別するかについて考え、日本語学習者にとってより理解しやすい、より効果的な指導法を考案する。

## 0. 2 研究方法

授受表現は、従来の指導法では、教室内で実際に物を持って、やり取りをさせながら、授受動詞を教えていく（蒲谷 2001、庵 2011）のが一般的であると思われる。しかし、この具体的な人から人への物のやり取りという直接的な結合という方法だけでは、「あげる」と「くれる」の対立に大きく関与している認知的な内的過程である「ウチ・ソト」の区別、その相対性が学習者には分かりにくい。

そこで、筆者は、先行研究を分析し、様々な用例から授受動詞の用法の底にある関係を認知マップの観点からイメージ化し、図式として抽出し、それを基本図式と名づけた。

つまり、「あげる」「くれる」の区分の基礎になっている自己と他者との関係をまずその基本図式によって理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」を図式で理解させ、更に大きな関係へと拡大していくことによって、その相対性を総合的に理解し、練習できるように内的（認知的）な情報処理過程をビジュアルな図式で示す指導法を開発した。

## 0. 3 本論文の構成

第1章においては、主に日本語学における授受動詞の先行研究を綿密に分析し、日本語の授受動詞の基本的な意味・用法、及びその特徴を整理することによって、日本語の授受動詞が与え動詞に関して「あげる」「くれる」という二つに分かれ、更に受け動詞との3項体系を構成していることを明らかにした。しかも、この二つに分かれた与え動詞が人称によってではなく、話し手と与え手との「ウチ」と「ソト」という高度な社会的、文化的概念を背景に、状況に応じて様々に変化する複雑な構造を持っていることを指摘した。つま

り、日本語の授受動詞は、話し手が談話の流れの中で誰に視点をおくかという「話し手の視点」はもちろん、話し手との心理的な距離を表す「ウチとソトの概念」、目上とか同等とか目下とかいう「ウエとシタの概念」、与え手の行為が受け手にとって、恩恵・利益を表しているか否かという「恩恵・非恩恵の概念」という様々な要素が深く関わっていることを明らかにした。

第2章においては、日本語の授受動詞と中国語の授受動詞の共通点、相違点を明らかにするため、日本語の授受本動詞「あげる(やる)」「くれる」「もらう」「さしあげる」「くださる」「いただく」とそれに対応する中国語の授受表現、及び日本語の授受補助動詞「～てあげる(やる)」「～てくれる」「～てもらう」「～てさしあげる」「～てくださる」「～ていただく」とそれに対応する中国語の授受表現を、それぞれ「話し手の視点」に加え、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」という観点から分析した。その結果、中国語の授受動詞は、3項体系である日本語の授受動詞と異なり、2項体系を持っていることが分かり、「ウチ・ソト」「ウエ・シタ」「恩恵・非恩恵」による方向性はなく、与え手と受け手との間に、物及び行為の授受関係が生ずることを表すにすぎず、事実を中立的・客観的に表現するのが一般的であることが明らかになった。

第3章においては、更に、中国語以外に、学習者の多い言語を中心に筆者が直接会って調査が可能であった朝鮮語・韓国語、インドネシア語・マレー語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語と日本語の授受動詞を比較した。その結果、日本語と他言語との相違点を分析することによって、これらの言語が日本語の3項体系とは異なり、全て2項体系であることが分かった。更に、文献から、タイ語(田中 1997)、レト・ロマンス語・カザフ語・ヒンディ語・モンゴル語・ネパール語(山田 2004)、アラビア語(Ahmed 2006)、シンハラ語(Priyadarshani・浮田 2008)なども全て2項体系であり、3項体系を持つ言語は調査した範囲では日本語以外には見当たらず、与え動詞が一つであるという特徴を持つということも明らかになった。

これら2項体系の言語においては、与え手と受け手という常に一定した客観的な関係だけで語の選択が決まってくる。しかし、日本語の授受動詞の場合には、与え手と受け手以外に、話し手が主要な要素として加わっており、話し手から見た与え手と受け手との「ウチ・ソト」の関係が欠かせない要素となっている。また、日本国内で使われている方言も

調べたが、同じ与え動詞である「やる」と「くれる」の対立は、日本国内のどこにでも普遍的に存在するわけではなく、「やる」と「くれる」の区別がない方言も少なからず存在していることが分かった。

第4章においては、日本語教育の現場において授受動詞は、どのように扱われているのか、まず、いくつかの日本語教材及び、日本語教師用指導・参考書、論文などを取り上げ、「授受動詞の提出順序」「従来の授受動詞の指導」という二つの点から分析するとともに、日本語学習者による授受動詞の習得研究を「口頭データ」「作文データ」「空欄補充形式テスト」「絵を使用した文産出テスト」という4種類のデータ収集方法別に概観し、最後に、これまでの授受動詞の指導法の妥当性を検証した。その結果、授受動詞の提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順が一般的であり、授受動詞の指導には、「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の選択は、客観的な「人称」という概念では不十分であり、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定されるため、「ウチ・ソト」による指導が必要であることが分かった。更に、習得順序としては、話し手の視点と文の主語が一致する「あげる」「もらう」の方が主語が与え手で、話し手の視点が受け手である「くれる」より習得されやすく、授受動詞の習得に影響を及ぼす要因としては、「視点の置き方」が最も大きいことも明らかになった。

第5章においては、「あげる」と「くれる」の選択は、人称に代表される具体的な一つ一つの外的な存在によって決定されるのではなく、「ウチ・ソト」の関係という話し手にとっての内的な心的マップ・認知マップによってなされていることが分かった。つまり、個々の事例を記憶するのではなく、「ウチ・ソト」という話し手の心的マップ・認知マップに基づき個々の事例を導きだすのでなければ、決して習得には至らないことも判明した。

したがって、指導法として個々の事象を示すだけでなく、話し手から見た「ウチ・ソト」の関係という心的マップ、或いは認知マップのようなものを学習者の頭の中に形成していかなければならないため、新たな指導法としては、教室内で、具体的な物を用いた具体的な「あげる」「もらう」「くれる」の動作だけではなく、心的マップ・認知マップのようなイメージ図式、即ち線や図形による「図解法」を取り上げ、まず、「あげる」「くれる」の区分の基礎になっている自己と他者との関係を基本図式によって理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」を図式で理解させ、更に、大きな関係へと拡大し



ていくことによって、学習者が自ら心的マップ・認知マップのようなイメージマップによる「あげる」と「くれる」の使い分けの規則が理解できるような指導法を考案した。

第6章においては、第5章で新たに開発した指導法を用いて、初級日本語学習者を対象に復習の形（彼らは既に勉強していたため）で実際に授業を行い、授業前にはどのように認識していたのか、授業後にはどのように認識するようになったのかについて、感想を書いてもらう方法で調査・分析した。その結果、この指導法は斬新な方法で、使い分けがはっきりして、分かりやすかったと評価していることが分かった。

今後の課題として、まず、英語、スペイン語、ベトナム語などの受け動詞は、主語寄りの視点が好まれるため、使用制限を受けていることが分かったが、この点について更なる調査が必要ではないかと思う。

次に、新たに開発した指導法を用いて、既習の初級日本語学習者を対象に復習の形で実際に授業を行い、調査を行ったが、既習の初級日本語学習者のみならず、中・上級日本語学習者を対象にした調査や日本語の授受動詞を未習の日本語学習者を対象にした調査など、更なる調査や分析が必要ではないかという不足している部分や問題点にも気付かされ、これらを今後の課題としたい。

また、日本語の授受動詞には、単に物の授受を表す本動詞のみならず、恩恵の授受を表す補助動詞も、敬意の授受を表す敬語動詞の用法を調査・分析し、これらの指導法についても検討する必要があるのではないかと思う。

## 第1章 日本語の授受表現

日本語の授受動詞<sup>1</sup>には、基本的に、「やる」のグループ、「くれる」のグループ、「もらう」のグループの三つの動詞グループが存在し、「やる<sup>2</sup>」には「やる・あげる・さしあげる」、「くれる」には「くれる・くださる」、「もらう」には「もらう・いただく」が属している。

そして、これらは単独で本動詞として、物の授受関係を表す場合に加えて、他の動詞のテ形に接続して、補助動詞として行為（及びその行為の結果を生じる恩恵）の授受を表すのにもよく使用されている。また、丁寧さの表現として「さしあげる、くださる、いただく」という敬語動詞も存在している。これを表に表すと、次のようになる。（表1）

表1

本動詞		やる・あげる	くれる	もらう
	尊敬語	無	くださる	無
	謙譲語	さしあげる	無	いただく
補助動詞		～てやる・～てあげる	～てくれる	～てもらう
	尊敬語	無	～てくださる	無
	謙譲語	～てさしあげる	無	～ていただく

このように、複雑な授受表現を持つ言語は世界の言語の中でも珍しく（庵他 2000、山田 2011）、日本語の授受表現は、日本語文法研究における一大テーマでもある。したがって、これまでに数多くの研究が発表され、論じられ、その問題も多岐にわたるが、その中心は「視点の問題」「本動詞構文と補助動詞構文の関係の問題」である（益岡 2001 : 26）。

<sup>1</sup> 日本語の「授受動詞」は「受給動詞」「やりもらい動詞」とも呼ばれている（日高 2007 : 3）が、本論文では、「授受動詞」に統一する。

<sup>2</sup> 森本（1996 : 135）は、社会的な序列関係で、下になる相手に向かって使われる、つまり、親から子供、兄から弟、人間以外の動物、植物に使われる「やる」が、最近はあまり使われなくなり、その代わりに「あげる」を広く使う傾向が見られると述べている。例えば、「a. 近所の子どもにお菓子を（やる・あげる）。b. 息子にお菓子を（やる・あげる）。c. 犬にえさを（やる・あげる）。d. 花に水を（やる・あげる）。」の場合、規範的にはaが「あげる」、b～dが「やる」であろうが、実際には、a～dの全てで「あげる」を使う人も相当存在し、一般的傾向としては、「やる」が「あげる」に取って代わられつつあるのは確かであろうと庵（2011 : 50）も指摘している。そのため、ここでは、「やる」と「あげる」に共通する性質に言及する際は「あげる」で代表させる。

そこで、第1章では、宮地(1965)、豊田(1974)、大江(1975)、Kuno & Kaburaki(1975) 久野(1978)、松下(1978)、寺村(1982)、奥津(1983、1984a・b)、森田(1989)、川村(1991) 渡辺(1992)、澤田(1993)、大塚(1995)、坂本・岡田(1996)、牧野(1996)、沼田(1999)、 庵他(2000・2001)、坂本(2000)、山田(2000・2004)、益岡(2001)、橋本(2001)、廣瀬 (2001)、尹(2004)、日高(2007・2011)を参考に、日本語学習者の授受動詞の習得に最も 大きく影響を与えると思われる「視点の問題」に注目したい<sup>3</sup>。

そして、日本語の授受動詞を物の授受を表す「あげる(やる)」「くれる」「もらう」、行 為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」、敬意の授受を表す「さしあげ る」「くださる」「いただく」に分類し、「話し手の視点<sup>4</sup>」の観点から、日本語の授受表現の 意味・用法をそれぞれまとめることにする。

---

<sup>3</sup> 大塚(1995)、坂本・岡田(1996)、岡田(1997)、尹(2004a・b)などによると、日本語学習者の授受動詞の習得には 「視点の置き方」が大きく影響していると述べている。

<sup>4</sup> 話す人を指すには、「話し手」や「話者」や「発話者」などが用いられるが、ここでは「話し手」に統一する。そして 「視点」とは、話し手がどこに位置し、誰の気持ちになって事態を見ているかという、話し手の空間的、時間的、心理 的な位置を意味するものであり、それを示す表現を「視点表現」という(澤田1993)。

## 1. 1 物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」

まず、日本語の授受表現のうち、物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」における意味・用法を「話し手の視点」の観点からまとめてみることにする。但し、森田（1977：191）によると、物の授受を表す本動詞「あげる」「くれる」「もらう」には、「所有権」の移動を含意する表現もあり、これは、事物の所有者Aから他者Bへとその所有権を無償で移行する行為であるため、例文（3・4）のように、所有権の移動を伴わないものの移動を表す場合には、「あげる（やる）」「くれる」「もらう」などは用いられないが、ここでは、詳細まで言及しないことにする。

(3) 誰かが入り口でこの荷物を守衛にやったそうだ。(×)

誰かが入り口でこの荷物を守衛に渡したそうだ。(○)

(4) この荷物は守衛が入り口でもらった。(×)

この荷物は守衛が入り口で渡された。(○)

この荷物は守衛が入り口で受け取った。(○)

(用例は庵他（2001：162）より引用)

### 1. 1. 1 「主語の立て方+授受の方向性」による分類

奥津(1983)では、話し手は自分が視点を置くものを取り立てて文の主語とするとして、日本語の授受動詞を「主語の立て方」によって、物や行為<sup>5</sup>の「与え手<sup>6</sup>」が主語となる「与え動詞<sup>7</sup>」「(て) あげる、(て) くれる」と物や行為の「受け手」が主語になる「受け動詞」「(て) もらう」に分類した。

<sup>5</sup> 本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の場合、「与え手」から「受け手」に移動するものは「物」であり、一方、補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」の場合、「与え手」から「受け手」に移動するものは「行為（行為による恩恵）」であるが、奥津（1984b）、渡辺（1992）らによると、授受の方向性、つまり「物」の方向性、「行為（行為による恩恵）」の方向性は同じであるため、これに関しては、本動詞と補助動詞を一つにまとめて分析することにする。

<sup>6</sup> 「与え手・受け手」は、「やり手・もらい手」ともいうが、ここでは、「与え手・受け手」に統一する。

<sup>7</sup> 「与え動詞・受け動詞」を「授動詞・受動詞」「給与動詞・取得動詞」「授与動詞・受納動詞」ともいうが、ここでは、「与え動詞・受け動詞」に統一する。

それに加え、奥津(1983)では、日本語の授受動詞は、移動する物や行為が「身内」から「よそ者」への方向か、或いは「よそ者」から「身内」への方向かによって、「身内」から「よそ者」への方向性を持っている「(て)あげる」と「よそ者」から「身内」への方向性を持っている「(て)くれる、(て)もらう」に分類し、次のような図で示している(図1)。

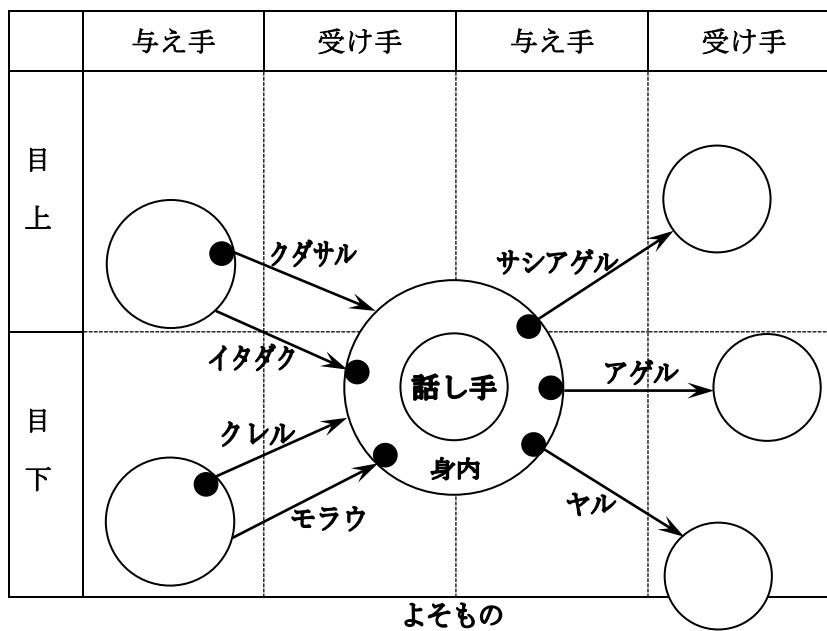


図1 奥津(1983:26)より

(ここでは、「→」は物・行為の方向、「●」は主語を表す)

以下は、奥津(1983)の説を筆者がまとめたものである<sup>8</sup>。

(て) あげる : 与え手が 受け手に (て) あげる。  
 与え動詞                      主語・視点                      身内→よそ者

(て) くれる : 与え手が 受け手に (て) くれる。  
 与え動詞                      主語・視点                      よそ者→身内

<sup>8</sup> これは坂本・岡田(1996)、尹(2004)を参考にまとめたものであり、ここでは、与え手を「      」、受け手を「      」、授受を表す動詞を「      」、物・行為の方向を「→」で示す。以下、同様である。

(て) もらう : 受け手が 与え手に (て) もらう。  
 受け動詞                      主語・視点                      身内←よそ者

### 1. 1. 2 「話し手の視点+主語の立て方」による分類

宮地(1965)、Kuno & Kaburaki(1975) は、日本語の授受表現を「主語の立て方」に加え、「話し手の視点」によって分類し、「(て) あげる」「(て) くれる」「(て) もらう」のそれぞれの構文における与え手の位置と受け手の位置、「話し手の視点」の位置について説明している。ここでの「話し手の視点」とは、文中の名詞句の指示対象に対する話し手の自己同一視化(共感度：Empathy<sup>9</sup>) のことを指している(久野 1978)。

宮地(1965)、Kuno & Kaburaki(1975) では、「(て) あげる」構文は、行為の与え手が主語の位置を占め、行為の受け手が間接目的語の位置に来る。話し手の視点は、主語の位置に来る行為の与え手に置かれる。これに対し、「(て) くれる」構文は、行為の与え手が主語の位置を占め、行為の受け手が間接目的語の位置に来る点は「(て) あげる」と同じであるが、話し手の視点は、主語の位置に来る行為の与え手ではなく、間接目的語の位置に来る行為の受け手の方に置かれる。「(て) もらう」構文は、これら二つの授受動詞とは大きく異なり、行為の主体、つまり与え手が間接目的語の位置に用いられ、行為の受け手が主語の位置に来て、話し手の視点は行為の受け手の方に置かれる。

以下は、宮地(1965)、Kuno & Kaburaki(1975) の説を筆者がまとめたものである。

(て) あげる : 与え手が 受け手に (て) あげる。  
 与え動詞                      主語・視点

(て) くれる : 与え手が 受け手に (て) くれる。  
 与え動詞                      主語                      視点

(て) もらう : 受け手が 与え手に (て) もらう。  
 受け動詞                      主語・視点

<sup>9</sup> 久野(1978:134)によると、「共感度」とは、文中の名詞句のX指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感(Empathy)と呼び、その度合、E即ち共感度を(X)で表す。共感度は、値0(客観描写)から値1(完全な自己同一視化)迄の連続体である。

### 1. 1. 3 「話し手の視点+授受の方向性」による分類

寺村(1982)、山田(2000)では、授受動詞における「話し手の視点」を物や行為の授受の方向性から捉え、「身内」から「よそ者」へ向かうか、或いは「よそ者」から「身内」へと向かうかによって分けられている。

「(て) あげる」と「(て) もらう」の場合は、両方とも主語に視点が置かれるが、「(て) あげる」の授受の方向性は「身内」から「よそ者」へ、「(て) もらう」の授受の方向性は「よそ者」から「身内」へ向かう。また、「(て) くれる」と「(て) もらう」の場合は、両方とも「よそ者」から「身内」へ向かい、授受の方向性は同じであるが、「(て) くれる」は間接目的語に視点が置かれ、一方「(て) もらう」は主語に視点が置かれている。

以下は、寺村(1982)、山田(2000)の説を筆者がまとめたものである。

(て) あげる :	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>(て) あげる。</u>
与え動詞	視点		身内→よそ者
(て) くれる :	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>(て) くれる。</u>
与え動詞		視点	よそ者→身内
(て) もらう :	<u>受け手が</u>	<u>与え手に</u>	<u>(て) もらう。</u>
受け動詞	視点		身内←よそ者

また、寺村(1982:133-135)は、「日本語のように、授受の方向がきまりの基本であることを表すためには、次のように矢印で示すほかないだろう。」とし、次のように話し手を中心にした図を示している。(16頁の図2を参照)

### 1. 1. 4 「ウチ・ソトの概念」による分類

牧野(1996)、沼田(1999)、廣瀬(2001)では、日本語の授受動詞を「ウチ・ソト」の関係によって分類し、「ウチ」とは、話し手自身も含み、話し手が自分と心理的に近いと見なす者をいい、それ以外の者は「ソト」とであると述べている。

「(て) あげる」の場合は、与え手側に視点が置かれ、与え手が「ウチ」、受け手が「ソト」の関係を表し、「(て) くれる」の場合は、受け手側に視点が置かれ、与え手が「ソト」、受け手が「ウチ」の関係を表す。また「(て) もらう」の場合は、受け手側に視点が置かれ、「与え手」は、少なくともソト化していなければならない。

以下は、牧野(1996)、沼田(1999)、廣瀬(2001)の説を筆者がまとめたものである。

(て) あげる :	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>(て) あげる。</u>
与え動詞	視点		ウチ→ソト
(て) くれる :	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>(て) くれる。</u>
与え動詞		視点	ソト→ウチ
(て) もらう :	<u>受け手が</u>	<u>与え手に</u>	<u>(て) もらう。</u>
受け動詞	視点		ウチ←ソト

更に、同じ文に与え手と受け手の二人の「ウチの人」がある場合、牧野(1996 : 74) は、話し手が受け手よりも与え手の方に強い共感を抱くという共感度の順位(ヒエラルキー ; hierarchy) がある限り、「あげる」を使ってもかまわないと述べている。

例えば、話し手が母より父の方により強い共感を抱く場合には、例文(5a)のように「あげる」が使える、話し手が父より母の方により強い共感を抱く場合には、例文(5b)のように「くれる」が使える。

- (5) a 父は母にチョコレートをあげた。  
 b 父は母にチョコレートをくれた。

(用例は(牧野 1996 : 74) より引用)

一方、藤田(2000 : 109) は、話し手がやり取りの中で、どのような利益を得たかによって、「あげる」を使うか、「くれる」を使うかが決められると述べている。

例えば、話し手が飴(この飴は弟の次郎が母親からもらったのを分けてもらったもの)



をなめていて、お父さんから「その飴どうしたんだ？」と聞かれた時には、例文（6a）より、例文（6b）のように「くれる」を使った方がより自然であり、一方、いつも弟の次郎ばかりえこひいきしている母親に向かって文句を言う時には、例文（7a）より、例文（7b）のように「あげる」を使った方がより自然であるとしている。

(6) a うん、お母さんが次郎にあげたのを僕も分けてもらったんだ！

b うん、お母さんが次郎にくれたのを僕も分けてもらったんだ！

(7) a お母さんたら、いつも次郎にお菓子をくれてばかりいて！

b お母さんたら、いつも次郎にお菓子をあげてばかりいて！

(用例は（藤田 2000 : 109-110）より引用)

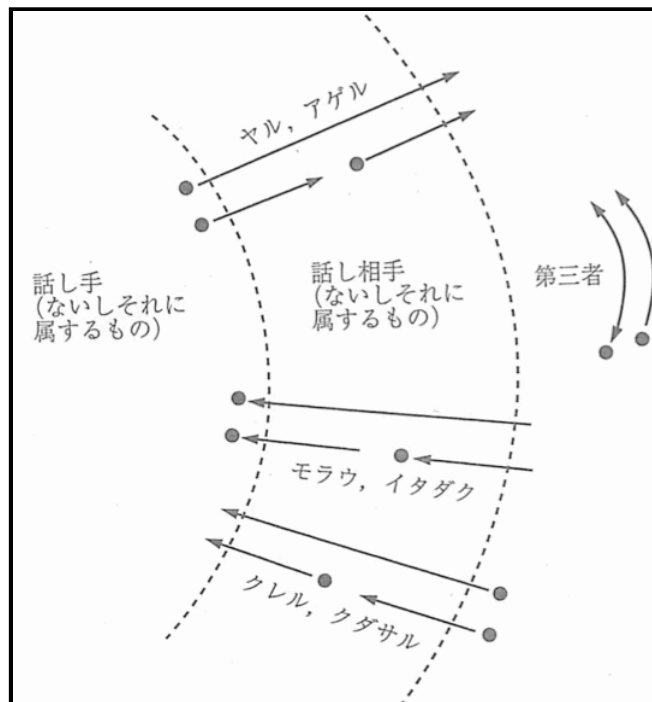


図2 寺村 (1982) より

(ここでは、「→」は物・行為の方向、「●」は主語を表す)

### 1. 1. 5 「恩恵性」による物の授受

本動詞「あげる」「くれる」「もらう」は、単に事物の授受を表すだけでなく、通常、授受の対象である事物が当事者にとって「好ましい」ものであるという性質、つまり「恩恵性」も持っており（益岡 2001 : 27）、そして、これらの使用にも、話し手の主観の問題、つまり話し手の視点が大きく関係している（川村 1991 : 54）。

では、例文を見てみよう。

(8) a 多くの学生に優を与えた。

多くの学生に優をやった。

b 一部の学生に不可を与えた。

?一部の学生に不可をやった<sup>10</sup>。

c 職員に優待券を渡した。

ぼくに優待券をくれた。

d 即座にイエローカードを渡した。

?即座にイエローカードをくれた。

e 教え子から歳暮を受け取った。

教え子から歳暮をもらった。

f 脅迫状を受け取った。

?脅迫状をもらった。

(用例は（益岡 2001 : 27）より引用)

---

<sup>10</sup> ここでは、不自然だと思われる文を「?」で示す。

益岡（2001：27）によると、例文（8a、c、e）における「優」「優待券」「歳暮」は好ましいものであるが、例文（8b、d、f）における「不可」「イエローカード」「脅迫状」は好ましくないものである。「与える」「渡す」「受け取る」においては、授受の対象が好ましいものでなくてもよいのに対して、「やる（あげる）」「くれる」「もらう」においては、授受の対象は通常好ましいものに限られているとしている。

また、川村（1991：54）は、話し手の主観によって使い分けられる言葉が存在する場合、同一の行為を授受動詞を用いて表現したか用いずに表現したかでその行為に対する話し手の心的態度の違いを示し、例文（9a）から分かるように、非授受動詞「受け取る」と授受動詞「もらう」を用いることによって、意味が明らかに異なって感じられると述べている。

つまり、本が「贈り物」として扱われた場合、「もらう」の代わりに「受け取る」を用いて表現してしまうと、例文（9b）と同じように、相手に失礼となり、人間関係にまで影響を及ぼしかねない。このような現象の背後には、日本人特有の文化が働いているものとも考えられ、そこには、いわゆる日本人の「気配りの原則」というものが潜んでいるのではないかと橋本（2001：49）は指摘し、この「気配りの原則」について、次のように述べている。

「社会的行為の大きな目標は、『相手に礼を尽くし良好な関係を維持する』というところにあり、その多くは言語行為によって仲介される。例えば、『要請する』といった行為指示型言語行為の場合、それ自体、相手に何らかの負担（コスト）を強いるものであり、社会的行為の大前提と一致させるために、(a)他者に対する負担を最小限にし、或いは (b) 他者に対する利益を最大限にする、という配慮を言語上で工夫しなければならない。」

(9) a 友達から本を受け取った。

友達から本をもらった。

b? 「昨日あなたが与えたケーキどこのケーキ？」

? 「誕生日に受け取った本おもしろかったですよ。ありがとう。」

(用例は（川村 1991：54）より引用)

## 1. 2 行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」

次に、日本語の授受表現のうち、行為の授受を表す補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」における意味・用法を「話し手の視点」の観点からまとめてみることにする。

但し、豊田（1974：77）によると、一般の動詞のあとについて意味を添える動詞を、一般の動詞（本動詞）に対して、「たすける動詞」、「補助動詞」、「添動詞」とも呼ぶというが、ここでは「補助動詞」に統一する。また、補助動詞には「～てさしあげる」「～てくださる」「～ていただく」のような表現も存在するが、これらの表現には、待遇的な要素が含まれている（豊田 1974：78）ため、本論文の対象から外す。

### 1. 2. 1 「恩恵」による行為の授受

物の授受を表している本動詞「あげる」「くれる」「もらう」は、他の動詞のテ形に接続して、補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」としても使われ、行為の授受を表しているが、これらについて、松下（1978）は、それぞれ「自行他利態（自分が行動して他人に利益を与える場合）」、「他行自利態（他人が主体となって、自分に利益を与えるように行動する場合）」、「自行自利態（実際に行為をするのは自分ではないが、「もらう」主体が自分である場合）」と名づけている。

この物の授受を表している本動詞「あげる」「くれる」「もらう」も、行為の授受を表している補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」も、授受の方向性、つまり「物」（本動詞）の方向性、「行為」（補助動詞）の方向性は同じであると、奥津（1984b）、渡辺（1992）らはいっているが、恩恵・利益（以下「利益」を省略する）を表しているか否かという点では、本動詞「あげる」「くれる」「もらう」と補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」は異なっていると庵他（2000）、山田（2004）らは述べている。

更に、補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」について、ある行為を恩恵の移動とみなすかどうかはあくまでも話し手の主観の問題であると川村（1991：54）は指摘している。

また、大塚（1995）は、客観的な事実、例えば「男の人が女の人に席を譲る」という文を話し手の視点から恩恵的に述べる場合、例文（10）のように、三つの表現が可能であると述

べている。

(10) a 男の人が 女の人に 席を 譲ってあげる。

b 男の人が 女の人に 席を 譲ってくれる。

c 女の人が 男の人に 席を 譲ってもらう。

(用例は大塚(1995 : 282-283)より引用)

この場合、いずれの例とも「男の人」は恩恵を与える人で、「女の人」は恩恵を受ける人であり、そして「席を譲る」という行為が「女の人」にとっての恩恵である。

具体的にいうと、例文(10a・b)では、どちらも恩恵を与える人(男の人)を主語とし、恩恵を受ける人(女の人)を対象語としているが、その中で、「譲ってあげる」の文は、話し手が「与え手」である「男の人」の立場に身をおき、その気持ちになって、席を譲るという行為を捉えたものであるのに対し、「譲ってくれる」は「受け手」である「女の人」の立場に立って述べたものである。そして、例文(10c)は、恩恵を受ける人(女の人)を主語とし、恩恵を与える人(男の人)を対象語としており、「譲ってもらう」の文は「譲ってくれる」と同様、「受け手」である「女の人」の立場に立って述べたものと思われる。

以下は、川村(1991)、大塚(1995)の説を筆者なりにまとめたものである。

(て) あげる : 与え手が 受け手に (て) あげる。  
与え動詞                      視点                      恩恵与え側→恩恵受け側

(て) くれる : 与え手が 受け手に (て) くれる。  
与え動詞                      視点                      恩恵与え側→恩恵受け側

(て) もらう : 受け手が 与え手に (て) もらう。  
受け動詞                      視点                      恩恵受け側←恩恵与え側

但し、「～てあげる」の場合、押しつけがましさが強い（庵 2011 : 52）ため、「～てあげる」は「～てくれる」「～てもらう」に比べて使用頻度が低いという（益岡・田窪 1992 : 87）。

例えば、庵他（2000 : 112）は、次の例文（11a）のように、受け手が目下のものであれば問題ないのに対し、例文（11b）のように、受け手が目上の場合、直接本人に対しては使えないが、そうでなければ使うことができるとしている。

では、例文を見てみよう。

- (11) a 息子に本を読んであげた。  
b? 先生に本を読んであげた。

（用例は（庵 2011 : 52）より引用）

このように、恩恵を与える側に立つ「～てあげる」は、「～てくれる」「～てもらう」が積極的に用いられているのとは対照的に、その使用が敬遠されているが、この現象の背後には「相手の心の負担に対する配慮」が働いているものとも考えられると川村（1991 : 57）は指摘し、自分が相手に恩恵を与える立場になったとき、こちらからの恩恵行為によって生ずる相手側の精神的負担をできるだけ軽くしようとする配慮が働くことになり、それが「相手の心の負担に対する配慮」であると述べている。

一方、橋本（2001 : 50 - 51）によると、「～てあげる」の使用には、目上・目下の関係において平等か目下の、かなり親密な関係に限られているものの、押しつけがましさに他に、「親しさ」もあり、例えば、単に「弁当を作ってこようか？」というよりも「弁当を作ってきてあげようか？」といった方がむしろ親愛の情を感じさせるといい、その理由については、「互酬性に基づく親密さの原則：自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる」と説明している。

## 1. 2. 2 「非恩恵」による行為の授受

前節で述べたように、日本語の授受補助動詞の用法としては、「与え手」から「受け手」に恩恵が及ぶことを表すのが基本であるが、庵他(2001:168)によると、例文(12)のように、ごく例外的に非恩恵的な意味を持つ場合もあり、話し言葉的な性質から日常的によく使われているという。

これに関する先行研究としては、鈴木(1972)、豊田(1974)、大江(1977)、由井(1990・1996)、山田(2004)などがあるが、ここでは、簡単に紹介するにとどめる。

では、例文を見てみよう。

(12) a 大金をふんだくってやる<sup>11</sup>。

腹が立つのでどなりつけてやった。

b とんだことをしてくれたなあ。

よくもひとの顔に泥を塗ってくれたなあ。

(用例は(豊田1974:79)より引用)

c 断りなしに他人の部屋に入ってもらっちゃ迷惑だ。

あんなひどい点を付けてもらっちゃ大変だ。

(用例は(森田1989:1167)より引用)

鈴木(1972)は、例文(12a)は、無法に大金を取り上げられる人、どなられた人は迷惑を被っており、利益どころか、相手に不利益を与えられる表現であり、一方、例文(12b)は、その行為実行が自分にとって困ることになり、不利益(害)を受けられる表現であると述べている。例文(12c)も例文(12b)と同様にして理解できる。

このように、これらの場合、恩恵・利益は意味せず、不利益・迷惑、即ちマイナスの利

<sup>11</sup> 益岡(2001:30)は、「～てあげる」は「～てやる」と違って、通常、非恩恵的な用法を持たず、この点については、敬語の問題と絡めて考察する必要があると指摘している。

益を受けており、それが授受の補助動詞を伴って表現されている。



### 1. 3 敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」

最後に、日本語の授受表現のうち、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」における意味・用法を「話し手の視点」の観点からまとめてみることにする。

#### 1. 3. 1 「上下関係」による分類

敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」は、与え手と受け手の間に上下関係がない場合に用いられる「あげる（やる）」「くれる」「もらう」とは違い、「与え手と受け手の上下関係」によって区別される。「与え手と受け手の上下関係」とは、話し手の「私」と他者との間における社会的、身分的高さを設定し、その人に対する尊敬を表すための表現であると大江（1975）は述べている。

つまり、奥津（1983）、日高（2011）も述べているように、話し手の視点から見て、与え手（主語）が下位者、受け手が上位者に位置づけられ、与え手が受け手に物を与える場合には、尊敬語の「さしあげる」が用いられ、一方、与え手（主語）が上位者、受け手が下位者に位置づけられ、与え手が受け手に物を与える場合には、尊敬語の「くださる」が用いられる。また、受け手（主語）が下位者、与え手が上位者に位置づけられ、受け手が与え手から物を受け取る場合には、謙遜語の「いただく」が用いられるということになる。

以下は、大江（1975）、奥津（1983）、日高（2011）の説を筆者なりにまとめたものである。

さしあげる：	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>さしあげる。</u>
与え動詞	シタ・視点	ウエ	シタ→ウエ
くださる：	<u>与え手が</u>	<u>受け手に</u>	<u>(て) くれる。</u>
与え動詞	ウエ	シタ・視点	ウエ→シタ
いただく：	<u>受け手が</u>	<u>与え手に</u>	<u>(て) もらう。</u>
受け動詞	シタ・視点	ウエ	シタ→ウエ

### 1. 3. 2 「内外関係」による分類

また、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」には、与え手と受け手の上下関係が存在している一方、ただ物の授受を表す「あげる（やる）」「くれる」「もらう」と同様、「ウチ」と「ソト」の関係も存在していると庵他（2000：110）は指摘している。

では、例文を見てみよう。

- (13) a 父の誕生日にプレゼントを（×さしあげました/○あげました）。
- b 父がこの本を（×くださいました/○くれました）。
- c 父からこの本を（×いただきました/○もらいました）。

（用例は（庵他 2000：110）より引用）

このように、「私」と「父」がやり取りをする場合、「私」にとって、「父」は目上の人であっても、家族の一員、つまり「ウチ」の人であるため、例文（13a）のように、「私」が「父」にプレゼントを与える時には、敬意の授受を表す「さしあげる」は使えず、「あげる」が使われ、例文（13b）のように、「父」が「私」に本を与える時には、敬意の授受を表す「くださる」は使えず、「くれる」が使われる。また、例文（13c）のように、「私」が「父」から本を受け取る時には、敬意の授受を表す「いただく」は使えず、「もらう」が使われる。

## 1. 4 まとめ

以上、授受表現を物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」、行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」に分類し、日本語の授受表現における意味・用法をそれぞれ見てきたが、これらの特徴をまとめると、以下のようになる。

- 1) まず、日本語の授受表現は、物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」にしる、行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」にしる、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」にしる、いずれも「誰が誰に」という「与え手」・「受け手」の関係と同時に、話し手の立場から「与える・受ける」の行動を表現するのが日本語の特徴であり、「話し手の視点」という要因は日本語の授受表現に深く関わっているということが分かる。
- 2) 次に、日本語の授受表現は、物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」にしる、行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」にしる、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」にしる、同じ「授受の方向性」、つまり「身内からよそ者への方向か」、「よそ者から身内への方向か」によって決められるのが日本語の特徴であり、「ウチ・ソト」という概念は日本語の授受表現に欠かせないものである。また、敬語動詞「さしあげる」「くださる」「いただく」の場合、「与え手と受け手の上下関係」によって区別されるのも日本語の特徴であり、「ウチ・ソト」という概念と同じように、「ウエ・シタ」という概念も日本語の授受表現には欠かせないものであるといえる。
- 3) 最後に、日本語の本動詞「あげる」「くれる」「もらう」「さしあげる」「くださる」「いただく」は、単に物の授受を表すだけでなく（「さしあげる」「くださる」「いただく」の場合は、敬意も表す）、通常、授受の対象である物が当事者にとって「好ましい」ものであるという「恩恵性」も表している。そして、その「恩恵性」がそのまま引き継がれ、補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」は恩恵・利益の授受を表し、行為のやり取りをする場合に使われることが多い。このように、物・行為のやり

取りをする時に、「恩恵性」を表すのも日本語の特徴であり、「恩恵性」という要素は日本語の授受表現に欠かせないものであるといえる。

## 第2章 日中両語の授受表現

第1章では、物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」、行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」をそれぞれ見てきたが、これら日本語の授受表現には、「話し手の視点」はもちろん、「ウチ・ソト」「ウエ・シタ」「恩恵性」という要素が深く関わっているといえよう。

そこで、第2章では、日本語と中国語における授受表現を、呂他(1980)、奥津・徐(1982)、朱(1982)、奥津(1983・1984a・b)、党(1991)、水野(1994)、徐(2003)、門和(2006)、陳・周(2009)を参考に、「話し手の視点」に加え、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」という観点から日中両語の関係を調べることにする。

### 2. 1 日中両語の授受本動詞

まず、日中両語の授受表現のうち、日本語の授受本動詞「あげる(やる)」「くれる」「もらう」「さしあげる」「くださる」「いただく」とそれに対応する中国語の授受表現を見てみたい。

#### 2. 1. 1 日中両語の与え本動詞

日本語の与え動詞「あげる(やる)」「くれる」「さしあげる」「くださる」に対応する中国語としては、与え動詞“给”が一般的であると奥津(1983, 1984a・b)は指摘している。

但し、呂他(1980)によると、“给”は、与え動詞として以外に、使役や受身、更に受益者や目標を示すなど、種々な意味があり、品詞論的には本動詞として以外に、いわゆる介詞としても使われたりすると説明しているが、本論文では、日本語を中国語と対照しながら、日本語の授受表現を中心として追及するため、与え動詞として使われている“给”の他には言及しない。

では、例文を見てみよう。

(14) a 僕は李君に本を一冊あげた(やった)。

我给了小李一本书。

- b 李君は僕に本を一冊くれた。  
小李给了我一本书。
- c 僕は李先生に本を一冊さしあげた。  
我给李老师一本书。
- d 李先生は僕に本を一冊くださった。  
李老师给了我一本书。

(用例は (奥津 1984a : 80) より引用)

ここで、日中両語の与え動詞を比較してみると、日本語の場合、例文 (14a・c) のように、話し手 (僕) から見て、ウチ<sup>12</sup> (僕) からソト (李君・李先生) への物 (本) の移動を表す時には、「あげる (やる)・さしあげる」が用いられ、逆に、例文 (14b・d) のように、ソト (李君・李先生) からウチ (僕) への移動を表す時には「くれる・くださる」が用いられる。これらの使い分けには、「ウチ・ソト」による視点に関する。

一方、中国語の場合、例文 (14a・c) のように、ウチ (我) からソト (小李・李老师) への物 (書) の移動にも、例文 (14b・d) のように、ソト (小李・李老师) からウチ (我) への物 (書) の移動にも、同一の表現“给”が用いられ、「ウチ・ソト」による視点の制約は受けない。

また、日本語の場合、例文 (14c) のように、話し手 (僕) から見て、シタ (僕) からウエ (李先生) への物の移動を表す時には、「さしあげる」が用いられ、逆に、例文 (14d) のように、ウエ (李先生) からシタ (僕) への物の移動を表す時には「くださる」が用いられる。これらの使い分けには、「ウエ・シタ」による視点に関する。

一方、中国語の場合、例文 (14c) のように、シタ (我) からウエ (李老师) への物の移動にも、例文 (14d) のように、ウエ (李老师) からシタ (我) への物の移動にも、同一の表現“给”が用いられ、「ウエ・シタ」による視点の制約は受けない。

つまり、日本語の与え動詞「あげる (やる)」「くれる」「さしあげる」「くださる」は、「ウ

<sup>12</sup> 第1章でも述べたように、「ウチ」とは、話し手自身も含み、話し手が自分と心理的に近いと見なす者をいい、それ以外の者は「ソト」である(牧野 1996、沼田 1999、廣瀬 2001)。

チ・ソト」の視点や「ウエ・シタ」の視点によって使われる動詞が異なるが、中国語は“給”のみであることが分かる。

## 2. 1. 2 日中両語の受け本動詞

日本語の「もらう」「いただく」に相当する受け動詞については、中国語でこれに当たるものには、“要・收・受・拿・領・收受・收到・接受・接到・得到・拿到・領受・領取・請領”など、多種多様であるが、それぞれ少しずつ用法が異なり、“給”のようにそれ一語でほとんど用が足りるというような一般的な受け動詞はないと奥津（1984a：81）は指摘している。

但し、日本語の受け動詞に相当する中国語は、上記のように多数あるが、物のやり取りに関しては、主に“得到”が用いられており、中国でよく使われている日本語教材「中日交流標準日本語初級（上・下）」においても、主に“得到”が用いられているため、ここでは、“得到”を中心として、両者の関係を調べる。

では、例文を見てみよう。

(15) a 僕は李君から本をもらった。(作例)

我从小李那里得到一本书。

b 僕は李先生から本をいただいた。(作例)

我从李老师那里得到一本书。

c 僕はお父さんから本をもらった。(作例)

我从爸爸那里得到一本书。

ここで、日中両語の受け動詞を比較してみると、日本語の受け動詞「もらう」「いただく」にも、与え動詞「あげる（やる）・くれる・さしあげる・くださる」と同様、「内外関係」「上下関係」の要素が含まれているが、中国語の受け動詞にはそのような区別はないということが分かる。

例えば、日本語の場合、例文（15a）のように、話し手（僕）から見て、対等の人、或い

は下の人（李君）から物（本）を受け取る時には、「もらう」が用いられ、逆に、例文（15b）のように、上の人（李先生）から物（本）を受け取る時には、「いただく」が用いられる。

一方、中国語の場合、例文（15a）のように、「ウエ・シタ」に関係なく、僕（我）が、対等の人、或いは下の人（小李）から物（書）を受け取る時にも、例文（15b）のように、上の人（李老師）から物（書）を受け取る時にも、同一の表現“得到”が用いられる。

また、日本語の場合、例文（15c）のように、話し手（僕）から見て、上の人（お父さん）から物（本）を受け取る場合には、僕とお父さんは親子関係、つまり、ウチ関係であるため、「いただく」は用いられず、「もらう」が用いられるのが一般的であるが、中国語の場合には、このような制限はなく、どのような場合でも、同一の表現“得到”が用いられる。

更に、中国語は与え動詞が受け動詞より優勢な体系を持つ言語であるため、日本語では、「もらう」「いただく」と訳されている場合でも、中国語では、“给”を使用している例が多い。その理由について、奥津（1984a : 75）は、与え動詞が優勢であるのは、事物の移動をまず引き起こすのは与え手であって、これに視点が置かれやすく、受け動詞はその結果を受け取るという受動的な動きしか表さないからであろうかと述べている。

では、例文を見てみよう。

(16) a 私は田中先生からこの本をいただきました。

我从田中老师那里得到这本书。

a' 私は田中先生からこの本をいただきました。

田中老师给了我这本书。

b 太郎はお母さんから毎日小遣いを百円もらう。

太郎每天从妈妈那里拿到一百日元零用钱。

b' 太郎はお母さんから毎日小遣いを百円もらう。

妈妈每天给太郎一百日元零用钱。

（用例は（奥津 1984a : 82、85）より引用）



このように、「もらう」「いただく」に対応する中国語の訳文としては、例文（16a・b）のように、“得到”“拿到”が用いられることもあれば、例文（16a'・b'）のように、“给”が用いられることもあるが、奥津のいう通り、中国語の場合は、受け動詞より与え動詞の方が優位であるため、“得到”“拿到”より、“给”の方が使われやすく、中国語としては、より自然ではないかと思われる。

これらの違いについて、党(1991)は、まず“得到”“拿到”文の主語は、受け手（我）（太郎）で、“给”文の主語は、与え手（田中老师）（妈妈）である。次に、前者は、行為の積極性について曖昧な表現で、受け手、与え手、どちらが積極的な行為者か分からず、ただその「もらった事実」を表現しているのに対し、後者は、与え手を中心とする表現で、与え手に積極的に働きかける行為を表していると述べている。

## 2. 1. 3 日本語授受本動詞の恩恵性及び、それに対応する中国語

日本語授受動詞の恩恵性及び、それに対応する中国語については、第1章の1.5節（17頁）でも述べたように、「あげる（やる）」「くれる」「もらう」は、単に物の授受を表すだけでなく、通常、授受の対象である物が当事者にとって「好ましい」ものであるという性質、つまり「恩恵性」を持っているが、中国語には、そのような「恩恵性」は見られない。

そこで、ここでは、前章の1.5節で取り上げた益岡の例文に、中国語訳を加え、日本語と中国語を比較してみることにする。

では、例文<sup>13</sup>を見てみよう。

(17) a 多くの学生に優を与えた。

给了大多数学生优。

多くの学生に優をやった。

给了大多数学生优。

b 一部の学生に不可を与えた。

给了一部分学生不及格。

<sup>13</sup> 日本語の用例は、益岡（2001：27）より引用した。中国語文は筆者による訳である。

?一部の学生に不可をやった。

给了一部分学生不及格。

c 職員に優待券を渡した。

给了职员优待券。

ぼくに優待券をくれた。

给了我优待券。

d 即座にイエローカードを渡した。

当场给了黄牌。

?即座にイエローカードをくれた。

当场给了黄牌。

e 教え子から歳暮を受け取った。

从学生那里收到了年货。

教え子から歳暮をもらった。

从学生那里收到了年货。

f 脅迫状を受け取った。

收到了恐吓信。

?脅迫状をもらった。

收到了恐吓信。

益岡 (2001) は、例文 (17a、c、e) における「優」「優待券」「歳暮」は好ましいものであるが、例文 (17b、d、f) における「不可」「イエローカード」「脅迫状」は好ましくないものである。「与える」「渡す」「受け取る」においては、授受の対象が好ましいものでなく

てもよいのに対して、「やる（あげる）」「くれる」「もらう」においては、授受の対象は通常好ましいものに限られているとしている。

これに対して、中国語の場合は、上記の説に見られる通り、「与える」「渡す」「受け取る」にしろ、「やる（あげる）」「くれる」「もらう」にしろ、与え動詞の場合は、(17a、b、c、d)のように、同じ表現“给”が使われ、受け動詞の場合は、(17e、f)のように、同じ表現“收到”が使われており、移動する物の好ましさと動詞の選択とは関係がなく、「恩恵性」も見られない。

## 2. 2 日中両語の授受補助動詞

次に、日中両語の授受表現のうち、日本語の授受補助動詞「～てあげる（やる）」「～てくれる」「～てもらう」「～てさしあげる」「～てくださる」「～ていただく」とそれに対応する中国語の授受表現を見てみたい。

### 2. 2. 1 日中両語の与え補助動詞

日本語の与え補助動詞は、中国語の“帮・给・为・请”などに対応する（陳・周 2009）が、本動詞の時と同様、「～てあげる（やる）」「～てくれる」「～てさしあげる」「～てくださる」の5語に対し、中国語では“给”一つで足りると奥津(1984b)は指摘している。ここでは、“给”を中心として、両者の関係を調べることにする。

では、例文<sup>14</sup>を見てみよう。

(18) a 太郎は花子にピアノを弾いてあげた（やった）。

太郎给花子弹了钢琴。

b 太郎は花子にピアノを弾いてくれた。

太郎给花子弹了钢琴。

(19) c 私は先生にピアノを弾いてさしあげました。

我给老师弹了钢琴。

d 先生が私にピアノを弾いてくださいました。

老师给我弹了钢琴。

このように、日本語文 (18) (19) の「～てあげる（やる）」「～てくれる」「～てさしあげる」「～てくださる」に対応する中国語の訳文としては、“给”が用いられ、基本的な意

<sup>14</sup> 用例 (18) は作例で、その中国語訳も筆者によるものであるが、用例 (19) は奥津(1984b : 15)より引用し、その中国語訳は原文に付いていたものである。

味は、本動詞の場合と同じであるが、ただ「与え手」から「受け手」に移動するものは、例文 (18) (19) のように、「物」ではなく、「与え手」の行為であり、「受け手」にとって恩恵 (利益) となるものである。

例えば、日本語の場合、例文 (18) では、「太郎」は恩恵を与える人で、「花子」は恩恵を受ける人であるが、例文 (18a) の「～てあげる (やる)」では、どちらかといえば、話し手が利益を与える人、つまり「太郎」の立場から表現しており、この場合には「太郎」が「ウチの人」となり、「花子」が「ソトの人」となる。一方、例文 (18b) の「～てくれる」では、話し手が恩恵を受ける人、つまり「花子」の立場から表現しており、この場合には「花子」が「ウチの人」となり、「太郎」が「ソトの人」となる。

しかし、中国語の場合、例文 (18a・b) では、“弾钢琴 (ピアノを弾く)” という“太郎 (太郎)”の行為が、“太郎 (太郎)”から“花子 (花子)”に移動するという事実を述べているだけで、日本語では、それぞれ違う意味を持っている文「太郎は花子にピアノを弾いてあげた (やった)」「太郎は花子にピアノを弾いてくれた」に対し、中国語では、全く同じ文“太郎给花子弹了钢琴”になってしまう。例文 (19) も同様にして理解できる。

## 2. 2. 2 日中両語の受け補助動詞

日本語「～てもらう」「～ていただく」に対応する中国語表現としては、“请・让・要・叫・派・动员・托・找・喊”など、多数あり、完全に一致するものはないが、その中で、最も適当なのは、“请<sup>15</sup>”であると奥津・徐 (1982) は指摘している。そこで、ここでは、“请”を中心として、両者の関係を調べてみることにする。

では、例文を見てみよう。

(20) a 僕たちは李君にピアノを弾いてもらった。 (作例)

我们请小李弹了钢琴。

b 私は田中先生にピアノを弾いていただいた。 (作例)

我请田中老师弹了钢琴。

<sup>15</sup> 奥津・徐 (1982) によると、「请」が結果の「请」、つまり要求使役文であり、「～てもらう・いただく」が派生的謙讓使役文である場合、その使役文という一致点において両者に翻訳可能性が出ており、もう一つの条件は、両者の主語が身内でなければ対応することができない (詳細は奥津・徐 (1982) を参照)。

このように、日本語文 (20) の「～てもらう」「～ていただく」に対応する中国語の訳文としては、“请”が用いられ、与え補助動詞と同様、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」が含まれていない。

例えば、日本語の場合、例文 (20a・b) のように、話し手から見て、「僕たち」「私」は身内、つまりウチ側の人であるのに対し、「李君」「田中先生」はよそ者、つまりソト側の人であり、受け手は常にウチ側の人でなければならない。

また、例文 (20a) のように、話し手から見て、対等の人、或いは下の人 (李君) から行為 (ピアノを弾く) を受ける時には、「～てもらう」が用いられ、逆に、例文 (20b) のように、話し手から見て、上の人 (田中先生) から行為 (ピアノを弾く) を受ける時には、「いただく」が用いられる。

更に、例文 (20a・b) は、恩恵を受ける側である「僕たち」「私」は、恩恵を与える側である「李君」「田中先生」から、「ピアノを弾く」という行為を恩恵 (利益) として受けているということを意味している。

一方、中国語の場合、例文 (21a・b) のように、“我请他”でも“他请我”でも、つまり、受け手がウチ側の人でもソト側の人でも構わず、日本語の「～てもらう」「～ていただく」のように、受け手はウチ側の人でなければならないという制限はないという (奥津・徐 1982)。

(21) a 我请他去。(○) (作例)

私は彼に行つてもらった。(○)

b 他请我去。(○) (作例)

彼は私に行つてもらった。(×)

私は彼に頼まれて行つた。(○)

また、「ウエ・シタ」と関係なく、例文 (20a) のように、話し手から見て、対等の人、或いは下の人 (小李) から行為 (弾钢琴) を受ける時にも、例文 (20b) のように、話し手から見て、上の人 (田中老师) から行為 (弾钢琴) を受ける時にも、同一の表現“请”が用いられる。

更に、例文 (20a・b) のように、恩恵を受ける側である「僕たち」「私」は、恩恵を与

える側である「李君」「田中先生」から、「ピアノを弾く」という行為を恩恵（利益）として受けていることを表し、日本語では、ある人の行為を恩恵・利益とみなして表現するのが一般的であるのに対し、中国語では、それを中立的・客観的に表現するのが一般的である。

## 2. 2. 3 日本語授受補助動詞の非恩恵性及び、それに対応する中国語

第1章の2.2節（22頁）で述べたように、日本語の授受補助動詞の用法としては、「与え手」から「受け手」へ恩恵が及ぶことを表すのが基本であるが、ごく例外的に非恩恵的な意味を持つ場合もあり、話し言葉的で日常的によく使われている。

一方、中国語にも例文（22）のように、非恩恵的な意味を持つ日本語の授受補助動詞に似たような用法があり、それに対応する中国語としては、“给”“给…看”が用いられ、表現されている。しかし、“给”の場合には、二重目的語をとることはできるが、間接目的語だけをとることはできず、また、直接目的語は動詞や形容詞でもよいが、必ず数量詞を伴わなければならない（中日辞典2003）。

二重目的語とは、朱徳熙（1982）によると、一つの述語動詞に対して、その後に目的語が二つ現れる文を指す。例えば、例文“我给小李一本书（僕は李君に本を一冊あげる）”は典型的な二重目的語文であり、この例文の中で、二重目的語は“小李（李君）”と“书（本）”であるが、直接目的語は“书（本）”で、間接目的語は“小李（李君）”であると述べている。

では、例文を見てみよう。

(22) a 拿给一等奖给你看。

一等賞をとってやる。

我死给你看。

死んでやるから。

（用例は日中辞典（2003）より引用）

b 给你一点厉害。

少し痛い目にあわせてやる。

给他一个不理睬。

彼を相手にしてやらない。

给他一顿批评。

彼を批判してやる。

(用例は中国語大辞典 (1994) より引用)

このように、中国語にも、例文 (22a) のような「強い意志」を表す表現もあれば、例文 (22b) のような「不利益」を表す表現もあり、いずれも与え手の行為によって、受け手が不利益や迷惑を被っていると解釈できるが、この点に関しては、非恩恵的な意味を持つ日本語の授受補助動詞の用法と共通しているのではないかと思う。



## 2. 3 まとめ

以上、「話し手の視点」を中心に、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」という観点から日本語の授受表現と中国語の授受動詞を比較してみたが、これらをまとめると、以下のようなになる。

- 1) 日中両語の授受本動詞について、日本語「あげる(やる)」「くれる」「さしあげる」「くださる」に対応する中国語としては、“给”が一般的である。一方、日本語「もらう」「いただく」に対応する中国語としては、“要・收・受・拿・领・收受・收到・接受・接到・得到・拿到・领受・领取・请领”など、多数存在する。しかし、これらは少しずつ意味が異なり、“给”のようにそれ一語でほとんど用が足りるというような一般的な受け動詞はない。そして、中国語は与え動詞が受け動詞より優勢な体系を持つ言語であり、日本語では、「もらう」「いただく」と訳されている場合でも中国語では、“给”を使用する場合が多い。(表2)

表2

授受本動詞	日本語	中国語
与え動詞	やる	给
	あげる	
	さしあげる	
	くれる	
	くださる	
受け動詞	もらう	得到(要、收、受、拿、领、收受、收到、接受、接到、拿到、领受、领取、请领…)
	いただく	

2) 日中両語の授受補助動詞についてであるが、日本語「～てあげる(やる)」「～てくれる」「～てさしあげる」「～てくださる」に対応する中国語としては、“帮・给・为・请”などがあるが、ほとんど“给”一つでカバーすることができる。一方、日本語「～てもらう」「～ていただく」に対応する中国語としては、“请・让・要・叫・派・动员・托・找・喊”など、多数あり、完全に一致するものはないが、その中で、最も適当なのは、“请”である。更に、日本語の補助動詞には非恩恵的な意味を持つ場合もあるが、中国語にも似たような用法があり、それに対応する中国語としては、“给”“给…看”がある。(表3)

表3

授受補助動詞	日本語	中国語
与え動詞	～てやる	给(帮、为、请…)
	～てあげる	
	～てさしあげる	
	～てくれる	
	～てくださる	
受け動詞	～もらう	请(让、要、叫、派、动员、托、找、喊…)
	～いただく	

3) 日本語の授受表現は、与え動詞には、「あげる」と「くれる」、受け動詞には、「もらう」という3項体系であるのに対し、中国語の授受表現は、与え動詞と受け動詞が対立するだけの2項体系(奥津によれば1.5項体系かもしれない)といえよう。また、日本語の授受表現は、物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」にしる、行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」にしる、敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」にしる、与え手と受け手の人間関係、つまり「内外

関係」「上下関係」「恩恵関係」によって使い分けられるが、中国語の授受表現は、「ウチ・ソト」「ウエ・シタ」「恩恵・非恩恵」による方向性はなく、与え手と受け手との間に、物及び行為の授受関係が生ずることを表すにすぎず、事実を中立的・客観的に表現するのが一般的である。(図3)

### 日中両語の授受表現の特徴



図3

## 第3章 諸言語における授受表現

第2章では、日中両語の授受表現を比較してみたが、2項体系である中国語の授受表現は、3項体系である日本語の授受表現と違って、「ウチ・ソト」「ウエ・シタ」「恩恵・非恩恵」による方向性はなく、与え手と受け手との間に、物及び行為の授受関係が生ずることを表すにすぎず、事実を中立的・客観的に表現するのが一般的であることが分かった。

第3章では、更に、日本語の授受動詞と中国語以外の言語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語・マレー語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語の授受動詞とを比較し、日本語とそれらの外国語の相違点をそれぞれ分析することによって、日本語学習者にとって難しいと思われる共通点を見出し、問題点を確認する。

### 3. 1 日本国内の授受動詞

第1章でも述べたように、日本語の授受表現は、与え動詞には「あげる」と「くれる」、受け動詞には「もらう」があり、3項体系という特徴を持っている。しかし、こうした日本語の授受表現に見られる特徴、つまり、同じ与え動詞である「やる（あげる）」と「くれる」の対立は、日本国内で使われている言語を調べた結果、日本国内のどこにでも存在するわけではなく、「やる（あげる）」と「くれる」の区別がない方言も少なからず存在していることが分かった。そこで、本節では、まず、日本語における授受表現の語彙体系の特徴を改めて示したうえで、日本語方言における授受表現の語彙体系を地理的分布という観点から調べてみることにする。

#### 3. 1. 1 現代日本標準語

現代日本標準語<sup>16</sup>（以下、標準語）の授受表現は、与え動詞には「あげる」と「くれる」、受け動詞には「もらう」があり、3項体系という特徴を持っている。その中で、特に「あげる」と「くれる」の選択は、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定され、話し手を中心に遠心的方向の授与には「あげる」を、求心的方向の授与には「くれ

<sup>16</sup> 平山（1992：27）によると、「標準語」と「共通語」を区別しているものもあれば、区別していないものもあり、学者によって解釈が違うというが、ここでは、「標準語」と呼び、詳細までは言及しないことにする。

る」が用いられる（山田 2011 : 5）。

以下は、山田（2011）を参考に、筆者がまとめたものである。

- (23) a 私は 花子に 本を あげた。  
与え手 受け手 物 ウチ→ソト
- b 花子は 私に 本を くれた。  
与え手 受け手 物 ソト→ウチ
- c 私は 花子に 本を もらった。  
受け手 与え手 物 ウチ←ソト
- d? 花子は 私に 本を もらった。  
受け手 与え手 物 ソト←ウチ

このように、標準語の場合、例文（23a）のように、私（ウチ）が花子（ソト）に物（本）を与える時には「あげる」、例文（23b）のように、花子（ソト）が私（ウチ）に物（本）を与える時には「くれる」が用いられ、つまり、ウチからソトへか、ソトからウチへかによって、「あげる」「くれる」が使い分けられている。

また、例文（23c）のように、私（ウチ）が花子（ソト）から物（本）を受け取る時には、「もらう」が用いられるが、一方、例文（23d）のように、花子（ソト）が私（ウチ）から物（本）を受け取る時には、「与え手」である私が「ウチの人」（「与え手は少なくともソト化していなければならない」という規則に反している）のため、不自然な文になってしまう。

### 3. 1. 2 日本語方言

日高（2011 : 19）によると、日本語方言<sup>17</sup>を通観した場合、日本国内では、「やる」と「く

<sup>17</sup> 平山（1992）によると、「方言」とはその地域に行われる言葉全体の体系を指し、日本語の方言は大きく「本土方言」と「琉球方言」に分けられるという。詳細は46頁にある図4の「全日本方言区画図」（平山1992）を参照。

れる」の区別がない方言も少なからず存在しているという。そこで、ここでは、主に日高(2007、2011)を参考に、日本語方言における授受表現の語彙体系を簡単に紹介しておきたい。

日高(2011: 19)によると、与え動詞として用いられる形式としては、全国的にヤル、クレルが広く分布するものの、ヨコス、ダス、トラス、エラスといった動詞が使用される地域もある。一方、そうした与え動詞の違いに関わらず、「クレル・クレル」「ヤル・ヤル」「ダス・ダス」「トラス・トラス」「エラス・エラス」など、語彙的な対立のない型(Aタイプ)と「ヤル・クレル」「ヤル・ヨコス」「ダス・クレル」など、語彙的な対立のある型(Bタイプ)が存在しており、そのうち、最も広範囲に分布されているのは、Aタイプの「クレル・クレル」とBタイプの「ヤル・クレル」である。

これら、AタイプとBタイプの語彙体系を地理的分布から見ると次の表4のようになり、これは、日高(2007)が、国立国語研究所編『日本言語地図2』の73図「やる」(47頁の図5を参照)と74図「くれる」(48頁の図6を参照)に基づく与え動詞の語彙体系の総合図(49頁の図7を参照)からまとめたものである。

表4

A タ イ プ	1 「クレル・クレル」…中部地方以東、九州南西部以南 2 「ヤル・ヤル」……九州中央部 3 「ダス・ダス」……北海道沿岸南部 4 「トラス・トラス」…沖縄県 5 「エラス・エラス」…沖縄県
B タ イ プ	1 「ヤル・クレル」……九州北東部から関東地方、北海道内陸部 2 「ヤル・ヨコス」……山陰地方 3 「ダス・クレル」……北関東地方、秋田県男鹿地方

(日高(2007: 110)より)

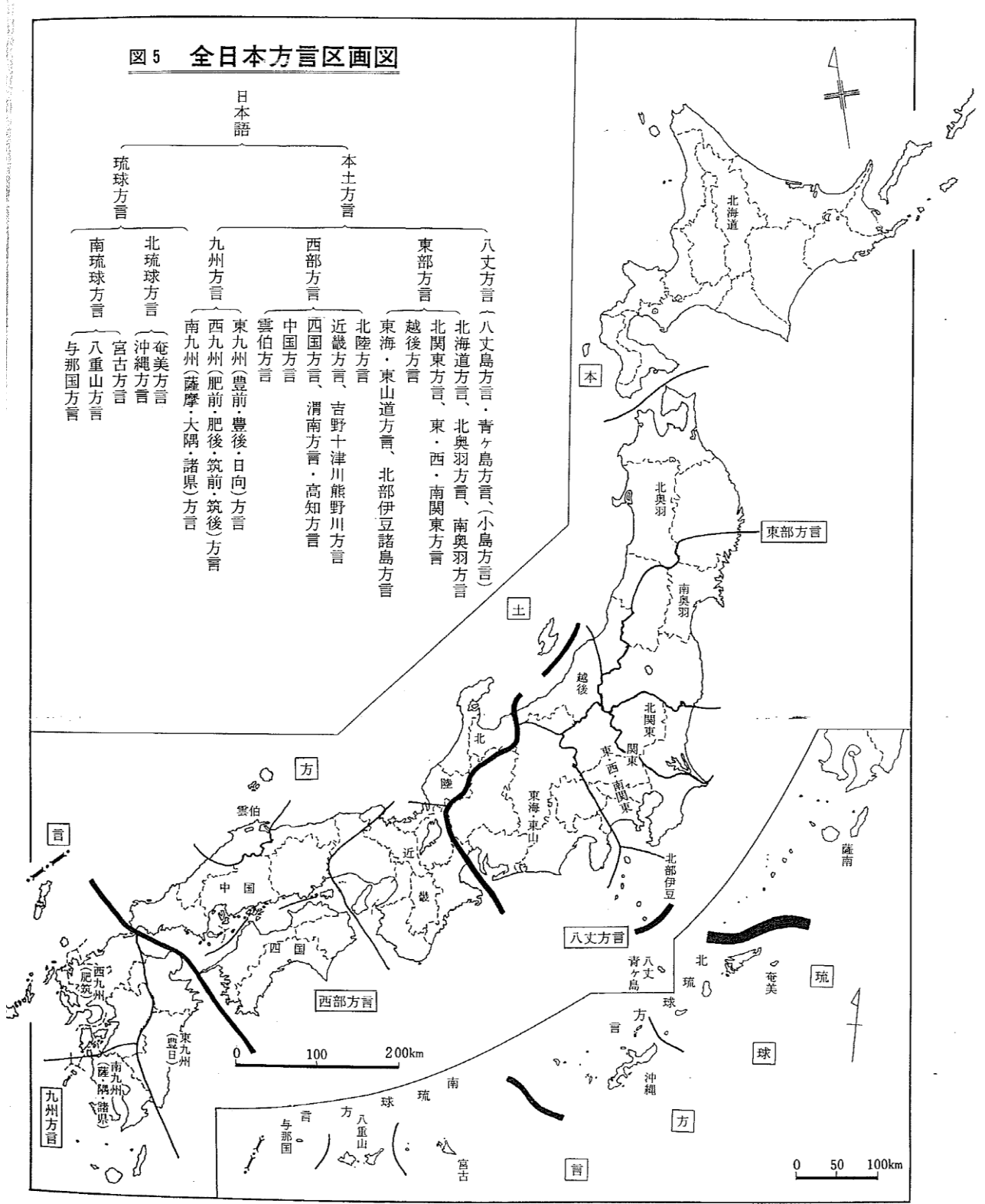


図4 平山 (1992) より

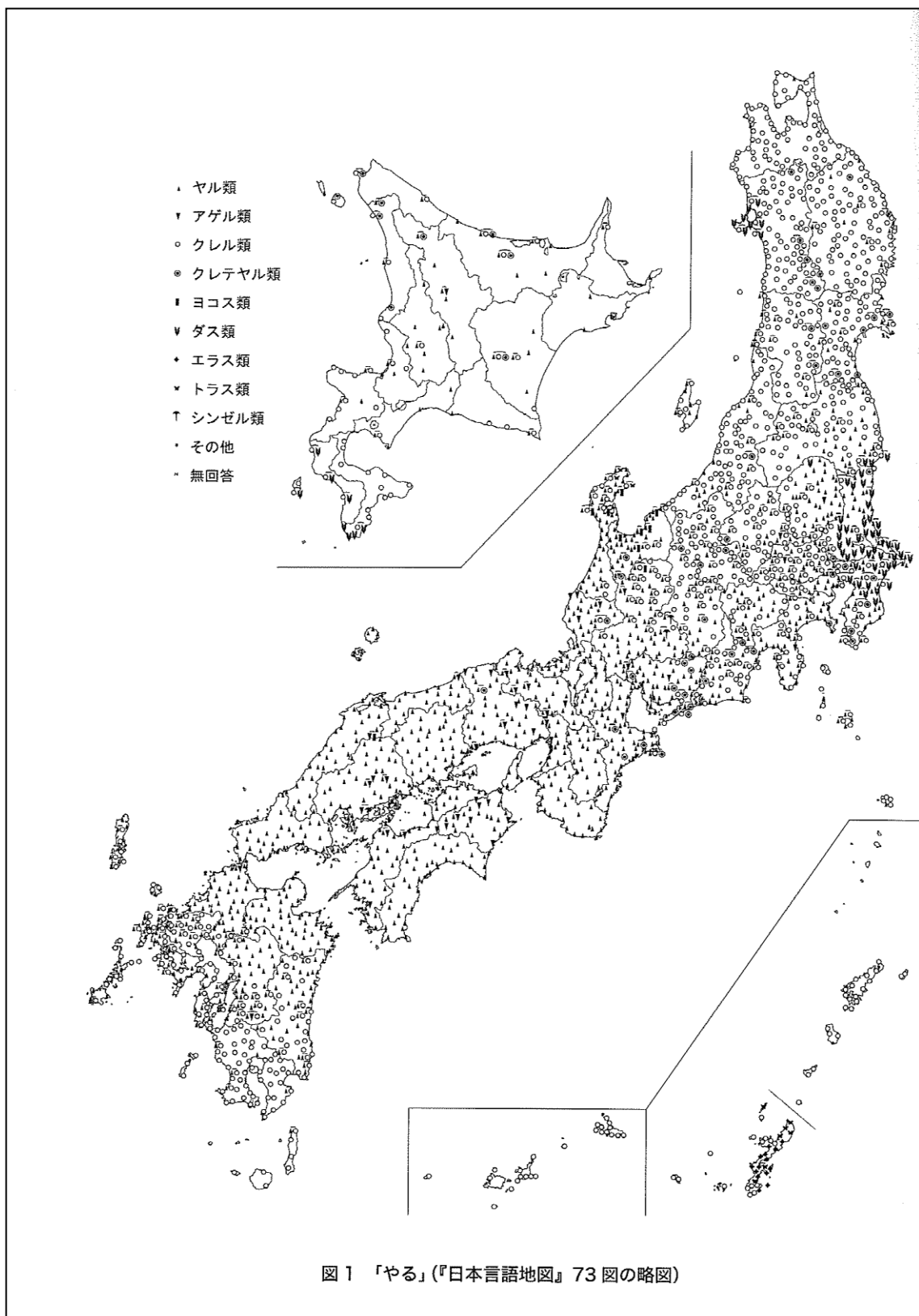


図5 日高(2007:76)より



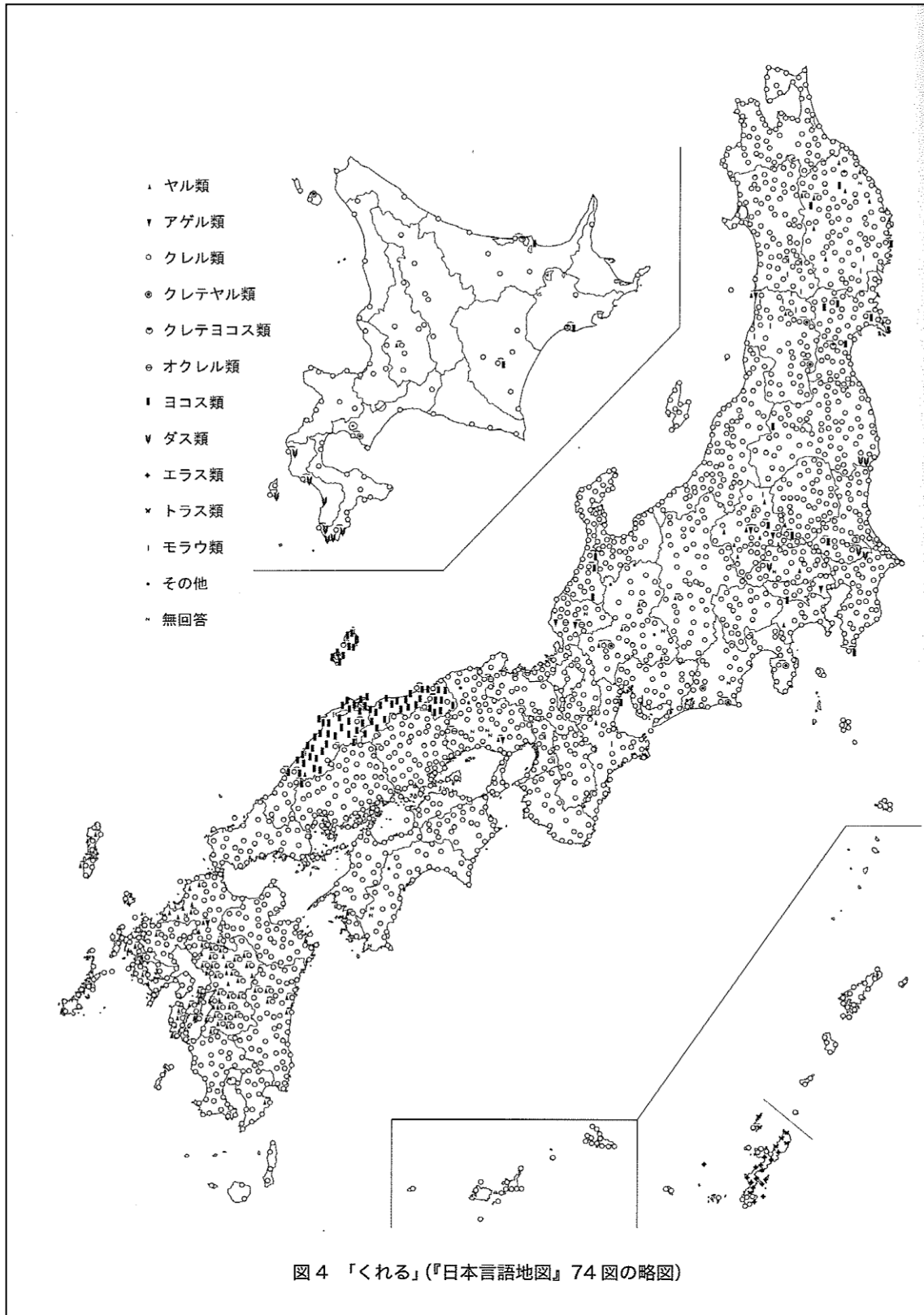


図6 日高(2007:86)より

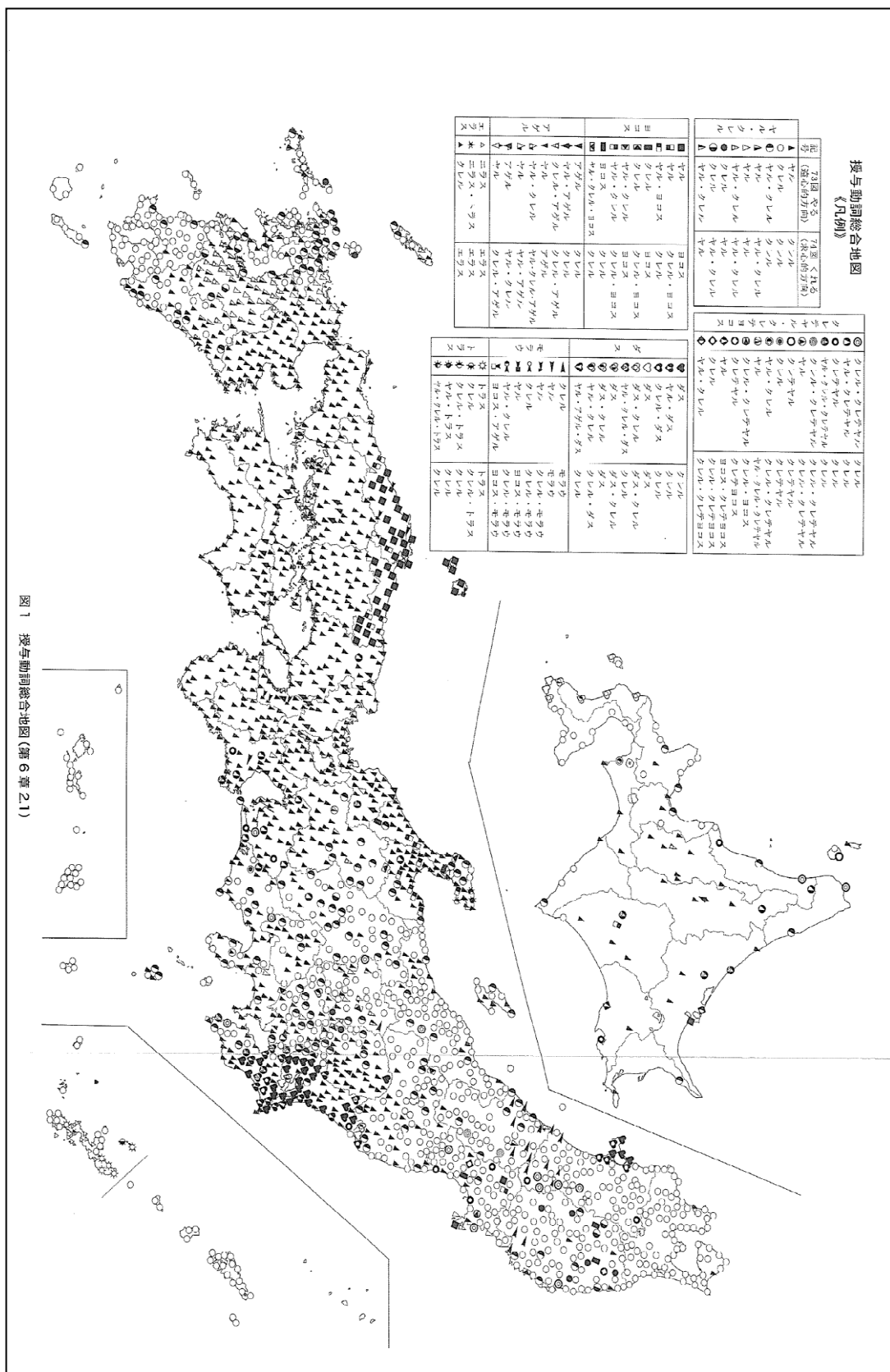


図 1 接与副国総合地図(第 6 章 2.1)

図 7 日高(2007)より

### 3. 2 外国語の授受動詞

日本語において、「あげる」「くれる」「もらう」の3項体系として存在する物の授受を表す表現は、山田（2004：334）は、諸言語と比較した結果、英語の「give」「receive」の対立のように、与え手側・受け手側、いずれの立場から授受を捉えたものであるかという2項体系として現れることが多く、このような2項体系を持つ言語は特に系統に偏ることなく、広く見出せると指摘している。

英語の「give」と「receive」のように、「授受」というやり取りを動詞で示すには「与える」という意味の「あげる」と「受け取る」という意味の「もらう」、この二つがあれば事足りるはずであるが、なぜ日本語には「あげる」の他に「くれる」が存在するのであろう。その理由について、森田（1998）は、日本語では話者は自分を突っぱねて客観的に自分自身を見ることをせず、また、「授受」というやり取りにおいて、「田中君は山田君に本をあげた」とはいえても、「田中君は僕に本をあげた」という文が成立しないのは、話者自身が「授受」というやり取りの中で自分自身を客観的に「受取人」として試みるできないからであると述べている。

そこで、本節では、大江（1975）、大野（1983）、奥津（1983）、飯沼（1995）、山田（1996・2002・2004・2011）、降幡（1998）、宋（1999）、井出・任（2001）、大上（2003）、Ahmed（2006）Alcal（2007）、長谷川（2007）、日高（2007・2011）、Akkus（2008）、Priyadarshani・浮田（2008）、田原（2011）を参考に、日本語学習者が比較的によく、直接聞き取り調査を実施できた外国語<sup>18</sup>、中国語<sup>19</sup>、朝鮮語・韓国語、インドネシア語・マレー語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語を取り上げ<sup>20</sup>、「ウチ・ソト」の観点から、日本語の授受表現と比較してみることにする。

これら外国語に関するデータは、その言語のネイティブスピーカーに対する直接調査に加え、論文、文法書、辞書など、その言語に関する資料を参考にして調べたものである。なお、ここで扱う外国語はローマ字に統一したが、ここで用いた表記法は必ずしも正書法

<sup>18</sup> これらの外国語は全て2項体系であるが、ここで扱った外国語の他に、タイ語（田中1997）、レト・ロマンス語・カザフ語・ヒンディ語・モンゴル語・ネパール語（山田2004）、アラビア語（Ahmed2006）、シンハラ語（Priyadarshani・浮田2008）なども全て2項体系であることが確認されている。

<sup>19</sup> 第2章では日中両語の授受表現について詳しく見てきたが、第3章では、日中両語の語彙体系を中心に改めてみることにする。

<sup>20</sup> これらの外国語は、2009年に国際交流基金が行った「海外日本語教育機関調査」による日本語学習者数を基準に、学習者の多い順に並べたものである。（65頁の表5を参照）また、本論文で扱う外国語を『世界言語文化図鑑（2005）』に基づき、「言語系統」や「使用地域」を簡単に紹介する。（66頁の表6を参照）

やローマ字での一般的な書記法とは一致しない場合がある<sup>21</sup>。

### 3. 2. 1 中国語

第2章でも述べたように、日本語「あげる、くれる、もらう」に対応する中国語としては、一般的に「給(gei)」「得到(dedao)」などが考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「給(gei)」、受け動詞「もらう」には「得到(dedao)」が対応している(奥津1983、水野1994)。

では、例文を見てみよう。

(24) a Wo gei pengyou yiben shu。(私は友達に本をあげる。)

私/ 与える/ 友達/ 一冊/ 本

b Pengyou gei wo yiben shu。(友達は私に本をくれる。)

友達/ 与える/ 私/ 一冊/ 本

c Wo cong pengyou nali dedao yiben shu。(私は友達から本をもらう。)

私/ から/ 友達/ そこ/ 受け取る/ 一冊/ 本

d Pengyou cong wo zheli dedao yiben shu。(？友達は私から本をもらう。)

友達/ から/ 私/ ここ/ 受け取る/ 一冊/ 本

中国語の場合、例文(24a)のように、wo(ウチ)が pengyou(ソト)に shu(物)を与える時にも、例文(24b)のように、pengyou(ソト)が wo(ウチ)に shu(物)を与える時にも、同一の表現「給(gei)」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文(24c)のように、wo(ウチ)が pengyou(ソト)から shu(物)を受け取る時にも、例文(24d)のように、pengyou(ソト)が wo(ウチ)から shu(物)を受け取る

<sup>21</sup> インドネシア語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語に関しては、日本語の授受動詞をその言語に翻訳する調査も行った。(その他に、アラビア語、ロシア語、ウクライナ語、ネパール語についても、同じ調査を行ったが、時間の関係で分析できず、本論文で扱うことはできなかった。但し、資料としては付けることにした。(126～136頁の調査資料1を参照)また、英語、中国語、朝鮮語に関しては、筆者に理解できるため、翻訳調査を行わず、一方、トルコ語に関しては、協力者が見付からなかったため、翻訳調査を行うことはできなかった。

時にも、同一の表現「得到(dedao)」が用いられ、後者の場合、日本語、英語では、不自然な表現となってしまうが、中国語では正しい文となり、中国語の受け動詞「得到(dedao)」は視点による制約を受けない。

但し、中国語は、第2章でも紹介したように、与え動詞が受け動詞より優勢な体系を持つ言語であるため、中国語では、「得到(dedao)」よりも「给(gei)」を使用することが多く、1.5項体系といえるかもしれないと指摘される場合もある(奥津 1984a : 75)。

### 3. 2. 2 朝鮮語・韓国語

日本語の文法と非常によく似ている朝鮮語<sup>22</sup>は、授受動詞については、「주다 (cwuta)」 「받다 (patta)」の2項体系しか持たず、与え動詞「あげる」「くれる」には「주다 (cwuta)」、受け動詞「もらう」には「받다 (patta)」が対応している(奥津 1983、井出・任 2001)。では、例文を見てみよう。

(25) a nay ka chinkwu eykey chayk ul cwuta。(私が友達に本をあげる。)  
私/ が/ 友達/ に/ 本/ を/ 与える

b chinkwu ka na eykey chayk ul cwuta。(友達が私に本をくれる。)  
友達/ が/ 私/ に/ 本/ を/ 与える

c nay ka chinkwu eykeyse chayk ul patta。(私が友達から本をもらう。)  
私/ が/ 友達/ から/ 本/ を/ 受け取る

d chinkwu ka na eykeyse chayk ul patta。(？友達が私から本をもらう。)  
友達/ が/ 私/ から/ 本/ を/ 受け取る

\* na (私) = nay (「nay」は主格助詞「ka (が)」の前で使われる1人称の代名詞である。)

<sup>22</sup> 野間 (2000) によると、韓国での正式名称は「韓国語」、朝鮮での正式名称は「朝鮮語」であるが、学術的な名称としては、日本では「朝鮮語」が一般であるため、ここでは表記を「朝鮮語」に統一する。また、日本語と朝鮮語の類似点としては、文の構造、屈折法や派生法の接尾辞、敬語法体系、代名詞の形態と特質、形態系構造を制約する音韻論的条件、流音の特質、更に相当数の語根などがあると、宋 (1999 : 133) は述べている。

朝鮮語の場合、例文 (25a) のように、nay (ウチ) が chinkwu (ソト) に chayk (物) を与える時にも、例文 (25b) のように、chinkwu (ソト) が na (ウチ) に chayk (物) を与える時にも、同一の表現「주다 (cwuta)」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文 (25c) のように、nay (ウチ) が chinkwu (ソト) から chayk (物) を受け取る時にも、例文 (25d) のように、chinkwu (ソト) が na (ウチ) から chayk (物) を受け取る時にも、同一の表現「받다 (patta)」が用いられ、中国語と同じように視点による制約は受けず、正しい文となる。

### 3. 2. 3 インドネシア語・マレー語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応するインドネシア語<sup>23</sup>としては、一般的に「memberi」「menerima」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「memberi」、受け動詞「もらう」には、「menerima」が対応している(谷口 1982、降幡 1998)。

しかし、山田 (2004 : 335) では、受け動詞「もらう」に対応するインドネシア語として「mendapat」が使われているが、インドネシア語ネイティブスピーカーによると、この例文のように、物のやり取りを客観的に述べる場合には、「誰かにお願いしたり、或いは自分で努力して何かをもらう」意味を持っている「mendapat」よりも、「努力なしで何かをもらう」意味を持っている「menerima」を使った方がより適切ではないかと言う。

また、『標準インドネシア・日本語辞典』(谷口 1982)によると、「mendapat」には、「受ける」「受け取る」の他に、「得る」の意味もあるが、「menerima」には「得る」に関する解釈が見当たらない。

そのため、ここでは、受け動詞「もらう」に対応するインドネシア語として「menerima」を扱うことにする。

では、例文を見てみよう。

(26) a Saya memberi buku kepada teman. (私は友達に本をあげる。)  
私/ 与える/ 本/ に/ 友達

<sup>23</sup> ここでは、インドネシアを中心として紹介する。

b Teman memberi buku kepada saya。(友達は私に本をくれる。)  
友達/ 与える/ 本/ に/ 私

c Saya menerima buku dari teman。(私は友達から本をもらう。)  
私/ 受け取る/ 本/ から/ 友達

d Teman menerima buku dari saya。(？友達は私から本をもらう。)  
友達/ 受け取る/ 本/ から/ 私

インドネシア語の場合、例文 (26a) のように、*saya* (ウチ) が *teman* (ソト) に *buku* (物) を与える時にも、例文 (26b) のように、*teman* (ソト) が *saya* (ウチ) に *buku* (物) を与える時にも、同一の表現「*memberi*」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文 (26c) のように、*saya* (ウチ) が *teman* (ソト) から *buku* (物) を受け取る時にも、例文 (26d) のように、*teman* (ソト) が *saya* (ウチ) から *buku* (物) を受け取る時にも、同一の表現「*menerima*」が用いられ、中国語、朝鮮語・韓国語と同じように視点による制約は受けず、正しい文となる。

### 3. 2. 4 英語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応する英語としては、一般的に「*give*」「*receive*」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「*give*」、受け動詞「もらう」には「*receive*<sup>24</sup>」が対応している (大江 1975、奥津 1983)。では、例文を見てみよう。

(27) a I gave a<sup>25</sup> book to John。(私はジョンに本をあげた。)  
私/ 与えた/ 一冊/ 本/ に/ ジョン

<sup>24</sup> 山田 (2004: 334) によると、「もらう」は即「*receive*」を表すわけではないが、ここでは、近似のものとして便宜的に当てておく。英語以外の外国語も同じように扱うことにする。

<sup>25</sup> ジーニアス英和大辞典 (2001) によると、英語の「*a*」は、初めて登場するある特定の人・物を指す名詞、または特にこれと断定しないで漠然とある人・物を指す名詞に付けて、「ある」「一つ (一人、一匹…)」の意味を表しているが、日本語の場合は訳さないことが多い。その他に、中国語の「一本」、スペイン語の「*un*」、フィリピン語の「*ng*」も英語の「*a*」と同じような役割をしているため、日本語文にする際には訳さない。

b John gave a book to me. (ジョンは私に本をくれた。)

ジョン/ 与えた/ 一冊/ 本/ に/ 私

c I received a book from John. (私はジョンから本をもらった。)

私/ 受け取った/ 一冊/ 本/ から/ ジョン

d? John received a book from me. (?ジョンは私から本をもらった。)

ジョン/ 受け取った/ 一冊/ 本/ から/ 私

英語の場合、例文 (27a) のように、I (ウチ) が John (ソト) に a book (物) を与える時にも、例文 (27b) のように、John (ソト) が me (ウチ) に a book (物) を与える時にも、同一の表現「give」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

一方、受け動詞「receive」の場合、主語寄りの視点が好まれ、例文 (27c) のように、主語 I (ウチ) が John (ソト) から物 (a book) を受け取る場合は正しい文となるが、例文 (27d) のように、主語 John (ソト) が me (ウチ) から物 (a book) を受け取る場合は、不自然な文となり、日本語で「ジョンは私から本をもらった」が不自然であるのと似ている (奥津 1983 : 29)。

### 3. 2. 5 ベトナム語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応するベトナム語としては、一般的に「cho」「nhận」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「cho」、受け動詞「もらう」には、「nhận」が対応している (川本 2011、田原 2011)。

では、例文を見てみよう。

(28) a Tôi cho Lan đồng hồ. (私はランさんに時計をあげる。)

私/ 与える/ ラン/ 時計

b Lan cho tôi đồng hồ. (ランさんは私に時計をくれる。)

ラン/ 与える/ 私/ 時計



c Tôi nhận đồng hồ từ Lan。(私はランさんから時計をもらう。)  
私/ 受け取る/ 時計/ から/ ラン

d ?Lan nhận đồng hồ từ tôi。( ?ランさんは私から時計をもらう。)  
ラン/受け取る/ 時計/ から/ 私

ベトナム語の場合、例文 (28a) のように、tôi (ウチ) が Lan (ソト) に đồng hồ (物) を与える時にも、例文 (28b) のように、Lan (ソト) が tôi (ウチ) に đồng hồ (物) を与える時にも、同一の表現「cho」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性は無い。

また、例文 (28c) のように、tôi (ウチ) が Lan (ソト) から đồng hồ (物) を受け取る時にも、例文 (28d) のように、Lan (ソト) が tôi (ウチ) から đồng hồ (物) を受け取る時にも、同一の表現「nhận」が用いられる。

しかし、ベトナム語の場合、英語と同じように、主語寄りの視点が好まれるため、例文 (28d) は不自然な文になってしまう。この場合、一般的には、受け動詞「nhận」のかわりに、与え動詞「cho」を使い、例文 (28a) で表現するようである。

### 3. 2. 6 フィリピン語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応するフィリピン語としては、一般的に「bigay」「tanggap」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「bigay」、受け動詞「もらう」には、「tanggap」が対応している(大上 2003、Alcala 2007)。

Alcala(2007)によると、フィリピン語には、「トピック」「動詞」の他に、「焦点」という要素も必要である。フィリピン語の授受表現に関わる「焦点」としては、「行為者焦点」「対象(目的)焦点」「方向焦点」があり、フィリピン語の授受表現「bigay」「tanggap」は、焦点または、アスペクトによって、動詞の活用(動詞+接辞)が変わる。(次頁の表6を参照)

表6

「Bigay (与える)」の場合：

		相		
焦点		完了相	未完了相	未然相
行為者焦点	Magbigay	Nagbigay	Nagbibigay	Magbibigay
目的(対象)焦点	Ibigay	Ibinigay	Ibinibigay	Ibibigay
方向焦点	Binigyan	Binigyan	Binibigyan	Bibigyan

「Tanggap (受け取る)」の場合：

		相		
焦点		完了相	未完了相	未然相
行為者焦点	Tumanggap	Tumanggap	Tumatanggap	Tatanggap
目的(対象)焦点	Tinanggap	Tinanggap	Tinatanggap	Tatanggapin
方向焦点	Nakatanggap	Nakatanggap	Tumatanggap	Tatanggap

(Alcala2007 : 121 より)

このように、フィリピン語においては、授受動詞がそれぞれ焦点によって三つの活用があるが、現在、日常生活においては、与え動詞「bigay」の方向焦点文「binigyan」が多く使用されているようである。そのため、ここでは、与え動詞「bigay」の方向焦点文「binigyan」はもちろん、受け動詞「tanggap」も方向焦点文「nakatanggap」を扱うことにする。

では、例文を見てみよう。

(29) a Binigyan ko ng bulaklak si Marco. (私はマルコに花をあげた。)

与えた/ 私の/その/ 花/ に/ マルコ

b Binigyan ako ni Marco ng bulaklak. (マルコは私に花をくれた。)

与えた/ 私/ の/ マルコ/ この/ 花

c Nakatanggap ako ng bulaklak mula kay Marco。(私はマルコから花をもらった。)  
受け取った/ 私/ この/ 花/ から/ に/ マルコ

d Nakatanggap si Marco ng bulaklak mula sa akin。(マルコは私から花をもらった。)  
受け取った/ は/ マルコ/ その/ 花/ から/ に/ 私

\* si marco=マルコに(「si」は動詞によって、「に」の他に、「は・が」「を」を表すこともある。)

\* ng bulaklak=指示代名詞(複数)+花

\* ni Marco=マルコ(人名単数)の

\* mula kay marco=マルコから(SA形:kay+人名単数)

mula sa akin=私から(SA形:sa+1人称単数)

SA形:文の斜格となる名詞句(人名以外、人名)はSA形で標示する。

フィリピン語の場合、例文(29a)のように、ako(ウチ)がMarco(ソト)にbulaklak(物)を与える時にも、例文(29b)のように、Marco(ソト)がako(ウチ)にbulaklak(物)を与える時にも、同一の表現「bigay」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文(29c)のように、ako(ウチ)がMarco(ソト)からbulaklak(物)を受け取る時にも、例文(29d)のように、Marco(ソト)がako(ウチ)からbulaklak(物)を受け取る時にも、同一の表現「tanggap」が用いられ、中国語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語と同じように視点による制約は受けず、正しい文となる。

### 3. 2. 7 スペイン語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応するスペイン語としては、一般的に「dar」「recibir」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「dar」、受け動詞「もらう」には、「recibir」が対応している(カルロス・上田1992、長谷川2007)。

では、例文を見てみよう。

(30) a Yo le di un libro un amigo. (私は友達に本をあげた。)

私/ 彼に/ 与えた/一冊の/ 本/ 一人の/ 友達

b Un amigo me dio un libro. (友達は私に本をくれた。)

一人の/ 友達/ 私/ 与えた/ 一冊の/ 本

c Yo recibí un libro de un amigo. (私は友達から本をもらった。)

私/ 受け取った/一冊の/ 本/ から/一人の/ 友達

d ?Un amigo recibió un libro de mí. (?友達は私から本をもらった。)

一人の/ 友達/ 受け取った/ 一冊の/ 本/ から/ 私

\* dar(与える) = di (直説法・過去・1人称単数) = dio (直説法・過去・3人称単数)

recibir(受け取る) = recibí (直説法・過去・1人称単数) = recibió (直説法・過去・3人称単数)

\* yo (私) = me (与格) = mí (前置詞「de」) + 代名詞「yo」)

スペイン語の場合、例文 (30a) のように、yo (ウチ) が un amigo (ソト) に un libro (物) を与える時にも、例文 (30b) のように、un amigo (ソト) が me (ウチ) に un libro (物) を与える時にも、同一の表現「dar」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

一方、例文 (30c) のように、主語 yo (ウチ) が un amigo (ソト) から un libro (物) を受け取る時にも、例文 (30d) のように、主語 un amigo (ソト) が mí (ウチ) から un libro (物) を受け取る時にも、同一の表現「recibir」が用いられる。

しかし、スペイン語の場合、英語、ベトナム語と同じように、主語寄りの視点が好まれるため、例文 (30d) は不自然な文になってしまう。この場合、一般的には、受け動詞「recibir」のかわりに、与え動詞「dar」を使い、例文 (30a) で表現するようである。

### 3. 2. 8 ミャンマー語

日本語「あげる、くれる、もらう」に対応するミャンマー語としては、一般的に「pe:」

「ya.」が考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には「pe:」、受け動詞「もらう」には、「ya.」が対応している(大野 1983、戸部 1993)。

では、例文を見てみよう。

(31) a cunma ka thaŋɛjin: a: sa-ou? ko pe:thi。(私は友達に本をあげた。)  
私/ は/ 友達/ に/ 本/ を/ 与える

b thaŋɛjin: ka cunma ko sa-ou? ko pe:thi。(友達は私に本をくれた。)  
友達/ は/ 私/ に/ 本/ を/ 与える

c cunma ka thaŋɛjin: sika sa-ou? ko ya.thi。(私は友達から本をもらった。)  
私/ は/ 友達/ から/ 本/ を/ 受け取る

d thaŋɛjin: ka cunma sika sa-ou? ko ya.thi。(？友達は私から本をもらった。)  
友達/ は/ 私/ から/ 本/ を/ 受け取る

\* pe:thi =pe: (与える) +thi (完了)

ya.thi =ya. (受け取る) +thi (完了)

ミャンマー語の場合、例文 (31a) のように、cunma (ウチ) が thaŋɛjin: (ソト) に sa-ou? (物) を与える時にも、例文 (31b) のように、thaŋɛjin: (ソト) が cunma (ウチ) に sa-ou? (物) を与える時にも、同一の表現「pe:」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文 (31c) のように、cunma (ウチ) が thaŋɛjin: (ソト) から sa-ou? (物) を受け取る時にも、例文 (31d) のように、thaŋɛjin: (ソト) が cunma (ウチ) から sa-ou? (物) を受け取る時にも、同一の表現「ya.」が用いられ、中国語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語、フィリピン語と同じように視点による制約は受けず、正しい文となる。

### 3. 2. 9 トルコ語

基本語順が日本語と類似しているトルコ語<sup>26</sup>も2項体系を持っており、日本語の与え動詞「あげる」「くれる」には、「vermek」、受け動詞「もらう」には、「almak」が対応している(飯沼 1995、Akkus 2008)。

では、例文を見てみよう。

(32) a Ben on a kitab verdim. (私は彼に本をあげた。)

私/ 彼/へ/ 本/ 与えた

b O ban a kitab verdi. (彼は私に本をくれた)

彼/ 私/ へ/ 本/ 与えた

c Ben on dan kitab aldım. (私は彼から本をもらった。)

私/ 彼/から/ 本/ 受け取った

d Baban o paketi ben den aldı. (?父はその包みを私からもらった。)

父/ その/ 包み/ 私/ から/ 受け取った

\* vermek(与える) = verdim (1人称・過去) = verdi (3人称・過去)

almak(受け取る) = aldım (1人称・過去) = aldı (3人称・過去)

\* 「ona=彼(o)+へ」「bana=私(ben)+へ」「ondan=彼(o)+から」「benden=私(ben)+から」のように、トルコ語には主格を示す語尾はなく、語幹そのままの形が主語や補語になる。

トルコ語の場合、例文(32a)のように、ben(ウチ)がo(ソト)にkitab(物)を与える時にも、例文(32b)のように、o(ソト)がben(ウチ)にkitab(物)を与える時にも、同一の表現「vermek」が用いられ、ウチからソト、ソトからウチへの方向性はない。

また、例文(32c)のように、ben(ウチ)がo(ソト)からkitab(物)を受け取る時に

<sup>26</sup> 柴田(1993)は、日本語とトルコ語の類似点として、1) 述語だけが文の必須の成分、2) 述語は原則として文末に出現、3) 主語をはじめとする述語以外の成分の相対的位置が自由、4) 日本語のテニヲハのように文法関係を表す成分を語の後ろに付加、という4点があると述べている。

も、例文 (32d) のように、baban (ソト) が ben (ウチ) から paketi (物) を受け取る時にも、同一の表現「almak」が用いられ、中国語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語、フィリピン語、ミャンマー語と同じように視点による制約は受けず、正しい文となる。

### 3.3 まとめ

以上、これまでに見てきた日本語の授受表現、外国語の授受表現、及び日本語方言の授受表現についてまとめると以下のようなになる。

- 1) 語彙体系から日本語の授受表現と外国語の授受表現における違いをみると、日本語は2項体系しか持っていない外国語と違って、3項体系という特徴を持っている。これを表にまとめると、次のようになる。(表7)

表7

言語	与え動詞	受け動詞
日本語	あげる・くれる	もらう
中国語	gei	dedao
朝鮮語・韓国語	cwuta	patta
インドネシア語	memberi	menerima
英語	give	receive
ベトナム語	cho	nhận
フィリピン語	bigay	tanggap
スペイン語	dar	recibir
ミャンマー語	pe:	ya.
トルコ語	vermek	almak

- 2) 「ウチ・ソト」の観点から日本語の授受表現と外国語の授受表現における違いをみると、日本語の授受表現の場合には、「ウチ・ソト」は欠かせない要素であり、特に「あげる」と「くれる」の用法には、「ウチ」と「ソト」の区別が大きく関与しているが、外国語の授受表現の場合には、「与え動詞」にも「受け動詞」にも「ウチ」と「ソト」の区別がない。また、「受け動詞」の場合、英語、ベトナム語、スペイン語は、主語寄りの視



点が好まれるため、使用制限を受けているが、英語、ベトナム語、スペイン語はもちろん、本章で扱われているすべての外国語の受け動詞の使用制限については、まだいくつかの疑問点があり、今後の課題としても、更なる調査や分析が必要ではないかと思う。

- 3) 日本語方言の授受表現における語彙体系をみると、日本語方言の与え動詞には、語彙的な対立のない型（Aタイプ）と語彙的な対立のある型（Bタイプ）が存在しており、最も広範囲に分布しているのは、Aタイプの「クレル・クレル」とBタイプの「ヤル・クレル」であることが分かる。しかし、本章では、日本語方言の与え動詞を簡単に紹介するだけにとどめ、日本語方言の受け動詞についても全く触れていないため、この点についても、今後の課題として、更なる調査や分析が必要ではないかと思う。

表5 (学習者数上位 20 カ国における人口 1 万人あたりの学習者数)

順位	国・<地域>	学習者数(人)	人口(100万人)	人口1万人あたりの学習者数(人)
1	韓国	964, 014	48.5	198.8
2	中国	827, 171	1, 354.2	6.1
3	インドネシア	716, 353	232.5	30.8
4	オーストラリア	275, 710	21.5	128.2
5	<台湾>	247, 641	23.1	107.2
6	米国	141, 244	317.6	4.4
7	タイ	78, 802	68.1	11.6
8	ベトナム	44, 272	89.0	5.0
9	<香港>	28, 224	7.1	39.8
10	カナダ	27, 488	33.9	8.1
11	マレーシア	22, 856	27.9	8.2
12	フィリピン	22, 362	93.6	2.4
13	ニュージーランド	21, 875	4.3	50.9
14	ブラジル	21, 376	195.4	1.1
15	英国	19, 673	61.9	3.2
16	インド	18, 372	1, 214.4	0.2
17	フランス	16, 010	62.6	2.6
18	シンガポール	15, 864	4.8	33.1
19	スリランカ	12, 430	20.4	6.1
20	ドイツ	12, 390	82.1	1.5

※ 各国の人口は、『世界の国情報 2010』(株式会社リブロ)による。

※ <台湾>の数値は(財)交流協会の調査による。

『海外の日本語教育の現状(国際交流基金 2009)』より

表6

言語	言語系統	使用地域
中国語	シナ・チベット語族シナ語派	中国、シンガポール、インドネシア、マレーシア等
朝鮮語・韓国語	孤立した言語或いはアルタイ諸語	韓国、朝鮮、中国等
インドネシア語	オーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派	インドネシア
英語	インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派	イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド、南アフリカ共和国、フィリピン、シンガポール等多数（約80の国・地域）
ベトナム語	オーストロアジア語族モン・クメール語派	ベトナム、カンボジア、中国、アメリカ、フランス等
フィリピン語	オーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派	フィリピン（補充：フィリピン語はフィリピノ語とも呼ばれる）
スペイン語	インド・ヨーロッパ語族イタリアック語派	スペイン、南北アメリカ諸国（メキシコ、コロンビア、アルゼンチン等）、赤道ギニア（約20カ国）
ミャンマー語	シナ・チベット語族チベット・ビルマ語（ミャンマー語）派	ミャンマー、タイ、ラオス、バングラデシュ、シンガポール、マレーシア等
トルコ語	アルタイ諸語テュルク語派	トルコ、ブルガリア、ギリシャ、キプロス等10カ国

『世界言語文化図鑑（2005）』より

## 第4章 日本語の授受表現の従来の指導法

第3章では、日本語の授受動詞と中国語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語・マレー語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語の授受動詞と比較し、日本語とこれらの外国語の相違点をそれぞれ分析した。その結果、これらの言語では3項体系を持つ言語は日本語以外には見当たらず、最も一般的であると考えられるのは、「あげる」「くれる」に相当する与え動詞が同一で、「もらう」に相当する語と対立する2項体系の言語であることが明らかになった。

そして、日本語の授受動詞の場合には、集団における「ウチ・ソト」の理解は欠かせない要素であり、特に「あげる」と「くれる」の用法には、「ウチ・ソト」の区別が大きく関与しているのに対し、外国語の授受動詞の場合には「ウチ・ソト」の区別がないことも判明した。従って、日本語の授受動詞は、日本語学習者にとって習得しにくい文法項目の一つともいわれている（堀口1984・荒巻2003）が、その原因がこの二つにあることが推定される。

そこで、第4章では、日本語の授受動詞は、日本語教育の現場においてどのように扱われているのか、いくつかの日本語教材及び、日本語教師用指導・参考書、論文などを取り上げ、1) 授受動詞の提出順序、2) 授受動詞の従来指導法という二つの点から分析するとともに、日本語学習者による授受動詞の習得に関する先行研究を1) 口頭データ、2) 作文データ、3) 空欄補充形式テスト、4) 絵を使用した文産出テストという4種類のデータ収集方法別に概観し、これまでの授受動詞の指導法の妥当性を検証する。

### 4. 1 授受動詞の提出順序

日本語教育における授受動詞の提出順序について、本節では、1) 日本語教材における授受動詞の提出順序、2) 日本語教師用指導・参考書及び論文などにおける授受動詞の提出順序という二つの点から分析する。

#### 4. 1. 1 日本語教材における授受動詞の提出順序

まず、日本や中国でよく使われている日本語教材をいくつか取り上げ、それらの教材に

ある「あげる」「もらう」「くれる」がどのような順序で提示されているかを調べた(表8)。

対象とした教材は、1)『初級日本語』(東京外国語大学留学生日本語教育センター2001)、以下「初級」2)『ひらけ日本語初級上・下』(拓殖大学留学生別科・日本語研修センター2001)、以下「ひらけ」3)『日本語初歩』(国際交流基金日本語国際センター2002)、以下「初歩」4)『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』(スリーエーネットワーク1998)、以下「みんな」5)『日中交流標準日本語初級上・下』(日本光村出版・人民教育出版社2005)、以下「標準」で表記する。

表8

日本語教材	総課数	あげる	もらう	くれる
初級	28	第8課	第8課	第8課
ひらけ	25	第9課	第9課	第9課
初歩	34	第29課	第29課	第29課
みんな	50	第7課	第7課	第24課
標準	48	第8課	第8課	第28課

表8から分かるように、『初級』『ひらけ』『初歩』のように、「あげる」「もらう」「くれる」を全て同じ課で扱っているものがある。特に、『初歩』においては、他の教科書と異なり、「あげる」より「やる」が先に導入されている。

これについて、庵(2011:50)は、一般的傾向として「やる」は「あげる」に取って代わられつつあり、そのような実態を受けて、日本語教科書においても「やる」は周縁的な扱いを受けているが、代表的な初級教科書のうち、「やる」を「あげる」よりも先に導入しているのは『日本語初歩』だけであると述べている。

また、『初級』『ひらけ』『初歩』の場合、「あげる」「もらう」「くれる」は、全て同じ課で扱われているものの、提出順序としては、『初級』『初歩』は「あげる>もらう>くれる」の順<sup>27</sup>になっているのに対し、『ひらけ』は「あげる>くれる>もらう」の順になっている。

他方、『みんな』『標準』のように、「あげる」と「もらう」を先に扱い、「くれる」を後

<sup>27</sup> 「あげる」と「もらう」をペアにして導入する場合、提出順序を「あげる・もらう>くれる」と表記するものもあるが、ここでは「あげる>もらう>くれる」と表記する。他の提出順序に関しても同じような表記をする。

で扱っているものもある。

しかし、『初級』『ひらけ』『初歩』のように、「あげる」「もらう」「くれる」を3点セットで導入することは、日本語学習者にとってかなり負担が大きい（白川 2005）、実際、日本語教育の現場では、『みんな』『標準』のように、「あげる」と「もらう」をペアにして、先に導入し、その使い方が定着したところで、「くれる」に入るようにしている教科書が一般的である（庵 2011）。

ここで、日本で一般的に広く使用されている『みんなの日本語』（表9を参照）と中国で一般的に広く使用されている『日中交流標準日本語』（次頁の表10を参照）から実際に例文を引用してみることにする。

I. 『みんなの日本語初級 I・II』（スリーエー1998）（下線及び下線における説明は筆者によるもの）

表9

課	文 型
第7課	文型2： <u>私は</u> <u>木村さんに</u> <u>花を</u> <u>あげます</u> 。 与え手  受け手    物
	文型3： <u>私は</u> <u>カリナさんに</u> （から） <u>チョコレートを</u> <u>もらいました</u> 。 受け手    与え手  物
第24課	文型1： <u>佐藤さんは</u> <u>私に</u> <u>クリスマスカードを</u> <u>くれました</u> 。 与え手    受け手  物

Ⅱ. 『日中交流標準日本語初級上・下』（日本光村出版・人民教育出版社 2005）（下線及び下線における説明は筆者によるもの）

表 10

課	文 型
第 8 課	文型 2 : <u>私は</u> <u>小野さんに</u> <u>お土産を</u> <u>あげます</u> 。 与え手    受け手        物
	文型 3 : <u>私は</u> <u>小野さんに</u> <u>辞書を</u> <u>もらいました</u> 。 受け手        与え手        物
第 28 課	文型 1 : <u>馬さんは</u> <u>私に</u> <u>地図を</u> <u>くれました</u> 。 与え手    受け手    物

『みんな』『標準』に実際引用された例文から分かるように、『みんな』では、「あげる」及び「もらう」を第7課、「くれる」を第24課で提示し、『標準』では、「あげる」及び「もらう」を第8課、「くれる」を第28課で提示するなど、『みんな』も『標準』も本動詞「あげる」「もらう」「くれる」の中で「くれる」だけを区別して遅く提示しているが、「与え手」が主語である文型のうち、「あげる」しか導入しないと、③→①や③→②の文（①②③は人称、矢印はものの移動の方向を表す）で日本語学習者が「くれる」ではなく、「あげる」を用いた文を産出しかねず、「Aさんは私にあげる（○くれる）」「Aさんはあなたにあげる（○くれる）」のような間違いをしてしまう可能性がある。

もちろん『みんな』も『標準』も、このような「与え手」が主語である文型は排除され、練習にもこのような人称の組み合わせは現れないようにしており、また、この場合には、「受け手」を主語とした「もらう」文型にいいかえることもできるが、それより、「与え手」が

主語である「くれる」文型を導入した方がより自然であり、日本語学習者にもより容易に理解できるのではないかと思われる。

更に、話し手の視点を変えることで異なる動詞が同じ内容を表すことから、「あげる・もらう」を「教える・習う」「貸す・借りる」と同じ範疇に入る動詞として扱っている教材も多いが、「あげる・もらう」を単純に他の動詞のペアと一緒に取り上げることは危険であり、これに対処するには、「くれる」を導入しなければならないと森越(1994)は指摘している。

つまり、例文(33、34、35)のように、「教える・習う」「貸す・借りる」動詞を用いた場合、日本語として多少の不自然さは伴う<sup>28</sup>が、どちらのものを使っても同一の事態を表現し得る。そこで、「あげる」と「もらう」も「教える・習う」「貸す・借りる」を用いた例文と同じような文型に当てはめると、以下の例文(36 a)(37 b)のような誤用を引き起こす可能性が高いと考えられる。

(33) a Aさんは私に日本の歌を教えた。 (③→①)

b 私はAさんに/から日本の歌を習った。 (①←③)

(34) a 私はAさんに傘を貸した。 (①→③)

b Aさんは私に/から傘を借りた。 (③←①)

(35) a AさんはBさんに日本の歌を教えた。 (③→③)

b BさんはAさんに/から日本の歌を習った。 (③←③)

(36) a? Aさんは私に本をあげた。 (③→①)

b 私はAさんに/から本をもらった。 (①←③)

(37) a 私はAさんに本をあげた。 (①→③)

b? Aさんは私に/から本をもらった。 (③←①)

(38) a AさんはBさんに本をあげた。 (③→③)

<sup>28</sup> 「私」に向かってなされた行為の場合、行為の授受表現と組み合わせるとより日本語らしく自然な文になる。例文(33a') : 「Aさんは私に日本の歌を教えてください。」



b BさんはAさんに/から本をもらった。 (③←③)

(用例は筆者の作例である)

#### 4. 1. 2 日本語教師用指導・参考書及び論文などにおける授受動詞の提出順序

次に、森越(1994)、横溝(1997)、寺田他(1998)、藤田(2000)、蒲谷(2001)、市川(2005)、庵(2011)を参考<sup>29</sup>に、日本語教師用指導・参考書、論文などで授受動詞をどのような順で提示して指導すべきであるとしているかを次に示す。

1) 寺田他(1998)は、日本語学習者にとって、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、「くれる」が最も分かりにくいことから、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」を日本語教材における授受動詞の提出順序と同じように、「あげる>もらう>くれる」の順に取り上げており、「くれる」を導入する前に、「家族の呼称」を導入することを勧めている。

2) 蒲谷(2001)は、まず「あげる」と「もらう」を取り上げ、「あげる」と「もらう」の関係を把握させ、その次に「もらう」と「くれる」を取り上げ、「もらう」と「くれる」の関係を把握させ、こうした授受の行為と言葉の関係が理解させられれば、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」の導入は完了であると述べている。

3) 市川(2005)は、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」を「教える・習う」「貸す・借りる」と同じ範疇に入る動詞として扱っており、話し手の視点を変えることで異なる動詞が同じ内容を表すことから、蒲谷(2001)と同様、まず「あげる」と「もらう」を導入し、その次に「くれる」を導入することを提案している。

4) 庵(2011)も、蒲谷(2001)、市川(2005)と同様、まず「あげる」と「もらう」を導入し、その次に「くれる」を導入することを提案しており、「あげる」と「もらう」の関係は

---

<sup>29</sup> 寺田他(1998)、蒲谷(2001)、市川(2005)の授受動詞の指導法については、本章の2.2節「実際の授受行為による授受動詞の指導」(78頁)で改めて詳しく紹介する。

次のような図で表すと分かりやすいと述べている。(次頁の図8参照)そして、「くれる」のような視点制約を持つ言語は少ないため、学習者は「田中さんは私に本をあげました。(○くれました)」のような誤用を犯しやすく、また「くれる」と「もらう」は受け手に視点がある点は共通しているが、視点が置かれる名詞句の格が異なり、受け手に視点がある場合はそれが主語になるのが通常であるため、「私は森さんにお金をくれました。(○もらいました)」のような誤用も見られるとし、このように、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」は複雑であるため、同時に扱わない方がよいと言っている。

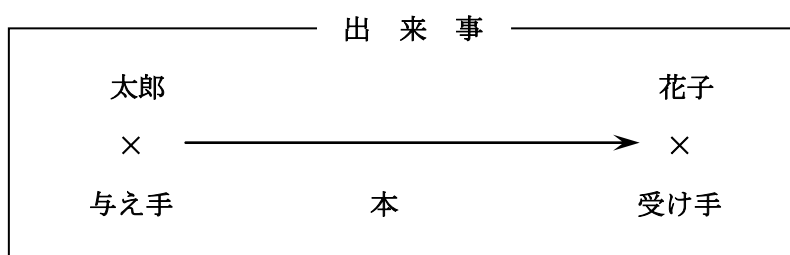


図8 庵(2011: 51)より

5) 森越(1994)は、「くれる」を含めない「あげる」と「もらう」の組み合わせでは、例文「田中さんは私に本をあげた(○くれた)」のように、「あげる」文であるにも関わらず、受け手が「私」側になる誤用を引き起こしやすく、また、「くれる」と「もらう」の組み合わせでは、移動の結果が重視され、「くれる=もらう」という誤解を招き、例文「田中さんは私に本をもらった(○くれた)」のように、「くれる」文であるにも関わらず、「もらう」文を使ってしまう誤用を引き起こしやすいことから、「くれる」を第一に導入することを主張している。次に、「与える(give)」という動詞が日本語には二つあることから、「くれる」に続き、「あげる」を導入し、「くれる」と「あげる」の違い、つまり、移動の方向と与え手・受け手の違いを理解させ、「give」を表す「くれる」と「あげる」が定着したところで、最後に、「receive」を表す「もらう」を導入した方がいいと述べ、授受動詞の移動の方向、及び「私」を中心とした人間関係を理解しやすくするための図式を提案している。(次頁の図9を参照)

6) 横溝(1997)は、日本語の授受動詞を「give」の動詞(与え手+が/は+受け手+に+

物+を+「give」の動詞)と「receive」の動詞(受け手+が/は+与え手+に/から+物+を+「receive」の動詞)と分け、まず、「give」の動詞「あげる(話し手のウチからソトへ物が移動する場合)」と「くれる(話し手のソトからウチへ物が移動する場合)」を導入し、その次に、「receive」の動詞「もらう」を導入することを提案し(次頁の図10を参照)、授受動詞の練習をする際に大切なのは、話し手の視点がどこにあるのか、即ち、与え手及び受け手が話し手のウチにあるのか、ソトにあるのかを常に意識させながら練習させることであると述べている。

7) 藤田(2000)は、「与える」という意味を持つ動詞が方向性によって「あげる」「くれる」と使い分けられるのは他の言語ではあまり見られないことから、まず「あげる」と「くれる」を導入し、そして「あげる」より新しい概念、つまり学習者の母語に存在しない「くれる」の方を強調して教えていくのが妥当であると述べている。また、「あげる」と「くれる」の間に存在する「ウチ」の関係で混乱しかねないところに、「もらう」を導入してしまうと、「くれる」と「もらう」の間に存在する「話し手の視点」という概念も考慮しなければならず、学習者にとっては大きい負担となり、「くれる」の概念をしっかりと理解してもらうためにも、「もらう」は思い切って切り捨て、別の機会に教えるのが効果的であると述べている。

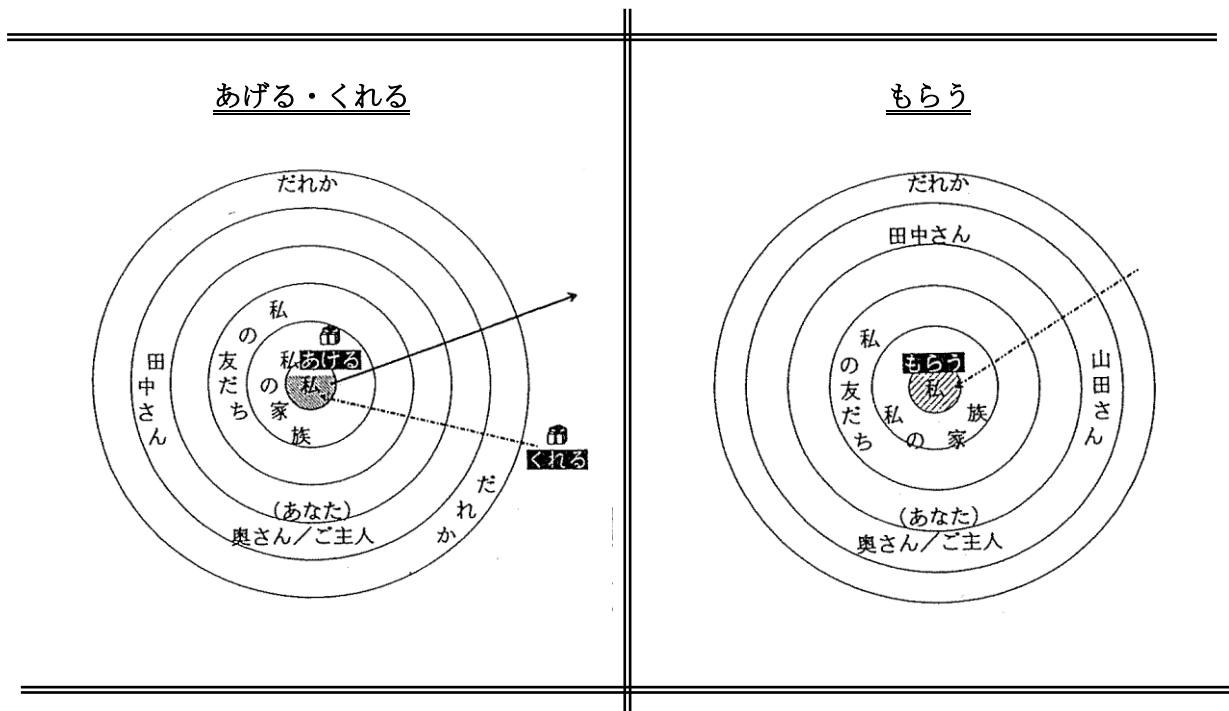
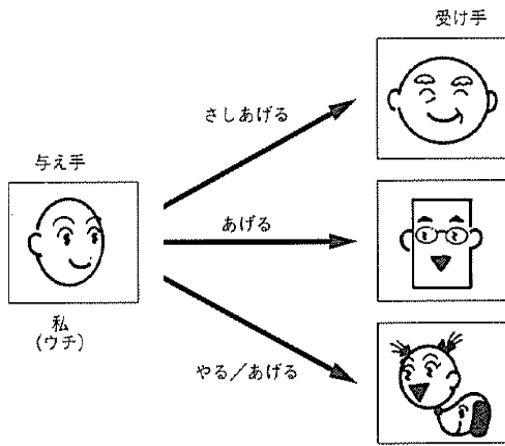


図9 森越(1994:161)より

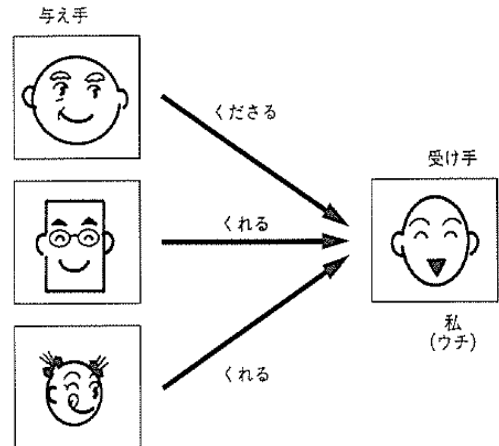
「give」の動詞

基本形：与え手+が/は+受け手+に+物+を+「give」の動詞

①話し手のウチからソトへ物が移動する場合



②話し手のソトからウチへ物が移動する場合



「receive」の動詞

受け手+が/は+与え手+に/から+物+を+「receive」の動詞

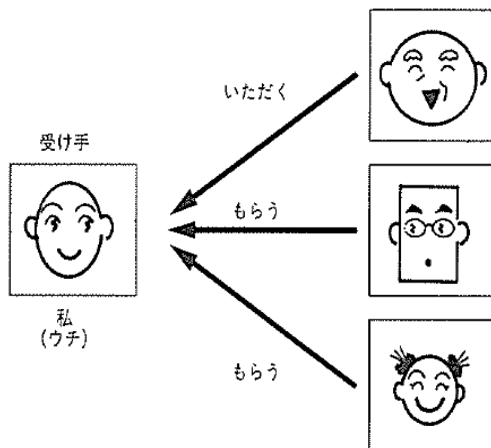


図 10 横溝 (1997 : 128-129) より

## 4. 2 授受動詞の従来の指導法

前節では、日本語教材、及び日本語教師用指導・参考書、論文などにおける授受動詞の提出順序に関する諸説を見てきたが、本節では、日本語教育の現場において、授受動詞は実際にどのように教えられているのか、1) 人称制限による授受動詞の指導、2) 実際の授受行為による授受動詞の指導という二つの点から見ることにする。

### 4. 2. 1 人称制限による授受動詞の指導

日本語教育では、普通、「人称」を、話し手自身を指す「1人称」、話しかける相手を指す「2人称」、それ以外を指す「3人称」の3種に分け、話し手との関係を表す文法を教える場合によく取り上げているが、授受動詞は話し手が大きく関わる文法項目の一つであるため、授受動詞の指導にも「人称」がよく取り入れられている。そして、初出時点で「人称制限」とともに、授受動詞の基本的な文型を導入する教科書や指導書などが多い。

そこで、いくつかの教科書、指導書などを参考に、「人称制限」とその文型の形を表 11 にまとめて示す。(①は1人称、②は2人称、③は3人称、矢印は物の移動の方向を表す)

表 11

授受動詞	人称制限	文 型
あげる	① → ②	私は あなたに [物] を あげる。
	① → ③	私は Aさんに [物] を あげる。
	② → ③	あなたは Aさんに [物] を あげる。
	③ → ③	Aさんは Bさんに [物] を あげる。
もらう	① ← ②	私は あなたに [物] を もらう。
	① ← ③	私は Aさんに [物] を もらう。
	② ← ③	あなたは Aさんに [物] を もらう。
	③ ← ③	Bさんは Aさんに [物] を もらう。
くれる	② → ①	あなたは 私に [物] を くれる。
	③ → ①	Aさんは 私に [物] を くれる。
	③ → ②	Aさんは あなたに [物] を くれる。

表 11 から分かるように、物の移動が「1 人称→2 人称→3 人称」或いは「3 人称→3 人称」の場合には「あげる」、「1 人称←2 人称←3 人称」或いは「3 人称←3 人称」の場合には「もらう」、「3 人称→2 人称→1 人称」の場合には「くれる」が用いられる。

しかし、物の移動が「3 人称（与え手）→3 人称（受け手）」の場合、「人称制限」による文型に基づくと「あげる」しか使えないが、これは例文（39 a・b）のように、話し手の視点が与え手寄りか、中立の時にのみ用いられるものであって、例文（39c）のように、話し手の視点が与え手よりも受け手寄りの時には「あげる」は使えず、その代わりに「くれる」が使われる。

(39) a 兄は 田中さんに 本を あげた。(作例)

与え手      受け手      物

3 人称 → 3 人称

\* 話し手の視点が与え手寄りの場合

b 兄は 妹に 本を あげた。(作例)

与え手      受け手      物

3 人称 → 3 人称

\* 話し手の視点が中立の場合

c 田中さんは 兄に 本を くれた。(作例)

与え手      受け手      物

3 人称 → 3 人称

\* 話し手の視点が受け手寄りの場合

このように、「あげる」と「くれる」の選択は、「人称制限」の方向、つまり「人称」という概念では不十分であり、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定され、話し手を中心に遠心的方向の授与には「あげる」が、求心的方向の授与には「くれる」が用いられる（山田 2011 : 5）。

つまり、第 1 章の 1.4 節（14 頁）でも述べたが、「あげる」の場合は、例文（40a）のよ

うに、与え手側に話し手の視点が置かれ、与え手が「ウチ」、受け手が「ソト」の関係を表し、物の移動は「ウチ」から「ソト」へである。一方、「くれる」の場合は、例文 (40 b) のように、受け手側に話し手の視点が置かれ、与え手が「ソト」、受け手が「ウチ」の関係を表し、物の移動は「ソト」から「ウチ」へ向かっている。

(40) a 兄は 田中さんに 本を あげた。(作例)

与え手      受け手      物

ウチ → ソト

b 田中さんは 兄に 本を くれた。(作例)

与え手      受け手      物

ソト → ウチ

#### 4. 2. 2 実際の授受行為による授受動詞の指導

実際の授受行為による授受動詞の指導においては、学習者に物を持たせ、実際にやり取りをさせながら、体で覚えさせるのが一般的であると思われる。ここでは、寺田他 (1998)、蒲谷 (2001)、市川 (2005) の授受動詞の指導方法を紹介することにする。

##### 1) 寺田他 (1998 : 77-80) の指導法

###### ① 「～に～をあげます」の導入

必ず物を持って、実際にやり取りさせながら体で覚えさせるようにするのがコツである。きれいな包装紙に包んで大きなりボンをつけたプレゼントの箱、花、本、辞書、外国の切手、ボールペン、チョコレート、テレホンカード、ゲームソフトなどを並べておく。

T (教師) : <学習者の一人を教師の方に呼んで>今日はAさんの誕生日です。私はAさんにプレゼントをあげます。<プレゼントの箱を渡しながら>どうぞ。

A (Aさん) : ありがとうございます。

T : Aさんにプレゼントをあげます。 <A以外の学習者にリピートを促す>

L (学習者) : <リピート>Aさんにプレゼントをあげます。

T : <Bを前に呼び>Bさんは何をあげますか。 <置いてある物を指して、この中から選んでAに渡すように促す>

B (Bさん) : <教卓の上から花を取り上げて>花をあげます。 <と言いながらAに渡す>

T : <Tが引き取って>BさんはAさんに花をあげました。 <以下、引き続き実際にものを持って、渡しながらかわせる>

注1 : もらった本人に「～さんは私に～をあげました」といわせないように注意する。コーラス（皆で声をそろえて言う）にも参加させない。

## ②「～に～をもらいます」の導入

「あげます」の場合と同様、実際に物を持ってやり取りさせながら導入する。

T : BさんはAさんに花をあげました。 <教師はAの後ろに立って、今度はAの側（視点）に立って言っていることを理解させながらAがもらった花を指して>AさんはBさんに花をもらいました。 Aさんは……。 <Aの視点で言うように、A以外の学習者に促す>

L : AさんはBさんに花をもらいました。

T : <[1]でやり取りされた物を使って、C以外の学習者に聞く>では、AさんはCさんに何をもらいましたか。

L : ボールペンをもらいました。

T : <以下続けて、あげた人以外の人に「もらいました」を使ってかわせる>

注1 : ここでも、あげた本人に「Aさんは私に～をもらいました」といわせないように注意する。

説明 : お正月、クリスマス、バレンタインデー、祭りなどの時の自国の贈り物の習慣について、「あげる・もらう」を使って互いに質問し、話させる。



### ③「家族の呼称」の導入

初めに「お父さん・お母さん」などの家族の言い方を導入する。それが定着したら、自分の家族を他の人に言う場合の「父・母」などの言い方を導入する。両方が定着したら、使い分けができるように練習する。

T：佐藤さんの家族です。＜家族の顔をかいた絵を黒板に貼り、絵を指して導入する＞お父さん・お母さん・お兄さん・お姉さん・弟さん・妹さん。＜リピートさせ、更に、学習者を1人前に出させて、家族の顔をかいた絵の「さとうさん」の上に「私」のカードを貼らせる＞私の家族です。父です、母です。＜以下、兄・姉・弟・妹、と導入する＞

説明：写真や家族の略図を見ながら、次のように呼称の言い方をペアで練習する。皆が言えるようになったら、自分の家族の紹介をさせる。

注1：自分から希望する人には写真を持ってこさせるとよい。学習者の中には、様々な事情からプライベートなことには触れられたくない人もいるので、クラスの中では「練習だから本当のことを話す必要はない」と断り、架空の絵などを使うという配慮も必要である。

注2：学習者によっては、夫・妻、息子・娘、ご主人・奥さん、息子さん・お嬢さんなどの語彙も導入する。

### ④「私に～をくれます」の導入

「くれます」は、「私に」または「私グループの人に」しか言わないことをはっきり提示すること大切。マグネットシートの「話し手視点マーク」を使い、兄の絵と自分の絵を用意し、紹介したあと、黒板に立てかけておく。

T：＜CDを持って兄の絵の方から自分の方に近付けて＞私は誕生日に兄にCDをもらいました。誕生日に兄は私にCDをくれました。「くれます」は「私に」か「私グループの人に」だけです。＜話し手視点マークを使って、話し手が私であることを視覚的に見せる＞兄は私にCDをくれました。

L：＜リピート＞兄は私にCDをくれました。

説明：「私に」だけそのままにして、与える人を家族や友人と入れ替えたり、物を入れ替えたりして、文型練習をする。

そのあと、誕生日などにもらった物について「～は（私に）～をくれました」の形で話させる。

注1：あまり親しくない人や目上の人から何かもらった時など、「くださいました」を使った方がいい場面が多いので、余裕があれば「先生は私に本をくださいました」などのように「くださいました」も導入する。

## 2) 蒲谷 (2001 : 52-53) の指導法

### ①「あげる」と「もらう」の導入

AさんがBさんにCという物を渡す行為を見せ、「AさんはBさんにCをあげました」「BさんはAさんにCをもらいました」と客観的に表現させる。ここでのポイントは、「誰が、誰に、何をあげ・もらう」という関係を把握させることである。

### ②「くれる」の導入

次に、Bさんのところに近づき、「私は…」とキューを与え、その後を言わせる。Bさんが「私はAさんにCをもらいました」とここまでは上で紹介した「もらう」の導入と同様であるが、その次に、「Aさんは…」とキューを与える。「あげる」と「くれる」は授受の方向が同じであるため、ここで導入の仕方を誤ると学習者を混乱させてしまうことになる。「Aさんは私にCをあげ…」ではなく、「Aさんは私にCをくれました」と言わせることで「もらう」「くれる」の関係を把握させるわけである。こうした授受の行為と言葉の関係が理解させられれば、本動詞の導入は完了である。

### 3) 市川 (2005 : 283-284) の指導法

「やりもらい」は、物・事柄の移動と人の関係がポイントである。誰が何をあげ、誰が何をもらうのかがつかめるかというところが一番重要になる。導入の仕方としてはまず、造花の、それも派手できれいな花を1、2本用意する。そして、それを実際に学習者に持たせて練習する。

#### ①「あげる」・「もらう」の導入

A (Aさん) : <隣の学生に> Bさんに花をあげます。 <実際に渡す>

B (Bさん) : <受け取って>ありがとうございます。 Aさんに花をもらいました。 <そして、学生Cに> Cさんに花をあげます。

C (Cさん) : ありがとう。 Bさんに花をもらいました。

... ..

説明:これを全員に繰り返す。単調になってきたら花の代わりにCDや漫画の本などを使う。学習者の印象に残るような、楽しいものを選んだ方がいい。

#### ②「くれる」の導入

「あげる」「もらう」が終わったら、「くれる」の練習に入る。

A : <隣の学生に> Bさんにこのおもちゃをあげます。 <実際に渡す>

B : <受け取って>ありがとう。 Aさんにおもちゃをもらいました。 Aさんがおもちゃをくれました。 <そして、次に学生Cに> Cさんにこのおもちゃをあげます。

C : ありがとう。 Bさんにこのおもちゃをもらいました。 Bさんがおもちゃをくれました。

... ..

説明：これをまた、全員に繰り返す。途中で「もらいました」の文を省略して、次のように「くれる」の文をすぐ言わせてもいい。

D (Dさん)：<受け取って>ありがとう。Cさんがおもちゃをもらいました。<そして、次に学生 E (Eさん) に> Eさんにこのおもちゃをあげます。

説明：途中で「やりもらい」しているものについて、「これは何のおもちゃですか」など会話をはさむのも自然で楽しくなる。「いただく」「くださる」も使えるように、教師が途中に入ったり、学生の中で誰かを先輩や年上の人にして、自由に使い分けできる練習に変えるといい。この、実際に動作を使って物のやり取りを練習することで、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」「いただく」「くださる」などの使い方が身に付く。ここで、しっかり物のやり取りを身に付けておかないと、後で学習する「動作のやりもらい（～であげる・～でもらう・～でくれる）」がうまく行かず、授受動詞の混乱が続くことになるので、十分練習しておく必要がある。

以上、寺田他（1998）、蒲谷（2001）、市川（2005）らの授受動詞における指導方法についてそれぞれ見てきたが、授業の流れや内容など、いずれも少しずつ異なるものの、クラス内で実際にやり取りをしながら、教師と学習者、或いは学習者同士で質問したり答えたりして授業を展開していく方法は同じであることが分かる。このように、「実際の授受行為による指導」は、実際に日本語教育現場においてもよく使われているが、この方法だけでは、次のような問題点が考えられる。

1) クラス内における学習者同士、つまり学習者と学習者とのやり取りだけでは、「人物」と「場面」の設定が限られてしまうため、簡単なやり取り（例えば、「AさんはBさんにあげる」「BさんはAさんにもらう」「Aさんは私にくれる」など）、つまり基本的な使い分けは説明できるものの、複雑なやり取り（例えば、「AさんはBさん（話し手のウチ側）にくれる」など）、つまりウチとソトの人間関係の理解を背景においたような複雑な使い分けは説明できるとは限らない。

2) クラス内で具体的ものをやり取りして指導していく方法では、ほとんど教師の指示に

従って行われているため、教師主導型の授業になりやすく、学習者の学習意欲を低下させてしまう恐れがある。また、教師もそのやり取りに加わらざるを得ず、教師が登場することによって、初級の授受動詞の導入にも関わらず、その導入段階から「さしあげる」「いただく」「くださる」も教えざるを得ないため、学習者を混乱させてしまう。

#### 4. 3 日本語の授受動詞における習得研究

本節では、大塚 (1995)、井ノ口 (1996)、坂本・岡田 (1996)、田中 (1996)、岡田 (1997)、坂本 (2000)、韓 (2003)、尹 (2004a・b) を参考<sup>30</sup>に、日本語学習者を対象とした授受動詞の習得研究<sup>31</sup>を「口頭データ」「作文データ」「空欄補充形式テスト」「絵を使用した文産出テスト」という4種類のデータ収集方法別に概観し、授受動詞の習得順序及びそれに影響を及ぼす要因をデータ収集方法別にまとめることにする。

##### 4. 3. 1 口頭データによる習得状況

日本語学習者の口頭データを用いた授受動詞の習得研究には、大塚 (1995)、井ノ口 (1996) などがあるが、ここでは、大塚 (1995) を紹介する。

大塚 (1995) は中・上級日本語学習者 (主に英語話者、中国語話者、韓国語話者) が台詞のない20コマ漫画を見て話を叙述した口頭データを用いて、日本語学習時期別に授受動詞の使用を調査している。

その結果、日本語学習初期の学習者は「(て) あげる」を過剰に使う傾向が見られるが、日本語学習が進むにつれ、「(て) あげる」の使用は減り、「(て) くれる」「(て) もらう」の使用が増加するものの、「(て) くれる」の出現率は日本語学習者の学習が進んでも日本語話者の出現率の半分以下で、日本語学習にとって、「(て) くれる」の使用は容易ではないと報告している。

授受動詞の習得順序に関しては、日本語学習者の使用率から、①「(て) あげる」>②「(て) もらう」>③「(て) くれる」の順に習得が進むと推測され、日本語学習者にとって、話し手の視点と文の主語が一致する「(て) あげる」「(て) もらう」の方が主語が与え手であり、話し手の視点が受け手である「(て) くれる」より習得されやすいと指摘している。

---

<sup>30</sup> 大塚 (1995)、井ノ口 (1996)、坂本・岡田 (1996)、岡田 (1997)、坂本 (2000) の調査においては、授受本動詞の他に、授受補助動詞のデータも入っているため、授受本動詞の習得順序及びそれに影響を及ぼす要因には、授受補助動詞の要素も多少入っている。

<sup>31</sup> 授受動詞の習得研究に関しては、日本語学習者 (成人) を対象にした研究の他に、日本語話者 (年少児) を対象にした研究もあるが、日本語話者 (年少児) の習得においては、自然環境での発話資料を基にした研究が多い (坂本 2000: 116)。習得順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順に推測できると、大久保 (1967)、藤原 (1976)、堀口 (1979) は報告している。

#### 4. 3. 2 作文データによる習得状況

日本語学習者の作文データを用いた授受動詞の習得研究には、岡田（1997）、坂本（2000）などがあるが、ここでは、岡田（1997）を紹介する。

岡田（1997）は、1学期間（4ヶ月）提出された初・中級日本語学習者（主に英語話者、中国語話者）のウィークリー・ジャーナルを資料とし、その中で用いられた授受構文を収集し、文レベルと談話レベルにおける授受動詞の習得状況を調査している。

その結果、文レベルの場合、初級レベルでは「あげる」と「もらう」との混同は見当たらず、「あげる」と「くれる」との混同、「もらう」と「くれる」との混同はあるものの、中級レベルでは、「あげる」と「くれる」との混同、「もらう」と「くれる」との混同もほとんどなくなると報告している。

一方、談話レベルの場合、初級レベルでは、「(て) あげる」の過剰使用、「(て) くれる」の使用回避（「(て) くれる」文で叙述すべきところを「(て) もらう」文で代用する）の傾向が見られるが、中級レベルでは、「(て) あげる」の過剰使用、「(て) くれる」の使用回避もほとんどなくなる。しかし「(て) くれる」の非用は中級レベルに入ってもまだ多く見られると報告している。

授受動詞の習得順序に関しては、日本語学習者の正答率・使用率から、大塚（1995）と同様、①「(て) あげる」>②「(て) もらう」>③「(て) くれる」の順<sup>32</sup>に習得が進むと推測され、授受行為が主語（与え手）から目的語（受け手）へ方向付けられていること、視点が主語と一致することなどの点から、日本語学習者にとって、「(て) あげる」の習得は「(て) もらう」「(て) くれる」に比べ、早い段階で進み、「(て) あげる」構文は「(て) もらう」「(て) くれる」構文に比べ、使いやすい構文であると述べている。

#### 4. 3. 3 空欄補充形式テストによる習得状況

日本語学習者の空欄補充形式テストを用いた授受動詞の習得研究には、坂本・岡田（1996）、韓（2003）などがあるが、ここでは、坂本・岡田（1996）を紹介する。

坂本・岡田（1996）は、初級・上級日本語学習者（主に英語話者、中国語話者、ベトナム

<sup>32</sup> 坂本（2000）は、韓国学習者（学習歴2年ほど）の8ヶ月にわたる作文資料を分析した結果、授受動詞の使用頻度から、韓国学習者の習得順序は、①「(て) くれる」>②「(て) もらう」>③「(て) あげる」の順に推測できると報告している。

ム話者)に談話形式・文章形式で空欄に適切な授受動詞を入れる空欄補充調査を行っている。

その結果、日本語能力別、母語別に正答率を見ると、初級レベルの場合は、中国語話者が最も習得が進み、次にベトナム語話者、英語話者の順になっているが、日本語能力が上がるにつれ、授受動詞の習得もかなり進み、その中でも、英語話者が他の母語話者より最も大きく上昇し、上級レベルになると、英語話者も中国語話者も正答率がほとんど変わらないと報告している。

授受動詞の習得順序に関しては、日本語学習者の正答率から、大塚(1995)、岡田(1997)と同様、①「(て)あげる」>②「(て)もらう」>③「(て)くれる」の順<sup>33</sup>に習得が進むと推測され、視点の置き方(「身内」と「よそ者」との使い分け)が授受動詞の正答率に大きく影響し、「(て)くれる」と書いて誤用になった誤答が最も多いことから、「(て)くれる」の習得が一番遅いのではないかと指摘している。

#### 4. 3. 4 絵を使用した文産出テストによる習得状況

絵を使用した文産出テストを用いた授受動詞の習得研究には、田中(1996)、尹(2004a)などがあるが、田中(1996)は、授受補助動詞「～てくれる」「～てもらう」を中心とした調査であるため、ここでは、尹(2004a)を紹介する。

尹(2004a)は、韓国人日本語学習者(韓国の大学で日本語を専攻する大学2、3、4年生)を対象に、絵を使用した文産出テスト(学習者は絵に示された物の授受方向(「私→他者」と「他者→私」と語彙の情報に従い文を作成した。)を用いて授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得状況を、1)日本語レベルが高くなるにつれ、授受本動詞の習得は進むか、2)誤用の形態、種類(意味論的な誤りと語用論的な誤りの観点から)は日本語レベルによって異なるかという二つの研究課題を設定し、調査を行っている。

尹(2004a:44)によると、意味論的な誤りとは、例文(41a)のように、授受本動詞の使用は文法的には正しいが、与え手と受け手の位置づけが誤っているため、本来の物の授受方向とは全く正反対であり、かつ文意の命題関係が正しく伝えられていないものである。

<sup>33</sup> 韓(2003)は、初級・中級日本語学習者(主に韓国語話者、英語話者、中国語話者)を対象に、空欄補充形式テストの形式で授受動詞の習得状況を調査した結果、正答率の高さから、韓国語話者と英語話者は、①「(て)もらう」>②「(て)くれる」>③「(て)あげる」の順になるのに対し、中国語話者は、①「(て)もらう」>②「(て)あげる」>③「(て)くれる」の順になると報告している。



一方、語用論的な誤りとは、例文 (41b, c) のように、文意の命題関係は正しく表現されているが、日本語の特徴である視点の制約を破っているため、文法的に間違った表現、もしくは不自然な表現になるものであるとしている。

(41) a 母に私の編んだ手袋をもらいました (○あげました)。『私→他者』

(用例は (韓 2003 : 312) より引用)

b アニルさんは私にテレビをあげました (○くれました)。『他者→私』

(用例は (市川 1997 : 178) より引用)

c 田中さんは私にテープをもらいました (○私が～あげました)。『私→他者』

(用例は (市川 1997 : 184) より引用)

その結果、物の授受方向が「私→他者」の場合、「あげる」は日本語学習レベルの差に関わらず、最も多く使われているが、上級レベルになっても正用「あげる」の使用率は100%にはならないことから、意味論的な誤り「他者が～くれる」「私が～もらう」と語用論的な誤り「私が～くれる」「他者が～もらう」が考えられると報告している。そして、意味論的な誤り「他者が～くれる」「私が～もらう」は中・上級レベルではなくなるが、語用論的な誤り「私が～くれる」「他者が～もらう」は日本語学習レベルに関係なく、一般的に多く見られると報告している。

一方、物の授受方向が「他者→私」の場合、「くれる」より「もらう」の方が多く使われており、それは、話し手「私」が受け手の場合、視点の置き方によって「あげる」と対立している「くれる」より、対立動詞のない「もらう」の方を好んで使用しているからではないかと報告している。また、「もらう」の使用率は、日本語学習レベルに関係なく、差はないが、「くれる」の使用率は、初級レベルの方が中・上級レベルより低いことから、意味論的な誤り「私が～あげる」、語用論的な誤り「他者が～あげる」、意味論的・語用論的な誤り「私が～くれる」、「他者が～もらう」が考えられると報告している。そして、意味論的な誤り「私が～あげる」は上級レベルでなくなり、語用論的な誤り「他者が～あげる」は日本語レベルが高くなるにつれ、少なくなるに対し、意味論的・語用論的な誤り「私が～くれる」「他者が～もらう」は他の誤用より低いものの、日本語レベルが高くなっても見ら

れると報告している。

授受動詞の習得順序に関しては、日本語学習者の正用率・使用率から、大塚（1995）、坂本・岡田（1996）、岡田（1997）と同様、①「(て) あげる」>②「(て) もらう」>③「(て) くれる」の順に進むと推測され、授受本動詞における与え手と受け手の位置づけは日本語レベルが高くなるにつれ、習得されるが、視点の置き方は日本語レベルが高くなっても習得されにくく、日本語教育現場では、「あげる」と「くれる」との使い分けとともに、「もらう」の視点制約についても明示的に教示すべきであると指摘している。

#### 4. 4 まとめ

以上、これまでに見てきた日本語教材、及び日本語教師用指導・参考書、論文における授受動詞の提出順序、従来の授受動詞の指導法、更に日本語学習者における授受動詞の習得状況をまとめると以下ようになる。

- 1) まず、日本語教材における授受動詞についてそれぞれ見てきたが、「あげる」「もらう」「くれる」を同じ課で扱うにせよ、「あげる」と「もらう」を先に扱い、「くれる」を後で扱うにせよ、提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順が一般的であることが判明した。また、「あげる・もらう」を「教える・習う」「貸す・借りる」と同じ範疇に入る動詞として扱ってしまうと誤用を引き起こしやすく、「くれる」だけをあまり遅く提示するのも好ましくないことも分かった。

更に、日本語教師用指導・参考書、論文などにおける授受動詞についてそれぞれ見てきたが、提出順序としては、いずれも少しずつ異なる主張であるものの、日本語教材における授受動詞と同様、「あげる>もらう>くれる」の順を提案しているものが最も多いことが分かった。一方、「くれる>あげる>もらう」の順を提案しているものもあれば、「あげる>くれる>もらう」の順を提案しているものもあり、日本語教材にはほとんど取り上げられていない提出順序もあることが判明した。

- 2) 次に、日本語教育の現場における授受動詞を「人称制限による授受動詞の指導」「実際の授受行為による授受動詞の指導」という二つの点から見てきたが、「人称制限による授受動詞の指導」では、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の選択は、「人称制限」の方向、つまり「人称」という概念では不十分であり、話し手を中心に遠心的方向の授与には「あげる」、求心的方向の授与には「くれる」が用いられ、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定されることが明らかになった。

更に、「実際の授受行為による授受動詞の指導」では、クラス内における学習者同士のやり取りだけでは、「人物」と「場面」の設定が限られてしまうため、簡単なやり取り、つまり基本的な使い分けは説明できるものの、複雑なやり取り、つまり複雑な使い分けは説明できるとは限らず、また、そのやり取りには教師も加わりやすく、教師が登場することによって、初級段階での授受動詞の導入にも関わらず、「さしあげる」

「いただく」「くださる」も教えざるを得ないため、学習者を混乱させてしまう可能性があることも判明した。更に、そのやり取りは教師の指示に従って行われているため、教師主導型の授業になりやすく、学習者の学習意欲を低下させてしまう恐れがあることも分かった。

- 3) 最後に、日本語学習者における授受動詞の習得順序及びそれに影響を及ぼす要因を「口頭データ」「作文データ」「空欄補充形式テスト」「絵を使用した文産出テスト」という4種類のデータ収集方法別に見てきたが、習得順序としては、調査対象、調査方法などによって、結果に差が出る可能性があるにも関わらず、「あげる>もらう>くれる」の順に進むと報告しているものが最も多く、授受動詞の習得に影響を及ぼす要因としては、「視点の置き方」が一番大きいことが判明した。

## 第5章 日本語の授受表現の新たな指導法

第4章では、日本語教材及び日本語教師用指導・参考書、論文における授受動詞の提出順序、今までの授受動詞の指導状況、更に日本語学習者における授受動詞の習得状況について見てきたが、授受動詞の提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順が最も一般的であることが明らかになり、授受動詞の指導には、「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の選択は、「人称」という概念では不十分であり、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という認知的な概念によって規定されるため、「ウチ・ソト」による指導が必要であることも判明した。

また、習得順序としては、話し手の視点と文の主語が一致する「あげる」「もらう」の方が主語が与え手で、話し手の視点が受け手である「くれる」より習得されやすく、授受動詞の習得に影響を及ぼす要因としては、「視点の置き方」が一番大きいことも分かった。

そこで、第5章では、第4章はもちろん、いままで調べてきた第1章、第2章、第3章の内容も踏まえ、授受本動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に困難とされる「あげる」と「くれる」との使い分けを教授するための新たな教案を作成し、指導法を提案する。

### 5. 1 新たな指導法における提出順序

第4章で述べたように、日本語教材及び日本語教師用指導・参考書、論文における授受動詞の提出順序も、日本語学習者における授受動詞の習得順序も、「あげる>もらう>くれる」の順になっているのが最も一般的であることから、新たな指導法においても、提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順に進むことにする。

但し、本論文では、授受本動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」を使い分けることを最終目的とするため、本章では、「あげる」と「もらう」の関係、「もらう」と「くれる」の関係については、基本的な使い分けを紹介するだけにとどめ、主に他言語にない「あげる」と「くれる」の使い分けを中心とした指導を展開していくことにする。

## 5. 2 新たな指導法における導入

まず、「あげる」と「もらう」との基本的な関係、その次に「もらう」と「くれる」との基本的な関係を学習者に実際にやり取りをさせながら理解させ、「あげる」と「もらう」との基本的な使い分け、「もらう」と「くれる」との基本的な使い分けをしっかりと把握させる。それと同時に、「与える (give)」という動詞が日本語には二つあることを学習者に気付かせ、最後に「あげる」と「くれる」との使い分けを導入した方が学習者にとってはより分かりやすいのではないかと思う。これを図示すると、以下のようになる。(図 11)

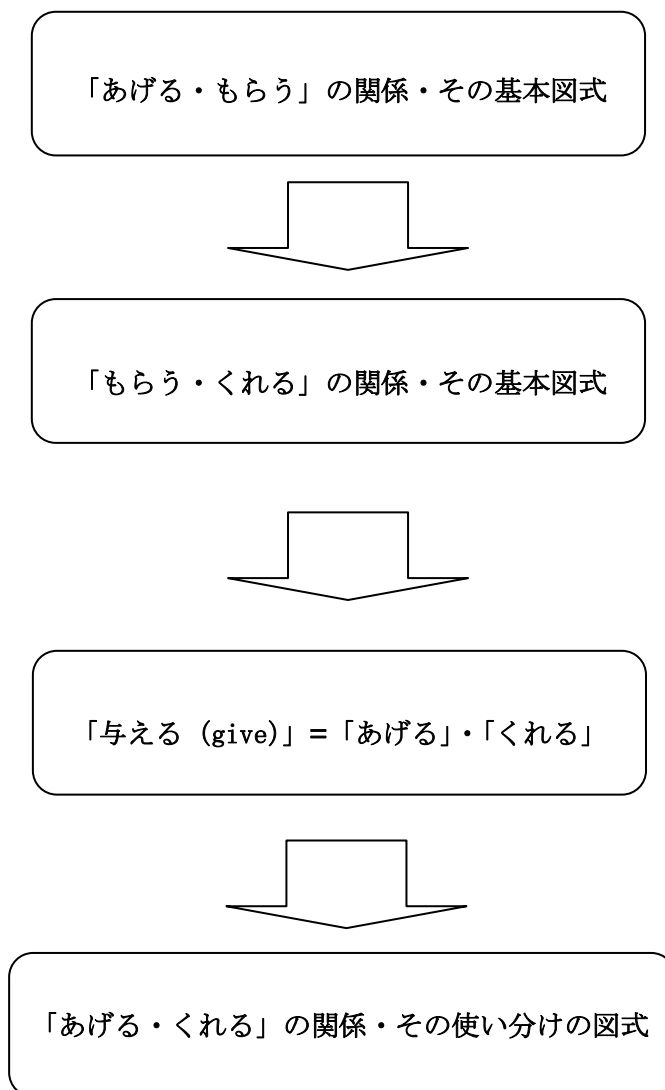


図 11

## 5. 2. 1 「あげる」と「もらう」の関係・その基本図式

「あげる」と「もらう」の意味を導入するために、それらの言葉が出てくるシチュエーションとして、「クリスマス」や「バレンタインデー」、「母の日」などを設定し、プレゼントの絵などを用意する。指導の方法としては、問答法、つまり質問と応答を繰り返し、教師と学習者の相互作用により授業を進めていく。

T（教師）：<クリスマスツリーやプレゼント、サンタクロースなどが描かれている絵カードを見せて>

これは何の日ですか。

L（学習者）：クリスマスです。

T：クリスマスは何日ですか。

L：クリスマスは12月25日です。

T：<絵の中にあるプレゼントを示して>

これは何ですか。

L：それはプレゼントです。

T：<絵の中のサンタクロースを指して>

この人は誰ですか。

L：その人はサンタクロースです。

T：サンタクロースは何をしますか。

L：分かりません。

T：サンタクロースは子供たちにプレゼントをあげます。

子供たちはサンタクロースにプレゼントをもらいます。

.....

T：<バレンタインデーにチョコレートをあげる場面の絵カードを見せて>

これは何の日ですか。

（以下、同様に展開する）

.....

T：<母の日にカーネーションをあげる場面の絵カードを見せて>

これは何の日ですか。

（以下、同様に展開する）

最後に、「A」と「B」のカードをホワイトボードの左端と右端に貼って、「A→B」のように、AとBの間に矢印を書いて「あげる」と「もらう」との基本関係を図で表す。(図12)



図 12

### 5. 2. 2 「もらう」と「くれる」の関係・その基本図式

T : <図 12 の A さん側に立って>

A さんは B さんにプレゼントをあげました。

<今度は、B さん側に立って、学習者にキューを与える>

B さんは？

L : B さんは A さんにプレゼントをもらいました。

T : <B のカードを私の書かれているカードに替えて、またキューを与える>

私は？

L : 私は A さんにプレゼントをもらいました。

T : A さんは？

<学習者にキューを与える>

L : A さんは私にプレゼントをあげ……。

T : いいえ。

A さんは私にプレゼントをくれました。



最後に、Aのカードの下に「Aさんは私にくれる」、私のカードの下に「私はAさんにもらう」と板書し、図12と図13を比較しながら、「あげる」と「もらう」の関係、「もらう」と「くれる」の関係を把握させ、そして、与え動詞には「あげる」の他に、「くれる」があることを気付かせる。>これを図示すると、以下のようなになる。(図13)

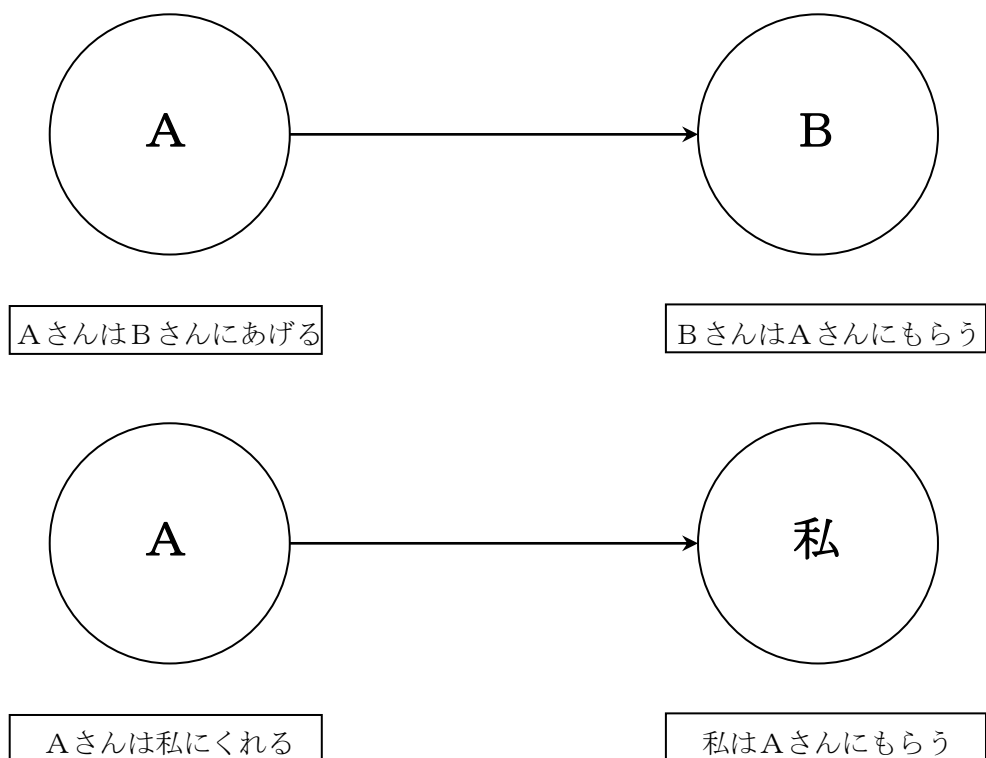


図13

### 5. 3 「あげる」と「くれる」との使い分け・その図式

前節では、「あげる」と「もらう」の基本的関係、「もらう」と「くれる」の基本的関係を、従来の指導法と同じように、主に「実際のやり取り」や「基本的な図式」などを通して、指導してきた。本節では、「あげる」と「くれる」の関係をまず、認知心理学観点から分析し、次に、その分析に基づき、「あげる」と「くれる」との使い分けを「人と人とのやり取り」「会社と会社とのやり取り」「国と国とのやり取り」など、3種類のやり取りに分けて指導していく。

#### 5. 3. 1 認知学習理論による「あげる」と「くれる」との関係

前章の2.2節(78頁)で既に取り上げたが、従来の指導法では、教室内で教師と学習者、或いは学習者と学習者の間で実際に物をやり取りして、教えていくことが多い。

しかし、既に述べたように、「あげる」「くれる」は、客観的な個々の人称によって固定しておらず、ウチ・ソトの社会的、或いは話し手の心理的な親疎関係、日本人特有の集団意識に基づくウチ・ソトという話し手のいわば、認知的観点によるもので、個々の人称によって固定しているものではなく、相対的なものである。この関係は、個々の人間を見ている、理解できるものではなく、話し手のウチかソトかという内的な情報処理過程が存在する。

また、実際の場面では、認知心理学でいう心的マップ、或いは認知マップ<sup>34</sup>のようなイメージマップのようなものに基づいて運用されていくように思われる。

認知マップ(COGNITIVE MAPS)とは、認知心理学事典(1998:341)によると、ある人の周りの場所の心的な表現であるということである。例えば、家の間取りの表現であったり、近所の表現であったり、国や世界の表現であることもある。ここで、認知マップという言い方が役に立つのは、人が自分のいる環境の心的な表現をあたかも地図を扱うのと同じように取り扱うことがあるからである。よく慣れている場所にいる時には、あらかじめどの道を通ったらいいか考えたり、近道をしたりして、無駄のない経済的な動きをすることができる。しかし、認知マップという用語が誤解を招くこともある。というのは、見知った環境を動き回る時に必要とされる認知過程と、実際の地図の上を動き回る時に必要になる

<sup>34</sup> ここでは、認知地図を認知マップと呼ぶことにする。

過程が同じものであるとは考えられないからであるという。

かつて Tolman<sup>35</sup> (1932) は、ねずみが迷路を走る時、どこで曲がるかというような行動主義的な刺激反応という個々の単純な反応の連合では、説明がつかないことを指摘し、そのこには個々の刺激反応の関係以上のものが含まれていると確信するようになった。やがて、このことは、Tolman (1948) などによって、外的に知覚できる条件や事象ではなく、迷路の認知マップを学習し、その心的構造に基づいて行動を導くというということを様々例証から導き出しおり、現在の認知心理学の定説となっている。

ここで、アンダーソン (1982) に書かれている「ねずみに迷路を走ることを考える古典的な研究パラダイム」を簡単に紹介しておきたい。

次頁にある図 (14a) はねずみに走ることを教える単純なT型迷路を示す。ねずみは出発箱に入れられ、迷路への開放ドアが開き、選択点まで走ってどちらの方向に走るかを選択する。迷路の終端の箱には餌が入っている場合とそうでない場合があり、ドアを閉めてねずみを箱の中に閉じ込める。この手続が何回も繰り返される。最初、ねずみはでたらめに選択するが、時間とともに一方に餌があることを学習する。飢えたねずみは餌のある側へ走ることを学習する。この種の行動の基礎にある知識はどんな性質なのだろうか。ねずみは迷路内の刺激を正しく曲がる (右側) 反応と連合させる学習をしたのだといえるかもしれない。この知識を刺激・反応結合として下記のように表現することができる。

迷路 → 右折

ここで迷路とは迷路内における感覚刺激を意味する。また→は迷路が右折反応を導くことを意味する。

今度は図 (14b) の複雑な迷路を考えてみよう。この迷路は6つの選択点を持ち、ねずみは左折1回、右折2回、左折2回、そして右折1回をしなければならない。飢えたねずみはこの迷路をも学習する。ここではより複雑な刺激・反応結合が必要である。

S 1 : 第1 選択点 → 左折

S 2 : 第2 選択点 → 右折

S 3 : 第3 選択点 → 右折

---

<sup>35</sup> 「フリー百科事典 ウィキペディア日本語版 (Wikipedia)」によると、エドワード・チェイス・トールマン (Edward Chase Tolman, 1886~1959) は、巨視的立場から目的論的行動主義を唱え、行動主義心理学に媒介変数を導入したアメリカの心理学者で、認知心理学の成立に大きな影響を与えた人物であるという。彼は、すべての行動は目標に方向づけられているとし、学習は目的に関わる高度に客観的な証拠事実であると述べているという。そして、行動は単なる刺激 (独立変数) と反応 (従属変数) の直接的な結合 (S-R) ではなく、その間に媒介変数としての内的過程が介在するとして、S-O-R と修正したという。

S 4 : 第 4 選択点 → 左折

S 5 : 第 5 選択点 → 左折

S 6 : 第 6 選択点 → 右折

ここで第 1 ～ 第 6 選択点はその位置における刺激を意味する。先行反応は後続反応の刺激の一部として働くと考えられることが多い。例えば、1 回目に曲がったことの痕跡が刺激・反応結合 S 2 において 2 回目に曲がる時の刺激の一部として働くであろう。このようにして被験体は長い反応系列を連結することを学習できる。連鎖中の各反応は次の反応に対する刺激の一部として機能するであろう。

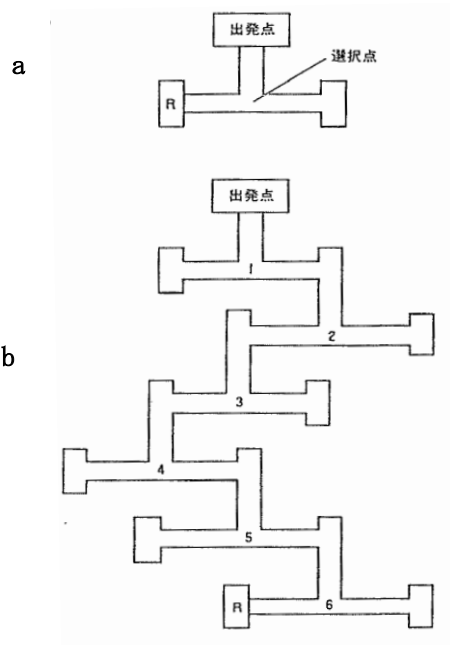


図 14 飢えたねずみが走る迷路 アンダーソン (1982 : 249) より

(a) 単純な T 型迷路 (b) 複雑な T 型迷路 (R) は迷路の終端における報酬を意味する

このような刺激・反応分析が妥当かどうか心理学において長い間議論されてきた。刺激・反応理論への一つの反論は被験体は外的刺激ではなく、むしろ内的な心的刺激に反応しているとの主張である。伝統的に刺激・反応理論は行動の統制刺激は外的に知覚できる条件、または事象であると主張してきた。ねずみが迷路の認知「地図」を学習し、この心的構造を使って行動を導くという効果に関する多数の例証 (Tolman1948 など) や議論がある。

認知心理学概論 (1982 : 249-250) より

ちょうどこの「あげる」「くれる」も同様な認知構造を持っているように思われる。

例えば、私・兄・妹のやり取りの場合（図 17 を参照）、私が「ウチ」の人で、兄・妹が「ソト」の人となるが、友達A・友達Bが入ってくる（図 20 を参照）と、私に対して、「ソト」の人だった兄・妹が「ウチ」の人になり、友達A・友達Bが「ソト」の人となる。

更に、初対面の人Cが入ってくる（図 21 を参照）と、「ソト」の人だった友達A・友達Bも「ウチ」の人になり、初対面の人Cのみが「ソト」の人となる。このように、話し手は特定の人をある時は「ソト」と見なしても、ある時は「ウチ」と見なすこともあり、「ウチ」と「ソト」の関係が変わることによって、「あげる」と「くれる」の選択も変わってくる。

このように、「あげる」と「くれる」の選択は、個々の人称に代表される具体的な一つ一つの外的な存在によって決定されるのではなく、ウチ・ソトの関係という話し手にとっての内的な心的マップ・認知マップによってなされていると考えることができる。つまり、個々の事例を記憶するのではなく、ウチ・ソトという心的マップ・認知マップに基づき個々の事例を導き出すのでなければ、決して習得には至らないであろう。

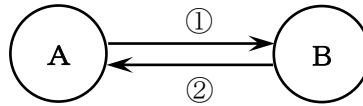
したがって、指導法として個々の事象を示すだけでなく、それを支えるウチ・ソトの関係という心的マップ、或いは認知マップのようなものを学習者の頭の中に形成していかなければならないだろう。

指導法としては、教室内で、具体的な物を用いた具体的な「あげる」「もらう」「くれる」の動作だけではなく、心的マップ・認知マップのようなイメージ図式、即ち線や図形による「図解法」を取り上げ、まず、「あげる」「くれる」の区分の基礎になっている自己と他者との関係を基本図式によって理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」を図式で理解させ、更に、大きな関係へと拡大していくことによって、学習者が自ら心的マップ・認知マップのようなイメージマップに基づいた「あげる」と「くれる」の使い分けの規則が理解できる指導法を考案した。（図 15～図 25 を参照）。

以下の図式では、(私)は「私」、(貴)は「あなた」、(兄)は「兄」、(妹)は「妹」、(A)は「友達Aさん」、(B)は「友達Bさん」、(C)は「初対面のCさん」、「→」は「あげる」、「→」は「くれる」、「物」は「X」、「(ウチ)」は「ウチ」、①～⑳は提出順番を表している。

5. 3. 2 人と人とのやり取り・その図式

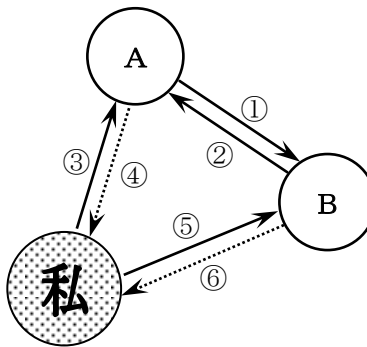
図 15



- ① AさんはBさんにXをあげる
- ② BさんはAさんにXをあげる

\* 図 15 はAさんとBさんがやり取りをする場面である。AさんがBさんにXを与える時 (①) にもBさんがAさんにXを与える時 (②) にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。

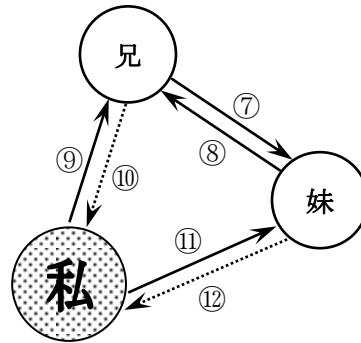
図 16



- ③ 私はAさんにXをあげる ④ Aさんは私にXをくれる
- ⑤ 私はBさんにXをあげる ⑥ Bさんは私にXをくれる

\* 図 16 は私とAさん、私とBさんがやり取りをする場面である。私がAさん、BさんにXを与える時 (③・⑤) には「あげる」、Aさん、Bさんが私にXを与える時 (④・⑥) には「くれる」が用いられ、この場合、AさんもBさんも私にとって「ソト」の人である。

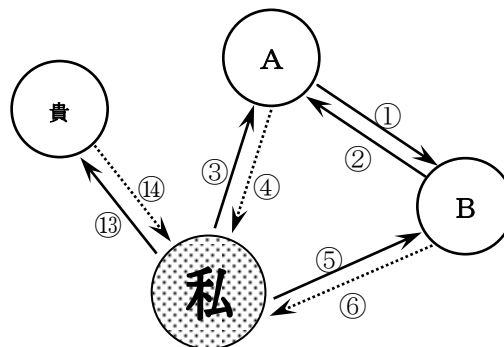
図 17



- ⑦ 兄は妹にXをあげる    ⑧ 妹は兄にXをあげる
- ⑨ 私は兄にXをあげる    ⑩ 兄は私にXをくれる
- ⑪ 私は妹にXをあげる    ⑫ 妹は私にXをくれる

\* 図 17 は兄と妹、私と兄、私と妹がやり取りをする場面である。兄と妹とのやり取りでは、兄が妹にXを与える時 (⑦) にも、妹が兄にXを与える時 (⑧) にも、「あげる」が用いられ、この場合、図 15 と同様、話し手である私の視点がどちら寄りでもなく、中立である。一方、私と兄、私と妹とのやり取りでは、私が兄、妹にXを与える時 (⑨・⑪) には「あげる」、兄、妹が私にXを与える時 (⑩・⑫) には「くれる」が用いられ、この場合、兄、妹は私の家族にも関わらず、図 16 と同様、兄も妹も私にとって「ソト」の人である。

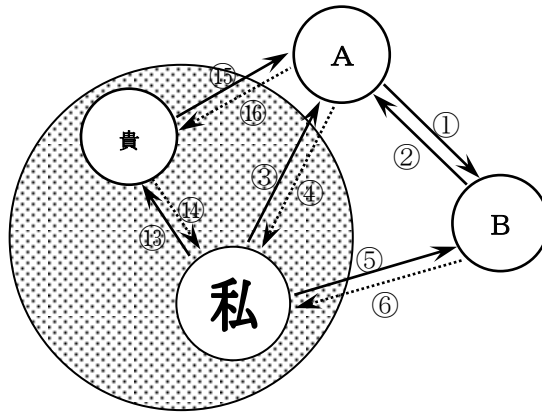
図 18



- ⑬ 私はあなたにXをあげる
- ⑭ あなたは私にXをくれる

\* 図 18 は私とあなたがやり取りをする場面である。私があなたにXを与える時 (⑬) には「あげる」、あなたが私にXを与える時 (⑭) には「くれる」が用いられ、あなたは私にとって「ソト」の人である。

図 19

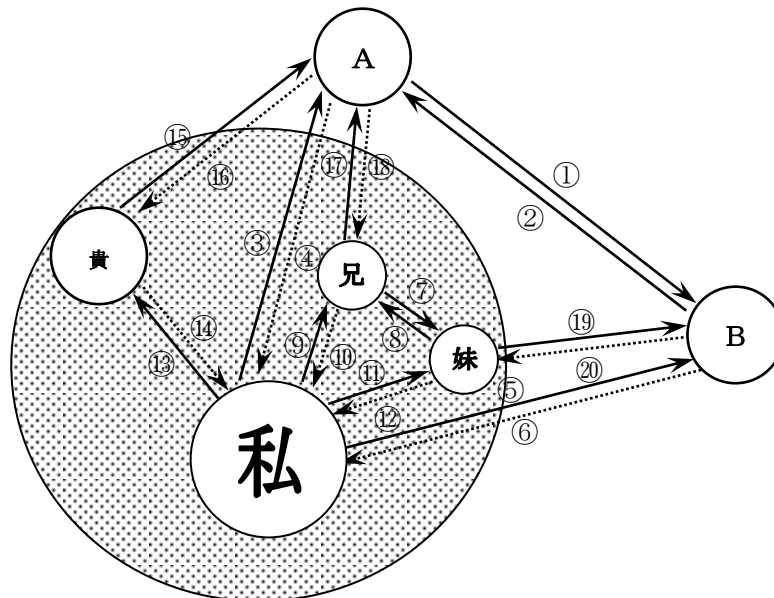


⑮ あなたはAさんにXをあげる

⑯ AさんはあなたにXをくれる

\* 図 19 はあなたとAさんがやり取りをする場面である。あなたがAさんにXを与える時 (⑮) には「あげる」、AさんがあなたにXを与える時 (⑯) には「くれる」が用いられ、日本語では、会話の相手には原則として共感を持っているため (牧野 1996 : 73)、話し手である私にとって、あなたは「ウチ」の人となり、Aさんは「ソト」となる。あなたとBさんのやり取りも同様である。

図 20



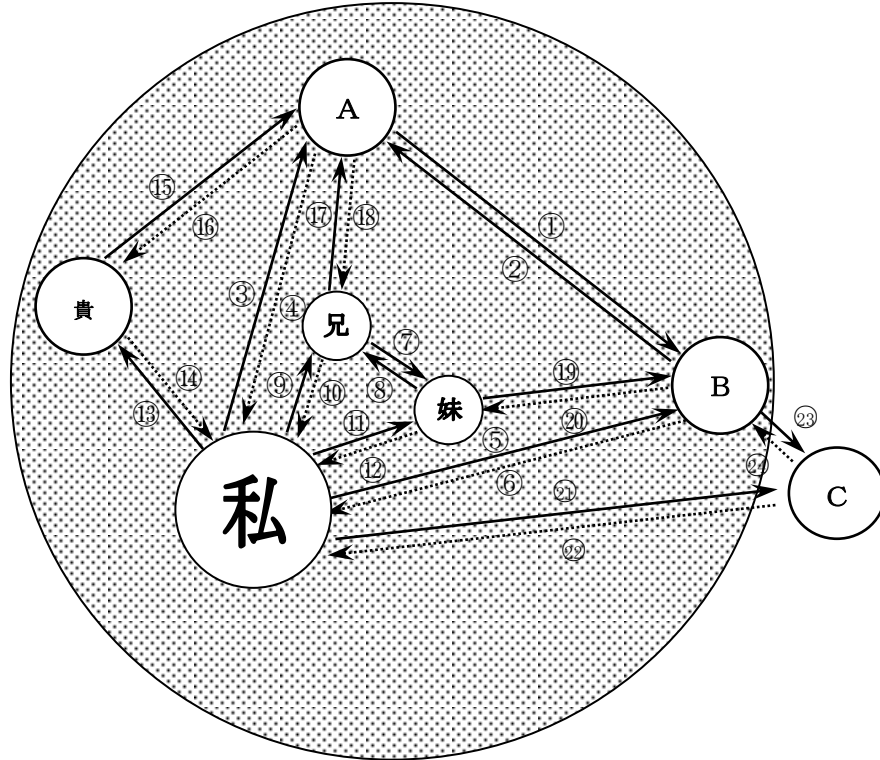
⑰ 兄はAさんにXをあげる ⑱ Aさんは兄にXをくれる

⑲ 妹はBさんにXをあげる ⑳ Bさんは妹にXをくれる



\* 図 20 は兄と A さん、妹と B さんがやり取りをする場面である。兄が A さんに X を与える時 (17) と妹が B さんに X を与える時 (19) には「あげる」、A さんが兄に X を与える時 (18) と B さんが妹に X を与える時 (20) には「くれる」が用いられ、この場合、兄と妹は私の家族、つまり私のグループの人間であるため、話し手である私にとって、兄と妹は「ウチ」の人となり、A さんと B さんは「ソト」の人となる。

図 21

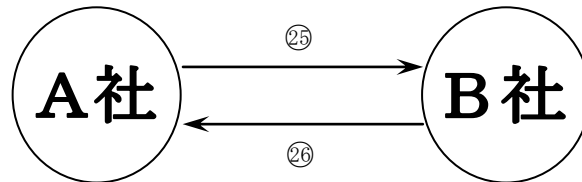


- ①私はCさんにXをあげる      ②Cさんは私にXをくれる  
 ③BさんはCさんにXをあげる    ④CさんはBさんにXをくれる

\* 図 21 は私と C さん、B さんと C さんがやり取りをする場面である。私と C さんのやり取りでは、私が C さんに X を与える時 (21) には「あげる」、C さんが私に X を与える時 (22) には「くれる」が用いられ、この場合、私にとって、C さんは「ソト」の人である。一方、B さんと C さんのやり取りでは、B さんが C さんに X を与える時 (23) には「あげる」、C さんが B さんに X を与える時 (24) には「くれる」が用いられ、この場合、B さんは私の友達で、C さんは初対面の人であるため、話し手である私にとって、B さんは「ウチ」の人となり、C さんは「ソト」の人となる。A さんと C さんのやり取りも同様である。

5. 3. 3 会社と会社とのやり取り・その図式

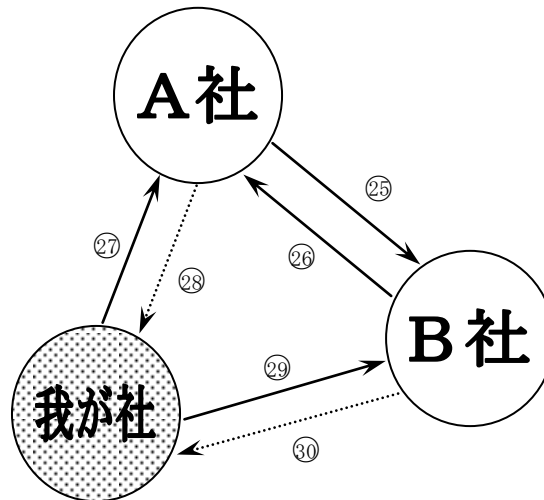
図 22



- ②⑤ A社はB社にXをあげる
- ②⑥ B社はA社にXをあげる

\* 図 22 はA社とB社がやり取りをする場面である。A社がB社にXを与える時（②⑤）にもB社がA社にXを与える時（②⑥）にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、図 15 の人と人とのやり取りと同様、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。


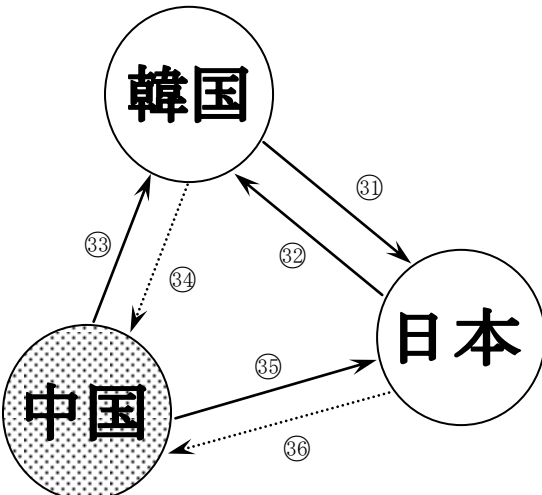
図 23



- ②⑦ 我が社はA社にXをあげる ②⑧ A社は我が社にXをくれる
- ②⑨ 我が社はB社にXをあげる ③⑩ B社は我が社にXをくれる

\* 図 23 は我が社とA社、我が社とB社がやり取りをする場面である。我が社がA社、B社にXを与える時（②⑦・②⑨）には「あげる」、A社、B社が我が社にXを与える時（②⑧・③⑩）には「くれる」が用いられ、この場合、話し手である私は我が社の一員であるため、我が社は「ウチ」の対象となり、A社、B社は「ソト」の対象となる。

5. 3. 4 国と国とのやり取り・その図式

<p>図 24</p>	<div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">             ㉑ 韓国は日本にXをあげる              ㉒ 日本は韓国にXをあげる         </p> <p>* 図 24 は韓国と日本がやり取りをする場面である(学習者は中国人の場合)。韓国が日本にXを与える時(㉑)にも日本が韓国にXを与える時(㉒)にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、図 15 の人と人とのやり取り、図 22 の会社と会社とのやり取りと同様、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。</p>
<p>図 25</p>	<div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">             ㉓ 中国は韓国にXをあげる    ㉔ 韓国は中国にXをくれる              ㉕ 中国は日本にXをあげる    ㉖ 日本は中国にXをくれる         </p> <p>* 図 25 は中国と韓国、中国と日本がやり取りをする場面である。中国が韓国、日本にXを与える時(㉓・㉕)には「あげる」、韓国、日本が中国にXを与える時(㉔・㉖)には「くれる」が用いられ、この場合、話し手である私は中国の一員であるため、中国は「ウチ」の対象となり、韓国、日本は「ソト」の対象となる。</p>

## 5. 4 まとめ

以上、日本語の授受表現における新たな指導法をまとめると、以下のようになる。

- 1) 新たな指導法における提出順序としては、日本語教材及び日本語教師用指導・参考書、論文における授受動詞の提出順序、日本語学習者における授受動詞の習得順序に基づき、「あげる>もらう>くれる」の順に進むことを提案した。
- 2) 新たな指導法における導入法については、まず、「あげる」と「もらう」との基本的な関係、その次に「もらう」と「くれる」との基本的な関係を、従来の指導法と同じように、学習者に実際にやり取りをさせながら理解させ、「あげる」と「もらう」との基本的な使い分け、「もらう」と「くれる」との基本的な使い分けをしっかりと把握させるように作成した。それと同時に、「与える (give)」という動詞が日本語には二つあることを学習者に気付かせ、最後に「あげる」と「くれる」との使い分けを導入することを提案した。
- 3) 従来の指導法では、教室内で学習者に具体的な授受動詞のやり取りをさせるだけであったが、「あげる」と「くれる」の違いは、与え手と受け手という客観的關係の他に話し手というもう一つのファクターが関与しており、話し手との社会的・心的な關係が存在する。そこには、内的な話し手のウチ・ソトに関わる意識という表面に表れてこない社会的な意識という話し手の内的な情報処理に基づくものがあり、単なる外的、即ち表面に表れたものの受け渡しでは表しきれないものがある。そこで、日本人にとってのウチ・ソトが単なる人称に基づくものではなく、広範囲な社会的な集團意識、或いは個々の心理的な親疎關係などに基づく話し手の認知によるものであるということを学習者に認識させる必要があり、認知心理学的観点からいえば、与え手・受け手という個々の刺激反応の關係ではなく、話し手の意識のうちに、ウチ・ソトという心的マップ、或いは認知マップを形成し、それに基づいて、個々の判断を行っていくという指導法を行う必要がある。

そこで、新たな指導法における「あげる」と「くれる」の使い分けの指導については、認知心理学観点から分析し、そしてその分析に基づき、線や図形で示す「図

解法」を用いて、やり取りを「人と人とのやり取り」「会社と会社とのやり取り」「国と国とのやり取り」など、3種類に分けて、話し手との関係から指導していくことを提案した。

## 第6章 調査・考察

### 6. 1 調査目的

今回、新たな指導法を開発したが、従来の指導法との違いについて学習者の立場から明らかにするために、調査を行った。

本調査では、まず、新たに開発した指導法を用いて日本語学習者を対象に、授受本動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、主に「あげる」と「くれる」との使い分けを中心とした授業を行った。

次に、この授業を通して、彼らは授受動詞の使い分けを授業前には、どのように認識していたのか、一方、授業後にはどのように認識するようになったのか、また、この指導法は従来の指導法とどのような違いがあったのかについて調査・分析し、最後に、その結果を踏まえ、不足している部分や問題点を探り、この指導法の改善をはかることにした。

### 6. 2 調査協力者

本調査では、拓殖大学留学生別科<sup>36</sup>の留学生（2008年度）11名に協力してもらった。そのうち、中国人の留学生が9名、韓国の留学生が1名、ベトナムの留学生<sup>37</sup>が1名で、いずれも日本語学習歴が1年ほどの、初級日本語学習者である。

調査協力者の使用している教科書は、第4章の1.1節（68頁）でも紹介したように、拓殖大学留学生別科・日本語研修センターが編集した『初級 ひらけ日本語 新装版 上・下』である。

この教科書は、25課に配列し、そのうち前半12課を上巻に、後半13課を下巻に配している。因みに、授受動詞「あげる」「くれる」「もらう」は第9課に出ている。

### 6. 3 調査実施の方法

---

<sup>36</sup> 拓殖大学留学生別科は、拓殖大学直属の日本語教育機関で日本の大学・大学院などへの進学を目的とする外国籍の人が「留学1年」ビザを取得して、日本語及びその他の科目を1年間で習得する教育課程である。

<sup>37</sup> 筆者は、中国語、韓国語には詳しいが、ベトナム語は分からないため、ベトナムからの留学生は調査対象外とした。

まず、新たに開発した指導法を用いて、調査協力者に「あげる」「くれる」「もらう」を復習の形（彼らは既に勉強していたため）で実際に授業を行った。但し、新たに開発した指導法は、「人と人とのやり取り」「会社と会社とのやり取り」「国と国とのやり取り」など3種類に分けて展開していったわけであるが、本調査では、時間の関係（1コマ45分の授業）で「人と人とのやり取り」のみを導入した。

次に、調査協力者に今回行った授業について母国語で感想を書いてもらった<sup>38</sup>。但し、彼らは初級日本語レベルの学習者で、まだ自分の言いたいことを日本語では十分に表現できないため、日本語の他に、中国語や韓国語など、母国語で書いてもらい、一方、日本語に自信のある学習者には日本語で書いてもらうことにした。

最後に、調査協力者に書いてもらった感想をデータとして分析した。

## 6. 4 調査結果の考察と分析

本調査では、調査協力者に書いてもらった感想を、1) 授受動詞の使い分けは難しいかどうか、2) 授業を受けた後、授受動詞の使い分けが分かるようになったかどうか、3) この指導法は従来の指導法とはどのような違いがあるのか、それぞれ三つの内容にまとめて、考察・分析した。

1) まず、授受動詞の使い分けは難しいかどうかについて質問した。

第2章で紹介したように、日本語「あげる、くれる、もらう」に対応する中国語としては、一般的に「给(gei)」「得到(dedao)」などが考えられ、与え動詞「あげる」「くれる」には、同一の「给(gei)」、受け動詞「もらう」には、「得到(dedao)」が対応している。

一方、第3章で紹介したように、日本語の文法と非常によく似ている朝鮮語も、授受動詞については、「주다 (cwuta)」「받다 (patta)」の2項体系しか持たず、与え動詞「あげる」「くれる」には、同一の「주다 (cwuta)」、受け動詞「もらう」には、「받다 (patta)」が対応しており、中国語も朝鮮語も与え動詞には「あげる」と「くれる」、受け動詞には「もらう」がある3項体系を持っている日本語の授受動詞と比べてきわめて単純である。

ここで、改めて日本語、中国語、朝鮮語の授受動詞をそれぞれ取り上げて、表12にして

---

<sup>38</sup> 137～141 頁の調査資料2を参照

比較してみた。

表 12

言語	与え動詞		受け動詞
日本語	あげる	くれる	もらう
中国語	给(gei)		得到(dedao)
朝鮮語	주다 (cwuta)		받다 (patta)

その結果、授受動詞の使い分けが難しいかどうかについて、「…… 特に『あげる』と『くれる』は中国語では同じ意味になってしまうので、中国人にとっては大変難しいです。……」「…… 前から『あげる』と『くれる』は中国語では「給」になるということしか分からず、具体的な用法などについてははっきり分かっていませんでした。……」など、調査対象者 10 名の中、全員（中国人 9 名・韓国人 1 名）が難しいと述べている。

2) 次に、授業の後で、授受動詞の使い分けが分かるようになったかどうかを質問した。

第 5 章の日本語の授受表現の新たな指導法で紹介したように、この指導法では、まず「あげる」と「もらう」を、その次に「もらう」と「くれる」を導入し、「実際のやり取り」や「基本的な図式」などを通して、学習者に「あげる」と「もらう」との基本的な関係、「もらう」と「くれる」との基本的な関係、つまり「あげる」と「もらう」との基本的な使い分け、「もらう」と「くれる」との基本的な使い分けをしっかりと把握させた。そして、「与える (give)」という動詞が日本語には二つあることを学習者に気付かせ、「あげる」と「くれる」との使い分けを導入するという方法を考案したが、この導入方法が学習者にとってより分かりやすかったのではないかと思う。

更に、この指導法では、「やり取り」を進めていく中で、「人物」や「場面」によって変わる「ウチ」と「ソト」の関係、つまり、最小単位の「私」から家族、そして友達まで徐々に広がっていく「ウチ」の輪を線や図形で示しながら説明したが、この線や図形による「図解法」も学習者にとってより理解しやすかったのではないかと思う。

その結果、「…… 今回の授業で『あげる』と『くれる』を詳しく説明してもらい、今



は分かるようになりました。……」「……今日の学習を通して、短時間で分かるようになり、日本語学習に自信が付きました。……」など、調査対象者 10 名の中、9 名(中国人 8 名・韓国人 1 名)が、授業を受けた後、授受動詞の使い分けが分かるようになったと述べ、その中には、特に、「あげる」と「くれる」の使い分けについて、改めて分かるようになったと述べている学生もいた。

3) 最後に、この指導法が従来の指導法と、どのような違いがあったかについて質問した。

授受動詞の指導法について、いままで様々な方法が研究されてきたが、第 4 章の従来の指導法で紹介したように、実際、日本語教育の現場では、「人称制限」や「実際のやり取り」による指導法がよく使われており、そして、この二つの方法はそれぞれ単独ではなく、同時に行われているのが多いと思われる。

まず、「人称制限」による指導についてであるが、第 4 章の 2.1 節(76 頁)でも紹介したように、物の移動が「1 人称→2 人称→3 人称」或いは「3 人称→3 人称」の場合には「あげる」、「1 人称←2 人称←3 人称」或いは「3 人称←3 人称」の場合には「もらう」、「3 人称→2 人称→1 人称」の場合には「くれる」が用いられる。しかし、物の移動が「3 人称(与え手)→3 人称(受け手)」の場合、「人称制限」による文型に基づくと「あげる」しか使えないが、これは話し手の視点が与え手寄りか、中立の時にのみ用いられるものであって、話し手の視点が与え手よりも受け手寄りの時には「あげる」は使えず、その代わりに「くれる」が使われる。

このように、「あげる」と「くれる」の選択は、「人称制限」の方向、つまり「人称」という概念では不十分であり、話し手を中心に遠心的方向の授与には「あげる」、求心的方向の授与には「くれる」が用いられ、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定される。そのため、この指導法では「ウチ・ソト」の観点から「あげる」と「くれる」の使い分けを分析した。

次に、「実際のやり取り」による指導についてであるが、第 4 章の 2.2 節(78 頁)で紹介したように、クラス内における学習者同士、つまり学習者と学習者とのやり取りだけでは、「人物」と「場面」の設定が限られてしまうため、簡単なやり取り(例えば、「AさんはBさんにあげる」「BさんはAさんにももらう」「Aさんは私にくれる」など)はできるが、複雑なやり取り(例えば、「AさんはBさん(話し手のウチ側)にくれる」など)はできるとは限らない。そのため、この指導法では、簡単なやり取りから複雑なやり取りまで、或い

は具体的なやり取りから抽象的なやり取りまで示すことができるような「図解法」を取り入れ、線や図形で示しながら説明した。

その結果、調査対象者 10 名の中、7 名（中国人 6 名・韓国人 1 名）の学習者が、「……図と授受動詞を結びつけて説明したのは、はっきりし、理解しやすかったです。……できるだけ多くの場面を設けて例を挙げたのも大変理解しやすかったです。……」「……図式による説明はとても具体的で以前より更に分かるようになりました。以前、『あげる』『くれる』『もらう』を学習する時には、ほとんど例文に頼る理解でしたが、今回受けた授業はとても斬新で、本当に視野を広めさせてもらいました。今回の授業は雰囲気も大変よかったです。楽しく勉強ができ、教えてもらった内容ももっと印象に残るようになりました。……」のように、線や図形による「図解法」はとても斬新な方法で、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の使い分けははっきりして、分かりやすかったと述べた。また、「登場人物」や「場面」などもいろいろ設定され、繰り返して練習できたことについても評価された。

## 6. 5 まとめ

以上、新たに開発した授受動詞の指導法における調査・分析をまとめると次のようになる。

- 1) まず、授受動詞の使い分けが難しいかどうかについて調査したが、その結果、調査対象者 10 名の中、全員が難しいと述べた。次に、授業の後、授受動詞の使い分けが分かるようになったかどうかについて調査したが、その結果、調査対象者 10 名の中、9 名が、授業を受けた後、授受動詞の使い分けが分かるようになり、特に、「あげる」と「くれる」の使い分けについて、改めて分かるようになったと述べた。最後に、この指導法は従来の指導法とどのような違いがあったかについて調査したが、その結果、調査対象者 10 名の中、7 名（中国人 6 名・韓国人 1 名）の学習者が、線や図形による「図解法」は、とても斬新な方法で、授受動詞「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の使い分けははっきりして、分かりやすかったと述べた。また、「登場人物」や「場面」などもいろいろ設定され、繰り返して練習できたことについても評価された。
- 2) 一方、本調査の結果、不足している部分や問題点にも気付かされたが、今後、以下のことも考慮しながら、更なる調査や分析が必要であることを感じた。

一つは、本調査では、初級日本語学習者を対象に調査を行ったが、日本語の授受動詞は、初級日本語学習者のもとより、中・上級日本語学習者にとっても難しいため、初級日本語学習者のみならず、中・上級日本語学習者を対象にした調査も行わなければならないと思う。更に、初級・中級・上級レベルごとに、日本語の授受動詞における難易度や理解度を比較しながら考察・分析した方がよりよかったのではないかと思う。

もう一つは、本調査では、日本語の授受動詞を既に習った日本語学習者を対象にして調査を行ったが、それより、日本語の授受動詞をまだ習っていない日本語学習者を対象にして調査を行った方がよりよかったのではないかと思う。なぜなら、日本語の授受動詞を既に習った日本語学習者を対象にした場合には、前の授業で日本語の授受

動詞を正しく身につけたかどうかはともかく、前の授業で身につけた知識がどうしても今回の授業に影響を及ぼしてしまうからである。この点も今後の課題にしたい。

## 終章 おわりに

### 7. 1 まとめ

第1章においては、主に日本語学における授受動詞の先行研究を分析し、日本語の授受動詞の基本的な意味・用法、及び、その言語の特徴を整理することによって、日本語の授受動詞の指導法を提案するための基礎を作った。その結果、日本語の授受動詞には、話し手が談話の流れの中で誰に視点をおくかという「話し手の視点」はもちろん、話し手との心理的な距離を表す「ウチとソトの概念」、目上とか同等とか目下とかいう「ウエとシタの概念」、与え手の行為が受け手にとって、恩恵・利益を表しているか否かという「恩恵・非恩恵の概念」の要素が深く関わっていることが明らかになった。

第2章においては、日本語の授受動詞と中国語の授受動詞の共通点、相違点を明らかにするため、日本語の授受本動詞「あげる（やる）」「くれる」「もらう」「さしあげる」「くださる」「いただく」とそれに対応する中国語の授受表現、及び日本語の授受補助動詞「～てあげる（やる）」「～てくれる」「～てもらう」「～てさしあげる」「～てくださる」「～ていただく」とそれに対応する中国語の授受表現を、それぞれ「話し手の視点」に加え、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」という観点から分析した。その結果、中国語の授受動詞は、3項体系である日本語の授受動詞と異なり、2項体系を持っており、「ウチ・ソト」「ウエ・シタ」「恩恵・非恩恵」による方向性はなく、与え手と受け手との間に、物及び行為の授受関係が生ずることを表すにすぎず、事実を中立的・客観的に表現するのが一般的であることが明らかになった。

第3章においては、更に、中国語以外の言語、朝鮮語・韓国語、インドネシア語・マレー語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語の授受動詞とを比較し、日本語と外国語の相違点を分析した。その結果、3項体系を持つ言語は日本語以外には見当たらず、最も一般的であると考えられるのは、「あげる」「くれる」に相当する語が同一で、「もらう」に相当する語と対立する言語であることが分かった。この2項対立の言語においては、与え手と受け手という客観的な関係だけで決まってくる。しかし、日本語の授受動詞の場合には、与え手と受け手の他に、話し手が主要な要素として加

わっており、「ウチ・ソト」は欠かせない要素である。つまり、「あげる」と「くれる」の用法には、話し手から見た「ウチ・ソト」の区別が大きく関与しているのに対し、外国語の授受動詞の場合には「ウチ・ソト」の区別がないことが大きな相違点である。また、日本国内で使われている方言を調べたところ、同じ与え動詞である「やる」と「くれる」の対立は、日本国内のどこにでも存在するわけではなく、「やる」と「くれる」の区別がない方言も少なからず存在していることが明らかになった。

第4章においては、日本語教育の現場において授受動詞は、どのように扱われているのか、まず、いくつかの日本語教材及び、日本語教師用指導・参考書、論文などを取り上げ、「授受動詞の提出順序」「従来の授受動詞の指導」という二つの点から分析するとともに、日本語学習者による授受動詞の習得研究を「口頭データ」「作文データ」「空欄補充形式テスト」「絵を使用した文産出テスト」という4種類のデータ収集方法別に概観し、最後に、これまでの授受動詞の指導法の妥当性を検証した。その結果、授受動詞の提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順が一般的であり、授受動詞の指導には、「あげる」「もらう」「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の選択は、客観的な「人称」という概念では不十分であり、話し手から捉えた「ウチ・ソト」という概念によって規定されるため、「ウチ・ソト」による指導が必要であることが分かった。更に、習得順序としては、話し手の視点と文の主語が一致する「あげる」「もらう」の方が主語が与え手で、話し手の視点が受け手である「くれる」より習得されやすく、授受動詞の習得に影響を及ぼす要因としては、「視点の置き方」が最も大きいことも明らかになった。

第5章においては、「あげる」と「くれる」の選択は、人称に代表される具体的な一つ一つの外的な存在によって決定されるのではなく、ウチ・ソトの関係という話し手にとっての内的な心的マップ・認知マップによってなされていることが分かった。つまり、個々の事例を記憶するのではなく、ウチ・ソトという話し手の心的マップ・認知マップに基づき個々の事例を導き出すのでなければ、決して習得には至らないことも判明した。

したがって、指導法として個々の事象を示すだけではなく、話し手から見たウチ・ソトの関係という心的マップ、或いは認知マップのようなものを学習者の頭の中に形成していかなければならないため、新たな指導法としては、教室内で、具体的な物を用いた具体的な「あげる」「もらう」「くれる」の動作だけではなく、心的マップ・認知マップのような

イメージ図式、即ち線や図形による「図解法」を取り上げ、まず、「あげる」「くれる」の区別の基礎になっている自己と他者との関係を基本図式によって理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」を図式で理解させ、更に、大きな関係へと拡大していくことによって、学習者が自ら心的マップ・認知マップのようなイメージマップによる「あげる」と「くれる」の使い分けの規則が理解できるような指導法を考案した。

第6章においては、第5章で新たに開発した指導法を用いて、初級日本語学習者を対象に復習の形（彼らは既に勉強していたため）で実際に授業を行い、授業前にはどのように認識していたのか、授業後にはどのように認識するようになったのかについて、感想を書いてもらう方法で調査・分析した。その結果、この指導法は斬新な方法で、使い分けがはっきりして、分かりやすかったと評価していることが分かった。

## 7. 2 今後の課題

日本語の授受動詞における指導法を新たに開発していく中で、今後の課題として、以下のような点にも気付かされた。

- 1) 第3章において、外国語の授受動詞について調べたところ、「受け動詞」の場合、英語、ベトナム語、スペイン語は、主語寄りの視点が好まれるため、使用制限を受けていることが分かったが、英語、ベトナム語、スペイン語はもちろん、本論文で扱われているすべての外国語の受け動詞の使用制限については、まだ多くの疑問点があり、今後の課題として、更なる調査が必要ではないかと思う。
- 2) 第6章において、新たに開発した指導法を用いて、初級日本語学習者を対象に復習の形（彼らは既に勉強していたため）で実際に授業を行い、調査を行ったが、本調査では、既習の初級日本語学習者のみならず、中・上級日本語学習者を対象にした調査や日本語の授受動詞を未習の日本語学習者を対象にした調査など、更なる調査や分析が必要ではないかという不足している部分や問題点にも気付かされ、これらを今後の課題としたい。
- 3) 日本語の授受動詞には、物の授受を表す本動詞「あげる・くれる・もらう」のみならず、恩恵の授受を表す補助動詞「～てあげる・～てくれる・～てもらう」も、敬意の授受を表す敬語動詞「さしあげる、くださる、いただく」も存在する。恩恵の授受を表している補助動詞「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」は、恩恵の与え手と受け手のどちらが主語に来るか、どちらに話し手の視点が向けられているかによって、それぞれ使い分けられ、敬意の授受を表している「さしあげる」「くださる」「いただく」は、相手が目上なのか、目下なのかによって、それぞれ使い分けられており、これらも日本語学習者にとって難しい学習項目になっているため、今後の研究の課題として、補助動詞「～てあげる・～てくれる・～てもらう」と敬語動詞「さしあげる、くださる、いただく」の指導法について検討していきたい。



## 参考文献

- Ahmed Hanem(2006)「アラビア語を母語とする日本語学習者における『授受動詞』の習得に関する研究」『日本語・日本文化研究』VOL. 16. 53-62 大阪外国語大学日本語講座
- Akkus Derya(2008)「日本語とトルコ語における『物・行為の授受を表す表現』の比較」『ことばの科学』21. 61-80 名古屋大学言語文化研究会
- Alcala Armina Manzano(2007)「授受表現について—日本語とフィリピン語の対照研究—」『間谷論集』1. 115-129 日本語日本文化教育研究会編集委員会
- J. R. アンダーソン(1982)『認知心理学概論』誠信書房
- Kuno, S. & Kaburaki, E. (1975) Empathy and syntax. In S. Kuno(Ed.), Harvard Studies in Syntax and Semantics, vol. 1, 1-73, Department of Linguistics, Harvard University.
- M. W. アイゼンク(1998)『認知心理学事典』新曜社
- Priyadarshani R. M. Sandhy・浮田三郎(2008)「日本語とシンハラ語の授受表現の対象研究—「アゲル」「クレル」「モラウ」を中心に—」『ニダバ』37. 163-172
- Tolman, E. C. 1932 The purposive behavior in animals and men. New York: The Century Co.
- Tolman, E. C. (1948) Cognitive maps in rats and men, Psychological Review 55, 189-208
- Yamada. Toshihiro(1996) Some universal features of benefactive constructions. 『大阪大学日本学報』15. 27-45
- 荒巻朋子(2003)「授受文形成能力と場面判断能力の関係—質問紙調査による授受表現の誤用分析から—」『日本語教育』117. 43-52
- 有馬俊子(1993)『日本語の教え方の秘訣上・下』スリーエーネットワーク
- 飯沼英三(1995)『トルコ語基礎』ベスト社
- 庵功雄(2011)「日本語教育から見たやりもらい表現」『日本語学(特集 やりもらいの日本語学)』VOL. 30. 11. 50-58 明治書院
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社

- (2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク
- 井出里咲子・任栄哲(2001)「人と人とを繋ぐもの—なぜ日本語に授受動詞が多いのか—」『言語 (特集「授受」の言語学)』VOL. 30. 5. 42-45 大修館書店
- 井ノ口悦子(1996)「日本語学習者の授受動詞習得について」未発表論文 南山大学
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 南雲堂
- (1977)「コンテクストと文法 (5) (6)」『英語青年』123-3. 123-4
- 大上正直(2003)『フィリピン語文法入門 (CD付・新装版)』 写研
- 大久保愛(1967)『幼児言語の発達』 東京堂出版
- 大塚純子(1995)「中上級日本語学習者の『視点表現』の発達について—立場志向文を中心に—」『言語文化と日本語教育 水谷信子先生退官記念号』第9号 281-292 凡人社
- 大野徹(1983)『現代ビルマ語入門』 泰流社
- 岡田久美(1997)「授受動詞の使用状況の分析—『視点表現』における問題点の考察—」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』81-86
- 奥津敬一郎(1983)「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較—」『日本語学』VOL. 2. 4. 22-30 明治書院
- (1984a)「授受動詞文の構造—日本語・中国語対照研究の試み—」『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻言語学編』65-88 三省堂
- (1984b)「授受動詞文の意味と文法」『日語学習と研究』1984a 年第一期 (総第二十二号) 8-15
- ・徐昌華(1982)「『てもらう』とそれに対応する中国語表現—“請”を中心に—」『日本語教育』第46号 92-104
- 片田(2005)『新訂・世界言語文化図鑑』 東洋書林
- 蒲谷宏(2001)「日本語教育で授受動詞をどう教えるか」『言語 (特集「授受」の言語学)』VOL. 30. 5. 52-53 大修館書店
- 川村よし子(1991)「日本人の言語行動の特性」『日本語学』VOL. 10. 5. 51-60 明治書院
- 久野暲(1978)『談話の文法』 大修館書店
- 国際交流基金 (2011)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2009年』
- 坂本正(2000)「日本語の授受動詞の習得—母国語と第二言語を比較して—」『日本文化学報』9号 107-118 韓国日本文化学会
- ・岡田久美(1996)「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア文学・語学編—』

61 南山大学 157-202

- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 柴田武(1993)『世界のことば小事典』大修館書店
- 朱徳熙(1982)『語法講義』北京商務印書館
- 徐美華(2003)「日中対照配慮表現—授受動詞の用法を中心に—」『日本語日本文学』13  
61-74 創価大学日本語日本文学会
- 白川博之(2005)「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」『コミュニケーションのた  
めの日本語教育文法』くろしお出版
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 宋敏(1999)『韓国語と日本語のあいだ』草風館
- 田中寛(1997)「授受表現における日タイ語対照研究—『現象的理解』から『場面的理解』  
へ—」『講座日本語教育』VOL. 32. 72-97 早稲田大学日本語研究教育センター
- 田中真理(1996)「視点・ヴォイスの習得—文生成テストにおける横断的及び縦断的研究—」  
『日本語教育』88. 104-116
- 田原洋樹(2011)『くわしく知りたいベトナム語文法 (CD付)』白水社
- 張仲霏(2010)「現代中国語における“給”構文研究ノート」『人文研究』171 141-162 神  
奈川大学人文学会
- 陳月吾・周莉莉(2009)「授受関係の方向性に関する日中両国語の比較—日本語の授受補助  
動詞を中心に—」『福井工業大学研究紀要』39 467-474 福井工業大学
- 寺田和子・三上京子・山形美保子・和栗雅子(1998)『日本語の教え方ABC』アルク
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- ・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人(1987)『ケーススタディに本文法』桜楓社
- 党淑蘭(1991)「中日の授受表現比較」『佐賀大國文』19 34-38 佐賀大学教育学部
- 豊田豊子(1974)「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」『日本語学校論集』1. 77-96  
東京外国語大学
- 沼田善子(1999)「授受動詞文と対人認知 (特集 外界認知と言語)」『日本語学』VOL. 18. 9.  
46-54 明治書院
- 野間秀樹(2000)『至福の朝鮮語』朝日出版社
- 橋本良明(2001)「授受表現の語用論」『言語 (特集「授受」の言語学)』VOL. 30. 5. 46-51  
大修館書店

- 長谷川哲子 (2007) 「授受表現における日本語とスペイン語の対応」『大阪産業大学論集 人文科学編 121』 55-78 大阪産業大学
- 降幡正志(1998) 『キーワードで覚える！やさしいインドネシア会話』 ユニコム
- 日高水穂(2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』 ひつじ書房
- (2011) 「やりもらい表現の発達段階と地理的分布」『日本語学 (特集 やりもらいの日本語学)』 VOL. 30. 11. 16-27 明治書院
- 姫野伴子(2006) 「日本語学習者のための授受動詞の体系的記述—類似・対立する形式との関連を中心に—」 『留学生教育』 第 8 号 33-52 埼玉大学留学生センター
- 馮富栄(1995) 「中国人の日本語授受文の学習過程における母語 (中国語) の影響について」 『名古屋大学教育学部紀要』 42 135-147 教育心理学科
- 廣瀬幸生(2001) 「授受動詞と人称」『言語 (特集「授受」の言語学)』 VOL. 30. 5. 64-70 大修館書店
- 藤田直也(2000) 『日本語文法 学習者によくわかる教え方』 アルク
- 藤原与一(1976) 『幼児の言語表現能力の発達』 文化評論出版
- 堀口純子(1979) 「年少児の受給表現」『ことばの発達』 F. C. パン. 堀素子 (編) 51 - 76 文化評論出版
- (1983) 「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』 52 号 91-103 日本語教育学会
- 牧野成一(1978) 『ことばと空間』 東海大学出版会
- (1996) 『ウチとソトの言語文化学-文法を文化で切る』 アルク
- 益岡隆志(2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語 (特集「授受」の言語学)』 VOL. 30. 5. 26-32 大修館書店
- ・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法』 くろしお出版
- 松下大三郎(1978) 『改撰標準日本文法』 勉誠社
- 水野かほる(1994) 「日本語授受表現に対する中国語話者の認識」『名古屋大学人文科学研究』 23 105-122 名古屋大学大学院文学研究科
- 宮地裕(1965) 「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』 63. 21-33 国語学会
- 門和沙日娜(2006) 「日中対照研究 授受表現」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 1 53-63 昭和女子大学

- 森越一世(1994)「授受動詞の指導方法—「くれる」を第一に導入する試み—」『北海道大学留学生センター年報』2. 153-165
- 森田良行(1977)『基礎日本語1』 角川書店
- (1989)『基礎日本語辞典』 角川書店
- (1995)『日本語の視点』 創拓社
- (1998)『日本人の発想、日本語の表現—「私」の立場がことばを決める(中公新書)』 中央公論社
- 森本順子(1996)『日本語の謎を探る』 ちくま新書
- 山田敏弘(2000)「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第1回ベネファクティブの視点の位置と方向性」『日本語学』VOL. 19. 11. 94-103 明治書院
- (2002)「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第14回ベネファクティブの類型論的考察」『日本語学』VOL. 21. 1. 80-89 明治書院
- (2004)『日本語のベネファクティブ』 明治書院
- (2011)「類型論的に見た日本語の『やりもらい』表現」『日本語学(特集 やりもらいの日本語学)』VOL. 30. 11. 4-14 明治書院
- 尹喜貞(2004a)「授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得—日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として—」『言語文化と日本語教育』28. 44-50
- (2004b)「第二言語としての日本語の授受動詞習得研究概観—習得順序の結果と研究方法との対応に焦点をあてて—」『言語文化と日本語教育』2004. 11 増刊特集 169-180
- 由井紀久子(1990)「受給動詞の運用—オマエニクレテヤル・(サ) セテモラウについて—」『日本文学』9 大阪大学文学部日文学
- (1996)「動詞ヤル・クレルにおける意味の抽象化過程」『日本語教育』88 25-34
- 呂叔湘他(1980)『現代漢語8百詞』 北京商務印書館
- 渡辺裕司(1992)「授受表現における授受の方向性Ⅱ—補助授与動詞の文において恩恵(好意)の方向を示す名詞句—」『留学生日本語教育センター論集』19 29-42 東京外国語大学

## 日本語教材

- 『初級日本語』(2001) 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 凡人社
- 『中日交流標準日本語初級上・下』(2005) 日本光村出版・人民教育出版社編 日本光村出

版・人民教育出版社

『日本語初歩』(2002) 国際交流基金日本語国際センター編 凡人社

『ひらけ日本語初級上・下』(2001) 拓殖大学留学生別科・日本語研修センター編 凡人社

『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』(1998) スリーエーネットワーク編 スリーエーネットワーク

## 辞典

『現代日本語方言大辞典』(1992) 平山輝男編 明治書院

『ジーニアス英和大辞典』(2001) 小西友七・南出康世 大修館書店

『詳解ベトナム語辞典』(2011) 川本邦衛 大修館書店

『新スペイン語辞典』(1992) カルロス・ルビオ・上田博人 研究社

『新トルコ語辞典』(1995) 飯沼英三 ベスト社

『中国語大辞典』(1994) 大東文化大学中国語大辞典編纂室 角川書店

『中日辞典』(2003) 北京商務印書館・小学館共同編集 小学館

『朝鮮語大辞典(上・下)』(1986) 大阪外国語大学大学朝鮮語研究室 角川書店

『日中辞典』(2003) 北京对外経済貿易大学・北京商務印書館・小学館共同編集 小学館

『標準インドネシア・日本語辞典』(1982) 谷口五郎 日本インドネシア協会

『フィリピン語辞典』(1991) 永田英男 泰流社

『ミャンマー語小辞典』(1993) 戸部実之 泰流社

## 調査資料1

### 1. インドネシア語 (Bahasa Indonesia)

「あげる」→ 母語 : Memberi

「くれる」→ 母語 : Memberi

「もらう」→ 母語 : Menerima

① (A) → (B)

日本語 : I : AさんはBさんにプレゼントをあげる。

II : BさんはAさんにプレゼントをもらう。

母語 : I : A memberi hadiah kepada B.

II : B menerima hadiah dari A.

② (A) → (私)

日本語 : I : Aさんは私にプレゼントをくれる。

II : 私はAさんにプレゼントをもらう。

母語 : I : A memberi hadiah kepada saya.

II : Saya menerima hadiah dari A.

③ (私) → (先生)

日本語 : 私は先生にプレゼントをさしあげる。

母語 : Saya memberi (mempersembahkan\*) hadiah kepada guru.

④ 先生 → 私

日本語：Ⅰ：先生は私にプレゼントをくださる。

Ⅱ：私は先生にプレゼントをいただく。

母語：Ⅰ：Guru memberi hadiah kepada saya.

Ⅱ：Saya menerima hadiah dari guru.

⑤ 私 → 花

日本語：私は花に水をやる。

母語：Saya menyiram bunga.

## 2. ミャンマー語

「あげる」→ 母語：pay

「くれる」→ 母語：pay

「もらう」→ 母語：ya

① A → B

日本語：Ⅰ：AさんはBさんにプレゼントをあげる。

Ⅱ：BさんはAさんにプレゼントをもらう。

母語：Ⅰ：A ga B go latsaung pay thi

Ⅱ：B ga A htan mha latsaung ya thi

② A → 私

日本語：Ⅰ：Aさんは私にプレゼントをくれる。



Ⅱ：私はAさんにプレゼントをもらう。

母語：Ⅰ：A ga kyama go latsaung pay thi

Ⅱ：kyama ga A hatn mha latsaung ya thi

③ (私) → (先生)

日本語：私は先生にプレゼントをさしあげる。

母語：kyama ga saya go latsaung pay thi

④ (先生) → (私)

日本語：Ⅰ：先生は私にプレゼントをくださる。

Ⅱ：私は先生にプレゼントをいただく。

母語：Ⅰ：saya ga kyama go latsaung pay bar thi

Ⅱ：kyama ka saya htan mha latsaung ya bar thi

⑤ (私) → (花)

日本語：私は花に水をやる。

母語：kyama ga panpin go yay laung thi

### 3. ベトナム語

「あげる」→ 母語：cho

「くれる」→ 母語：cho

「もらう」→ 母語：nhận

① (A) → (B)

日本語： I : A さんは B さんにプレゼントをあげる。

II : B さんは A さんにプレゼントをもらう。

母 語： I : A cho B món quà

II : B nhận món quà từ A

② (A) → (私)

日本語： I : A さんは私にプレゼントをくれる。

II : 私は A さんにプレゼントをもらう。

母 語： I : A cho tôi món quà

II : Tôi nhận món quà từ A

③ (私) → (先生)

日本語： 私は先生にプレゼントをさしあげる。

母 語： Tôi tặng thầy giáo món quà.

④ (先生) → (私)

日本語： I : 先生は私にプレゼントをくださる。

II : 私は先生にプレゼントをいただく。

母 語： I : Thầy giáo cho tôi món quà.

II : Tôi nhận món quà từ thầy giáo.

⑤ 私 → 花

日本語：私は花に水をやる。

母語：Tôi tưới nước cho hoa.

#### 4. アラビア語

「あげる」→ 母語：يعطى

「くれる」→ 母語：يعطى

「もらう」→ 母語：يستلم

① A → B

日本語：I：AさんはBさんにプレゼントをあげる。

II：BさんはAさんにプレゼントをもらう。

母語：I：هدية للسيد اعطى السيد

II：A السيد هديه من السيد استلم السيد

② A → 私

日本語：I：Aさんは私にプレゼントをくれる。

II：私はAさんにプレゼントをもらう。

母語：I：اعطاني السيد هديه

II：استلمت هديه من السيد

③ 私 → 先生

日本語：私は先生にプレゼントをさしあげる。

母 語 : اعطيت للدكتور هديه

④ 先生 → 私

日本語 : I : 先生は私にプレゼントをくださる。

II : 私は先生にプレゼントをいただく。

母 語 : I : اعطاني الدكتور هديه

II : استلمت من الكتور هديه

⑤ 私 → 花

日本語 : 私は花に水をやる。

母 語 : سقيت الورد ماء

## 5. ウクライナ語 (母語)・ロシア語

「あげる」→ 母 語 : д а т и .

ロシア語 : д а т ь .

「くれる」→ 母 語 : д а т и .

ロシア語 : д а т ь .

「もらう」→ 母 語 : о т р и м а т и .

ロシア語 : п о л у ч и т ь .

① A → B

日本語 : I : AさんはBさんにプレゼントをあげる。

II : BさんはAさんにプレゼントをもらう。

母 語 : I : А подарує В подарунок .

II : B o t p r u m a e ̄ p o d a p y u n o k ̄ v i d ̄ A .

ロシア語 : I : A ̄ p o d a p y t ̄ B ̄ p o d a p o k ̄ .

II : B ̄ p o l y u c h y t ̄ p o d a p o k ̄ o t ̄ A

② (A) → (私)

日本語 : I : A ̄ さ ん は 私 に プレゼント を くれる。

II : 私 は A ̄ さ ん に プレゼント を も ら う。

母 語 : I : A ̄ p o d a p y u e ̄ m e n i ̄ p o d a p y u n o k ̄ .

II : Я ̄ v i d ̄ A ̄ o t p r u m y u ̄ p o d a p y u n o k ̄ .

ロシア語 : I : A ̄ p o d a p y t ̄ m n e ̄ p o d a p o k ̄ .

II : Я ̄ o t ̄ A ̄ p o l y u c h a y u ̄ p o d a p o k ̄ .

③ (私) → (先生)

日本語 : I : 私 は 先生 に プレゼント を さ し あ げ る。

母 語 : I : Я ̄ p i d n o s h y ̄ v c h y t e l y u ̄ p o d a p y u n o k ̄ .

ロシア語 : I : Я ̄ v r y u c h y ̄ u c h y t e l y u ̄ p o d a p o k ̄ .

④ (先生) → (私)

日本語 : I : 先生 は 私 に プレゼント を くださ る。

II : 私 は 先生 に プレゼント を い た だ く。

母 語 : I : B c h y t e l ̄ y ̄ p o d a p y u e ̄ m e n i ̄ p o d a p y u n o k ̄ .

II : Я отримаю подарунок від вчителя.

ロシア語 : I : Учитель подарит мне подарок.

II : Я получаю от учителя подарок.

⑤ ①私 → ②花

日本語 : I : 私は花に水をやる。

母語 : I : Я поливаю квіти.

ロシア語 : I : Я поливаю цветы.

## 6. ネパール語

「あげる」 → 母語 : दिनु

「くれる」 → 母語 : दिनु

「もらう」 → 母語 : पाउनु

① ①A → ②B

日本語 : I : AさんはBさんにプレゼントをあげる。

II : BさんはAさんにプレゼントをもらう。

母語 : I : Aजी ले Bजी लाई उपहार दिनुभयो |

II : Bजी ले Aजि बाट उपहार पाउनुभयो |

② ①A → ①私

日本語 : I : Aさんは私にプレゼントをくれる。

Ⅱ : 私は A さんにプレゼントをもらう。

母 語 : I : Aजि ले मलाई उपहार दियो |

Ⅱ : मैले Aजी बाट उपहार पाएँ |

③ 私 → 先生

日本語 : 私は先生にプレゼントをさしあげる。

母 語 : म गुरुजीलाई उपहार दिन्छु |

④ 先生 → 私

日本語 : I : 先生は私にプレゼントをくださる。

Ⅱ : 私は先生にプレゼントをいただく。

母 語 : I : गुरुजीले मलाई उपहार दिनुभयो |

Ⅱ : मैले गुरुजी बाट उपहार पाएँ |

⑤ 私 → 花

日本語 : 私は花に水をやる。

母 語 : म फुलमा पानी राक्छु |

## 7. スペイン語

「あげる」→ 母 語 : dar

「くれる」→ 母 語 : dar a mi

「もらう」→ 母 語 : recibir

① (A) → (B)

日本語： I : A さんは B さんにプレゼントをあげる。

II : B さんは A さんにプレゼントをもらう。

母語： I : A regala una cosa a B.

II : B recibe un regalo de A. (A da un regalo a B.)

② (A) → (私)

日本語： I : A さんは私にプレゼントをくれる。

II : 私は A さんにプレゼントをもらう。

母語： I : A me da un regalo.

II : Recibo un regalo de A. (A me da un regalo.)

③ (私) → (先生)

日本語： 私は先生にプレゼントをさしあげる。

母語： Regalo una cosa al maestro.

④ (先生) → (私)

日本語： I : 先生は私にプレゼントをくださる。

II : 私は先生にプレゼントをいただく。

母語： I : El maestro me da un regalo.

II : Yo recibo un regalo del maestro. (El maestro me da un regalo.)



⑤ 私 → 花

日本語：私は花に水をやる。

母語：Rego las flores.

## 調査資料 2

### 1. 中国語

这节课以前，这三个词在什么情况下使用，一直分不清，容易混淆。通过今天的学习以后，我已经清楚地了解，并且明白如何去使用。我认为这种图解加说明的方法很好，很有效果。这种教学方法应当在留学生日语教学中广为推广。以上是我对这节课的感想。

日本語訳：

この授業を受ける前に、私はこの三つの動詞「あげる」「くれる」「もらう」をそれぞれどんな時に使うのか、はっきり分からず、いつも混乱していました。しかし、今回の授業を受けてから、その使い方がよく分かるようになりました。今回の授業で用いた図式による説明はとても分かりやすかったので、効果もかなりあったのではないかと思います。このような教え方は留学生の日本語の授業にどんどん広めていくべきだと思います。以上、今回の授業に関する私の意見です。

### 2. 中国語

虽然已经学习了一年日语，但对一些基础的文法，总有一些困惑的地方。比如说，关于日文中“あげる”“くれる”与“もらう”的使用方法。“あげる”与“くれる”，中文意思相同，所以对于中国人来说分辨起来十分不容易。因为这两个词只是根据人称的不同而用法上有所区别。我原来也一直被这两个词困扰着，在使用上总是混淆。通过今天的学习，我终于了解到了与“私”相近的人使用“くれる”，与“私”较远的人使用“あげる”的规则。今天的讲课对于我来说，收获颇丰。

日本語訳：

日本語を1年間勉強してきましたが、基本的な文法について、まだ分からないところがあり、いつも困っています。例えば、日本語の「あげる」「くれる」「もらう」の使い方もその中の一つです。特に「あげる」と「くれる」は中国語では同じ意味になってしまうので、中国人にとっては大変難しいです。「あげる」と「くれる」は登場する人物によってその使い方も違って来るため、私もこの二つの動詞にいつも混乱してしまいます。しかし、今回の学習を通して、「くれる」は「私」に近い人物に与える時に、「あげる」

は「私」に遠い人物に与える時に使われるという規則があることにも気づき、やっと分かるようになりました。今日の授業は私にとって、とても収穫のある授業ではないかと思えます。

### 3. 中国語

以前只知道“あげる”“くれる”的中文意思是“给”，但具体的用法不清楚，通过今天详细的比较，现在明白了。刚才上课中应用活跃的的教学方式，反复练习，刚学过的知识运用到会话之中，用图说明，感觉容易理解。

日本語訳：

前から「あげる」と「くれる」は中国語では「給」になるということしか分からず、具体的な用法などについてははっきり分かっていませんでした。しかし、今回の授業で「あげる」と「くれる」を詳しく説明してもらい、今は分かるようになりました。この授業では、練習を繰り返したり、習ったばかりの知識を会話に応用したり、図を使って説明したりして、活発に展開していく教え方だったので、大変理解しやすかったです。

### 4. 中国語

以前日本の老师讲过“あげる”“くれる”“もらう”的区别，我只是大概的理解了他们之间的区别。但是真正做题的时候，还是有些混。再加上我的日语程度不是很好，之前我就没有真正的理解，但是郑老师和日本的老师讲课方式不一样，很新颖。再加上郑老师日语，汉语，韩语，都非常好，在我们不是很理解的时候，他会用我们自己国家的语言，给我们讲解，让我们有一种恍然大悟的感觉，终于真正的理解了“あげる”“くれる”“もらう”的区别，终于不用担心考试的时候，会这个上面丢分了。这种讲课方式大家都很喜欢，也很容易理解。

日本語訳：

前に日本の先生から「あげる」「くれる」「もらう」の区別について教えてもらい、それらの区別についても大体分かっているつもりでしたが、問題を解く時になって、また混乱してしまいました。私の日本語の習得能力が低いため、徹底的に分かっていなかったのもしれません。鄭先生は、日本語はもちろん、中国語も韓国語も上手で、私たちが難

しい単語などが分からなくて、困っている時には、すぐ母語で説明してくれたりして大変感心しました。しかも、教え方も他の先生と違って、とても斬新だったので、私はやっと「あげる」「くれる」「もらう」を区別することができました。ですから、次の試験では、また間違えたりする心配などはありません。とにかく、このような教え方は分かりやすく、みんな好きではないかと思います。

## 5. 中国語

这三个词对于初学者来说的确有些难度，很容易混淆。今天收获不少，能比较明朗地分清，感谢老师。对于人物不同，这三个词的用法也不同。“あげる”和“くれる”的意思虽然相同，但用的地方不同，对于我来说很难分辨，感谢老师是我对这两个词的理解。通过今天的学习，使我对短时间内学好日语充满了信心。

日本語訳：

この三つの動詞は初級学習者にとって確かに難度があり、混乱しやすいです。今回、この授業を受けて、これらの使い方がはっきり分かるようになり、大変勉強になったので、先生に感謝しています。三つの動詞は、登場する人物によって、その使い方も違います。特に、「あげる」と「くれる」は中国語では同じ意味になりますが、場合によって、その使い方が違ってくるため、私にとって、これらを見分けるのは大変難しかったです。しかし、今日の学習を通して、短時間で分かるようになり、日本語学習に自信が付きました。

## 6. 中国語

图与字结合，看起来清晰，理解容易。四种语言对比，思维清晰，感觉比较有趣。举例多，把所有有可能的情况全部举例出来，方便理解。

日本語訳：

まず、図と字（授受動詞）を結びつけるので、はっきりして、理解しやすかったです。次に、（日本語の授受動詞を導入する際）日本語と英語、中国語、韓国語を比較したのも面白くて分かりやすかったです。最後に、できるだけ多くの場面を設けて例を挙げたのも大変理解しやすかったです。

## 7. 中国語

我觉得跟我之前学的比起来，更能理解“给”这个日文要怎样去使用。之前都不会使用，现在我觉得可以使用它。我觉得这节课让我学到了很多。而且可以用这种图表的方式，让我更能听得懂。

日本語訳：

前に受けた授業より今回の授業の方が、「給」に当たる日本語をどう使えばいいのか、よりよく分かるようになり、前は（「給」に当たる授受動詞が）なかなか使えませんでした。今はそれらを使えるようになりました。今回の授業は、大変勉強になり、そして図式による説明でもっと分かるようになりました。

## 8. 中国語

图文结合比以前更容易懂。更形象。以前学习“あげる”“くれる”“もらう”时，全靠例句，自己理解。而这次新颖的授课方式让我耳目一新。上课时气氛活跃，能让我们在学习的时候，保持开心的心情，能使我们对所学习内容有更深的印象。希望以后，还能得到老师的授课，帮助我们更深刻地牢记所学内容。

日本語訳：

図式による説明はとても具体的で以前より更に分かるようになりました。以前「あげる」「くれる」「もらう」を学習する時には、ほとんど例文に頼る理解でしたが、今回受けた授業はとても斬新で、本当に視野を広めさせてもらいました。今回の授業は雰囲気も大変よかったです。楽しく勉強ができ、教えてもらった内容ももっと印象に残るようになりました。今後、このような授業をまた受け、教えてもらった内容がしっかり覚えられるようになればと思います。

## 9. 日本語（原文）

日本語を勉強する時、「あげる」「もらう」「くれる」は難しいです。問題の意味は理解が不徹底です。今の授業の方法は以前の方法より覚えやすいです。図があります。理解しやすいです。

## 10. 韓国語

“あげる” “くれる” “もらう” 을 처음배울때 솔직히 매우 헷갈리는 부분인데 이번수업을 받고나서 어떻게 정확하게 쓰는지를 알수있게 된것 같습니다.그래서 많은 도움이 된것같아 다행이라고 생각합니다.수업 시작하기전에 국가별로 이해를 위해 자료를 준비한것도 이해하기가 쉬웠던것 같습니다.일본어은 어떤것이 특별하게 틀린것인가를 알고 배워서 이해가 쉬웠던것 같습니다.

日本語訳：

「あげる」「もらう」「くれる」を初めて勉強する時には、正直言ってとても混乱しやすい部分でしたが、今回の授業を受けてからは、どう正しく使うのか分かるようになったような気がして、大変助かり、とてもよかったですと思います。授業を始める前に、(学習者の)理解のため、国別に(「あげる」「もらう」「くれる」の)資料を用意してくれたのも大変分かりやすく、日本語では何をよく間違えるのかが分かってから、(授受動詞を)習ったので、大変理解しやすかったのではないかと思います。

## 謝辞

本論文は、著者が拓殖大学大学院言語教育研究科に入学後、7年間に渡る研究成果をまとめたものです。本研究を遂行するにあたり、多くの方々にお世話になり、ここに深く感謝の意を表します。

指導教授の石川守先生には、本研究の実施の機会を与えていただき、その遂行にあたって終始、ご助言とご指導をいただきました。その他に、日本語教師としての知識や自信もつけてくださり、ここに深謝の意を表します。また、博士前期課程の3年間をご指導していただいた阿久津智先生には、特に、投稿論文や修士論文、及び博士論文の校正にはご丁寧にご指導していただき、心から感謝しております。更に、遠藤裕子先生には、突然のお願いであったのにも関わらず、多忙の中、論文を読んでいただき、いろいろアドバイスをいただいたことに感謝しております。

それから博士論文の執筆にあたり、時には、助言やアドバイスをしてくれたり、時には、悩みを聞いてくれたりした同じ研究室のみなさん、それから本研究の調査にご協力いただいた留学生のみなさんにもお礼申し上げます。

そして、日本に留学することを決めた時には、誰よりも応援してくれたり、日本の生活に慣れず、辛かった時には、誰よりも励ましてくれたりして、いつも心の支えになってくれた両親に深く感謝します。遅いかもしれませんが、これから少しずつ時間をかけて恩返しをしたいと思います。

最後に、みなさまのご指導、ご支援、ご協力がなければ、本論文は誕生しませんでした。ここに改めて、厚く謝意を表し、謝辞と致します。

2013年3月

鄭 光峰